
永遠の悪魔と魔法少女達の物語

sora

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の悪魔と魔法少女達の物語

【Zコード】

N6170T

【作者名】

sora

【あらすじ】

少年は地球の記憶を打ち込まれた。故に少年は一度全ての記憶を失つた。しかし骸の戦士が少年を救い出し、新たに記憶を与えた。やがて少年は成長し、全てを知る。

プロローグ（前書き）

初めて書きます。正直不安一杯です。余り書く暇が無いので、不定期になると 思います。

プロローグ

コツコツ。

無機質な廊下を歩く一人の男。この研究所には似合わない白いスース姿に同じく、白い帽子を被っている。それもそのはず、なんせ、男はこの研究所に所属する人間では無く????? 侵入者だからだ。

「さて、”あの子”は一体何所にいるのやら」

男はこの研究所に侵入した目的はある子供を救い出し欲しいという依頼だ。が思つたよりも情報が入らず、研究所の場所と簡単な見取り図しか入手出来なかつた程だ。

「とりあえず風漬しを探す他無いな」

その後、男はあちこち探し回つた（もちろん、研究所の人間には見つからないよう（に）が、めぼしい場所には”あの子”はいなかつた。
「不味いな。いざと言う時は”これ”を使うかもしけれないな」
依頼仕事で使わなのが俺のポリシーなんだがな、と付け加えて、”これ”を見た。

”これ”は黒いUSBメモリの形をしておりドクロの形で”S”と書かれていた。

「・・・・ん？」

あるドアの前に立つと、中からキーボードを打つ音がしてきた。しばらく聞いていると、

「・・・・・いつまでいるの侵入者さん？開いているから入つて来なよ」

「！」

男は驚くほか無かつた。こういった侵入系の仕事もそれなりにやつて、場数も踏んでいる。こんなにあつさつと気づかれるとは思わなかつた。

男は意を決して中に入ると、

「こんにちわ」

少年がいた。五歳くらいの子供が。

(こ)の子は・・・・・

見間違える筈がない。何せ一年くらい前の写真通りだからだ。そう
一年くらい前だ。

(どういう事だ。あまり成長しないのはわかるが、これは成長して
いない?)

「・・・で、あなた何しに来たの?」

「・・まず、どうして俺が侵入者だとわかつた?」

体の件は置いといて、ひとまず男は自分が気づかれた事を少年に聞
いた。

「うーん。質問に質問を返されるのは好きでは無いんだけどなまあ
教えてあげる」

座っていた椅子からよつと降りて部屋の中をぐるぐる歩き始めた
少年を目に男は部屋を見渡した。

そこは壁にでかいモニターが埋められており、ほかにもたくさんの中
機器があった。その中には男が持っていたUSBメモリに酷似して
いる物がたくさんあつた。

(やはりこの子が)

「まずボクは絶対音感つてのを持つており、結構音に敏感なんだ。
あなたがこちら辺を通る時違和感を感じたんだよ」

「違和感?」

「まず足音がならないよう極力小さくしていた。ここの研究員は
そんな事しないしね。それにここのドアの前にしばらく立ち止まつ
ていたしね」

長年の経験が仇になるとは男は少し驚いた。

「さてボクの予測はこれまで。であなたは何しに来たの?」

「・・・おまえさんをここから救い出したきた」

「?救う?何故?」

「!?」

まさかそう返されるとは思わなかつたのか、男は驚いたが直ぐに平

静を取り戻した。

「・・おまえさん」から出たくないのか？」

「んーどうだる、良くなきゃない」

「わからない？」

「うん。自分で何かをしたいとは思わないし、そもそも何がしたいのかわからないから」

(この子は・・・)

「あつでも一つだけある」

「・・・何だ？」

男は訪ねると迷い無くいった。

「――――星が見たい」

プロローグ もり一の始まり（前書き）

ようやく投稿してもむちゅくちゅく短い。なので見てください。

なんだかこの話をしたいなと思い書きました。

プロローグ もう一つの始まり

「…………のは…………なのは！」

雪が降る世界、真っ白な地面はとても神秘的で美しい。人の血が垂れていなければ。

「なのは！なのはしつかりしろ！なのは！」

紅いゴロスリードレスを着た少女……ヴィータは胸元から血を流している少女……高町なのはに必至で呼びかけている。

「大丈夫…………大丈夫だから」

対するなのはは意識が朦朧としているのか、うわ言のように大丈夫と言っている。

どうしてこうなった。ヴィータはこの状況になるまでを思い返していた。

管理局の任務の帰り道の事だった。任務も終わり久しぶりに会ったなのはと軽く話し合っていたヴィータは、妙な気配を感じた。歴戦のベルカの騎士としての長年の経験から何かいる。ヴィータはそう感じた。それをなのはに伝えようとした時、

グシャ

音が聞こえた。まるで肉を貫くような音。

ヴィータが音のした方を向くと、目を疑つた。なのはが胸に刃が突き刺さっているからだ。

それはなのはから刃を抜くと、なのははゆっくりと地面に倒れ込ん

だ。

それは蠍のような形をしているロボットだった。

「な・・・なのはあああ！」

ヴィータはなのはの名前を叫びながら、蠍型ロボットを自身の愛機・グラーフアイゼンで叩き潰し、なのはに駆け寄った。

「」頭に戻る。

「医療班何やつているだよ・・・・早くしろよ・・・・」
「死んじやうよ！」

ヴィータが部隊の他の隊員に叫ぶが、他の隊員も、先ほどの同型の蠍型ロボットと相手しており、ヴィータ達の方へくる余裕がないのだ。

ガシャッガシャッ

機械音に気がつき辺りを見渡すと、蠍型ロボットが五体ほど囲んでいた。

普段のヴィータだつたら直ぐに片がつく相手だが、なのはが重傷を負い、その影響で、ヴィータの思考回路も一部麻痺していた。

（くわーせめてなのはだけでもー）

そう思い、なのはをかばうように抱きしめた。

だが、
どさー

「・・・・？」

まるで機械が落ちたような音が聞こえ、その音がした方向を向くと、ヴィータは言葉を失った。

・蠍型ロボットの一体の頭から上がない正確には、切り落とされてい

た。

そしてその後ろには人が立っていた。

全身真っ白で、頭に山型の触覚を持ち、さらに黒いロープを身に纏っている。

「・・・」

その者は、無言でさつき蠍型ロボットの頭を切り落としたであろうコンバット型ナイフを逆手に持ち、残りの蠍型ロボットに向かっていった。

「おひおじーーー」

ヴィータの声を無視し、その者は蠍型ロボットの鋭い一撃をかわし、コンバット型ナイフを一突きした。

さつせとナイフの抜き、後ろから迫ってきたロボットの攻撃を見ずによけてかわしてそのまま距離を取った。

「・・・・・何かつまらないね」

「・・・・・・は？」

突然その者がつぶやいた。声は中性的で、男か女かいまいちわからぬい。

「あまりにも弱すぎる。これで終わらせよ！」

そう言つと、その者は左手をすつとロボット達に向けた。すると、

「空間圧殺」

バコン！

いきなりロボット達が見えない何かで押しつぶされた。

「なつ何だ?..」

ヴィータは訳もわからず困惑しているが、ロボット達は煙を上げて機能を停止していた。

その者はそれに目もくれず、まっすぐヴィータ達の元へ向かった。

「・・・誰だよおまえ」

自分達の直ぐ近くまで来たその者を睨みつけるヴィータ。

「・・・」

その者は黙つて一人を見る。

「・・・来たか」

「えつ?」

その者は突然別の方向を向くと、ヴィータもつられてそちらを見る。他の部隊員達がロボットを倒し、こちらに向かってきた。

「じゃあね」

「あつおーーー」

その者は、それを確認すると、一人に背を向けて、どこかに行ってしまった。すると、

「ま・・・待つて」

なのはがその間に声をかけた。

「…? なのは大丈夫か?」

「…・・・その子の言ひとおりだよ。しゃべらない方がいい」

「…・・・あなたの名前は?」

二人の言葉を無視し、なのはは言葉を紡ぐ続ける。

その者ははあとため息をつきながらもなのはの問いに答えた。

「エターナル。仮面ライダー エターナルだ」

「・・仮面ライダー・・・エターナル」

なのははその名前を覚えるように繰り返していた。

「・・またね・・・」

そつまつとエターナルは今度こそ背を向けると、ふっと消えた。

これが高町なのはとヴィータと仮面ライダー エターナルの最初の出会いである。

プロローグ もう一つの始まり（後書き）

いかがでしょうか？ちなみにヒロインはなのはでも、ヴィータでもあります。お楽しみに

EPISODE 1（前書き）

なつ何とか書けた・・・とりあえず毎週土曜日か日曜日投稿としています。

EPISODE 1

あの日の事件、高町なのはは、大きな怪我を負った。医師からは一度と飛べないかもしない。そう宣告されたのはだつたが、再び飛びたい。そしてまたエターナルに会いたい。その思いを胸に、つらいリハビリを乗り越えて、ついに完全に復活した。

そして現在。

「ひつくひつく。お父さん、お姉ちゃん…？」

火が燃え上がっているところ、一人の少女が泣いていた。少女は姉と一緒に休暇を利用して父の所へ遊びに来ていた。しかし途中、空港が大火事にあり、少女は一人取り残されていた。

「いやだよ……誰か助けてよ……」

少女の頭上から女神像が根本から崩れて、落ちてきた。少女はもうだめかと思い、目を瞑つた。しかし……

「…………？」

いつまでたつても衝撃が来ないので恐る恐る目を開け、女神像の方に目を向けると、黒いローブを身に纏つた白い仮面の者……仮面ライダーエターナルが女神像を両手で支えていた。

「……ねえ、悪いんだけど早くそこから退いてくれるかい？」

「えっ？」

「いやね？このまま投げ飛ばしてもいいんだけどさ、そうすると余

計な被害出そうだから、やめときたいんだ。だからねそこから退いて欲しいんだ」

「あつはい・・・

少女は慌ててその場からずれるのをエターナルが確認すると、ゆっくりと女神像を地面上に降ろした。

「さてと・・・どうしようかな」

「・・・あつあのー」

頭上から声が聞こえ、エターナルはそちらに顔を向けた。するとそこには以前自分が助けた、少女・・高町なのはがいた。

高町なのはは、八神はやての誘いで、旅行に来ていた矢先、空港が爆発。大災害に発展したと聞き、はやては現場の指揮、なのはとフエイトは救助活動をしていた。

なのはは取り残されている人間がいるかどうか探していると、女神像が崩れ、女の子が下敷きになりそうになっているのを見て、あわてて止めようとしたが、それよりも先に何者かが女神像を受け止めた。呆然とそれを見つめていると、支えている者と少女がなにやら話して、少女は横へとずれて、その者は女神像をゆっくりと、床に降ろすと、女神像に隠れて見えなかつた姿を見ると、なのはは、驚いた。その者ははずつと自分が探していた人・・仮面ライダー エターナルだったから。

「・・・あつあのー」

「・・・高町なのはか・・」

エターナルは静かに少女の名前を呼べと、なのはは「ひかり」降りてきた。

「えっと…あのその…」

言葉にしたいけどうまく言い合わせられない。そんな感じだった。

「…・・・・何？」

「あの！・・・あの時助けてくれてありがとう」

ずっと言いたかったこと、それがよひやく、いえたのだ。

「…別にいいよ」

そんな一人をエターナルに助けられた少女ハ不思議そうに見ていた。

ガラガラ！

「！！」

崩落の音が聞こえエターナルとなのはが上を向くと、かなりの大きさの瓦礫が落ちてきた。

「きやああー！」

「つー！」

少女は悲鳴を上げ、なのはは瓦礫を破壊しようと自身の愛機・・レジングハートを上に向けた。しかし、

「空間切断」

S E V E R

右手を上げて、指をくいっと動かすと、キンと音がして、

ガラガラ！

瓦礫が見事に真っ二つになつており、三人をよけて、落ちてきた。
そんなエターナルを見て、なのはは驚いた。

（いついまの一体何をしたの？魔力は感じなかつた。レアスキル？）

「いつまで隠れているつもりだい？さつやと出できなよ
「えつ？」

エターナルの言葉に困惑するなのは、この場に自分達以外いないはず。

「・・・気づいていたのか」

すると、どこからか異形の者が姿を現した。

「ひつ！」
「なつ！？」

少女は小さい悲鳴をあげ、なのはも驚きを隠せなかつた。

なのはも今までいろいろな魔法生物を相手してきたが、こんな生物は見たことなかつた。知らず知らず、なのははレイジングハートを握りしめていた。

そんな二人をかばうようにエターナルは前へと出た。

「まさかドーパントが関わっているとは、この火災の原因は君かい？」

「いや、確かにここで暴れてやろうと思つたが、先にここが爆発してな、俺はそれに便乗したに過ぎない」

「ふーん」

エターナルが異形の者・・ドーパントにこの空港火災をやつたかと聞くとドーパントは自分では無いと言つ。それに対してもエターナルはその答えにさして興味もわからなかつた。

「まあそんな事はどうでもいい。それより貴様だ。エターナル」

「ん？ ボクかい」

「ああ。本来おまえを誘き出すために、火災を発生させるつもりだつたのだから」

「・・と言つ」とは君は”組織”のメンバーかい？」

「ああ」

やや間があつてエターナルが言葉を発した。

「・・なるほどね。組織も随分と必死になつてきただものだ」

少女となのははこの一人が何を言つてゐるのかわからず、ただ困惑していた。

「ふん！ 命さえ無事ならばいいといつ命令だからな！」

言つやいなや、ドーパントは火炎弾をエターナルめがけて打ち込んできた。

少女の方は頭を抱えてしゃがみ込み、なのはは障壁を作つとしたがそれよりも先にエターナルは一人を抱き寄せ、ロープで一人を包み込み後ろにしゃがみ込んだ。

ドカーン！

大きな爆発音が聞こえて、三人がいた場所は煙がモクモクと立っていた。

「はっはっはっ！俺にかかるばこんなも・・ん」

高笑いしていたドーパントは、煙が晴れた場所を見て絶句した。何故ならば、

「ふむ、中々良い攻撃だ。しかしボクを倒すには不十分だ」

全くの無傷のエターナルが立っていたからだ。なのはと少女も怪我は無くエターナルを呆然と見ていた。

「ばつ馬鹿な！俺の攻撃を喰らって何で！？」

「やれやれ、エターナルの特徴を知らないのかい？それで良くボクと戦おうと思つたね？」

エターナルはあきれたように首を振つた。

「くつ！ま・・まだだ！まだこんなもんじゃねえ！」

「いや、もう終わりと思つて良い」

「えつ？」

気がついたらいつの間にかエターナルはドーパントの後に回り込んでいた。そして手にはコンバット型ナイフ・・エターナルエッジがあつた。

「こつこつの間に

「君が知る必要は無い」

ザシュー！

言ひやいなやエターナルはエターナルエッジをドーパントに斬りつけた。

「ぐはー。」

たまらうドーパントは後ろによりけるが、すぐさま体勢を立て直すが、

「どんざん行くよ

「なつー。？」

なんとエターナルは再び、ドーパントの後ろに回り込んでいた。

「ばり馬鹿なー。」

ザシュー・ザシュー・

今度はエターナルは何も言わずにドーパントを一度斬りつけた。

「ぐはー。」

そつからはワソサイドゲームだった。またドーパントの後ろに回り込み、再び斬りつけた。その繰り返しだった。

そんなやつとり何度かやった後、

「はあはあ・・・」

ドーパントは荒い息を吐いており、対するエターナルは息も乱れてないようだ。

「わざと・・・やがてはうだして、やつ終わらせてや

エターナルはそう言つて、腰に巻いてある赤いドライバーからメモリらしきものを抜き出し、エターナルエッジに差し込んだ。

ETERNAL MAXIMUM DRIVE

音声と共に軽快な音楽が流れ、エターナルエッジの刀身にエネルギー
ーがどんどんたまつてくる。

「クソがああああああああ！」

自棄になつたのか、ドーパントは何も考えず、にエターナルに突つ
込んできた。

「馬鹿だね」

そんなドーパントを見て、エターナルはエターナルエッジを構えた。

「ウチの仕事は仕事だ。」

叫び声を上げながら殴りかかるドーパントにエターナルは、腰を低くし、殴りかかると同時に、

ドーパントの腹を切りつけた。

「が、あつ」

「田には田を歯には歯を、悪には厳選たる裁きを」

「ぐあああああ！」

ドーパントは叫び声を上げ、爆発した。そして煙が晴れ、そこにいたのは、

「え・・・・人間！？」

そう怪物だと思われていた者は人間の男だつたのだ。

(・・・・・は、なのは！)

(ふえフェイトちゃん?)

突然自分の親友から念話が来て、驚くのは。

(良かつた・・・念話が通じないから心配したんだ)

(えつ？)

(たぶん通信を妨害する何かが働いていたんだと思つ)

そんなやりとりをしていると、

ガラガラ！

「・・・・・まづいな・・・」こも崩落が始まつたな・・・高町な

のは

「はつはい？」

エターナルに呼ばれて、振り返るのは。

「とりあえずその子つれてってくれない？」

「えっ？」

「いやね？ボク、こいつを連れて行かないといけないんだ。だから
その子をお願い」

そう言いながらエターナルは男を担いだ。

「じゃ」

「まつ待つて！」

なのはは、エターナルを呼び止めた。そんななのはを見てエターナルは仮面の下で微笑した。

「また・・・後でね・・・」

「えっ？」

そう言つとエターナルは今度こそ消え去つた。

ホテルの一室、空港での救出作業を終えた高町なのはとフライイト・T・ハラオウンにハ神はやは自分の中を語ると、一人は快く承諾してくれた。すると通信が入つた。

「三人とも今大丈夫か？」

「クロノ君？」

かけてきたのはフライイトの兄、クロノ・ハラオウンだった。

「どうしたのクロノ？」

「実は、なのはが見た生物についてだ」

「えっ？ 何でクロノ君が知っているの？」

その件はまだクロノの方にはいつていなはずだ。なのにクロノは知っている。

「実は・・・その生物専門の組織から連絡があつてな。なのはが会つたと言う事を聞いたらしく、是非とも会いたいとの事だ」

「もしかして・・・・・エターナルさん！？」

「さあ・・・・僕は良くわからないけどとにかく会いたいそつだ」

「それで・・・・一体どこの組織なの？」

「・・・・・R e - C ? D E と言う組織だ・・・」

EPISODE 1（後書き）

どうでしょ？ 戦闘シーンは正直な所、自分でもダメだと思いま
す。どうか理解の方を。

自分はC?DE:BREAKERの中でも捜し者が多いです。絶対
空間って本当に近くと思うんですけどどうでしょうか？

EPISODE 2 (前書き)

先週より早く書けました。今回と次回は説明話みたいな物です。

EPISODE 2

「それでクロノ、Re-C?DEって組織って何なの？私聞いたことないんだけど」

クロノに呼び出されて、管理局本局に来た三人の少女内、金髪を背中辺りまで伸ばした少女・・・フェイト・T・ハラオウンが義兄にRe-C?DEについて聞いていた。

「・・・実を言つと、僕自身もRe-C?DEという組織については殆ど知らないだ」

「どういう事や？クロノ君が知らんというのは」

クロノの言葉に反応した、茶髪のボブサップ型の髪型の少女・・・八神はやてがクロノに質問した。

「Re-C?DEは、僕自身つい最近知つたばかりなんだ。管理局に協力している組織で、メンバーは七、八人。そしてなのはが遭遇した例の生物の対処をしている。それぐらいかな、僕が知っているのは」

「情報が少ないな？」

「まあな」

「ところでクロノ君、一体どこに向かっているの？私あんまりこっち来たこと無いんだけど」

三人の少女の最後の一人サイドポニーの少女・・・高町なのはがクロノに質問した。

今現在四人が歩いているところは、殆ど人が通らない場所だ。事実、殆ど人が見当たらぬ。

「…………Re-C?DEは情報を殆ど出さず、通信手段も画面越しだ。しかし今回君たちに面会を求め、さらにRe-C?DE側から人を寄越すと言つたんだ。あまり人目につきたくないんだ」「なるほど」

クロノの言葉から真意を理解した三人はそのまま黙つてクロノについて行つた。
しばらく歩いていると、あるドアの前に立ち止まつた。

「…………」

そう言つとクロノはノックした。

「…………誰だ？」

男の低い声がした。

「管理局提督クロノ・ハラオウンです」

「…………入れ」

「失礼します」

クロノ達が部屋に入ると、そこは応接室みたいな場所でソファに人が座つていた。その者は、ジャケットを着ており、フードですっぽりと顔を隠しているので、顔はわからない。先ほどの声からして男だろう。

「そこの三人が…………？」

「はい。高町なのはトフェイト・T・ハラオウンとハ神はやてです」

「…………そつか」

(・・・・なのはこの人がエターナル?)

(「ううん。多分違うと思う。声とか口調が全然違うもん」)

「・・・・さて行くか」

おもむろに、男は立ち上がるとそう言った。

「そうですかではお願ひします」

「え?」

クロノは理解しているようだが、三人娘はわかつていないうだ。

「これから彼がRe-CODEの本拠地に連れてってくれるんだよ。
君たちだけね」

そんな三人にクロノは説明する。

「だけつて・・・・クロノ君は行かんの?」

「・・・君たちだけつて話だからね。僕の案内はここまで」

「・・・・そろそろいいか?」

「ああ、すみません。お願ひします」

「では・・・・」

男はジャケットの中から赤いドライバーのような物を取り出し、腰に巻いた。

「それってエターナルさんのと同じ・・・・」

そう、男がつけたものはエターナルがついている物と同じものだつた。そんなのはを無視し、さらに男は銀色のくつと書かれているUSBメモリらしき物を取り出し、スイッチを起動した。

『NONE』

男は右腰についている黒いスロットらしき所にメモリを挿入した。

『ZONE MAXIMUM DRIVE』

「では・・行くぞ」

「ど・・・」

その言葉は続かなかつた。次の瞬間男と三人は忽然と消え去つたのだ。

「・・・・・無事に帰つてこいよ三人とも」

管理局の人間のほとんどが知らないRe-C?DEの本拠地に行つた三人を心配してつぶやくクロノ。その言葉に誰も答えなかつた。この後クロノはRe-C?DE側に三人もの知り合いがいたのを知るがまた別の話。

「・・・・・」

三人と男は管理局の廊下では無いところに立つていて。何故ならばそこはどこまでも行つても白い廊下で、管理局にこんな場所無いからだ。

「・・・・・来ましたか」

後ろから声がした。三人が振り返ると青年が一人立つていて。

褐色の肌にパーカーを着ておりフードを被つていてどこか氷のよう

に冷たい雰囲気がある。

「・・・・あいつは？」

「いつもの場所に」

「・・・・ならこの娘達の案内を頼む。俺は”いつ”を返しに行くのとつこでに連れてくる」

「・・・・わかりました」

そう言つと、黙はぢこかに歩いて行つた。

「では・・・・つこてきて」

「え、あつはこ」

そう言われ三人は青年の後をついて行つた。

「あの・・・お名前は？私は・・」

「知つている。高町なのは、フロイト・T・ハラオウン、八神はやてでしょ？」

なのはの言葉を遮り言つ青年。考えて見れば自分達はRe-C?D Eに呼ばれたのだから、知つているのは当然か。

「俺はRe-C?DE?O4」

「いや、あの・・お名前を・・」

「後で教える」

「そつせうですか」

それから無言でじぎじぎ白い無機質な廊下を歩く。その途中何度も少し揺れを感じた。

「・・あの」

「・・・何?」

「いじつて・・・もしかして乗り物か何かですか?」

フェイトがためらいがちに青年に質問Re - C? DE - 04した。すると青年は歩くのをやめて、振り返り少し驚いた風にフェイトを見た。

「驚いた・・・よくわかつたな。確かにここはRe - C? DE - 04所有する航空艦の中だ」

「やっぱり。これなんだか動いている感じがしているのだもの」

「まあ。それも含めて後で説明する」

そう言つと青年は再び歩き始めた。そしてしばらく歩くと、行き止まりになりドアがあつた。青年は何も声をかけずドアを開けた。そこは会議室みたいなところで部屋の真ん中に大きな機械的なテーブルが置いてあり、左右に椅子が三つずつあつた。さらに上座にもう一つ椅子がある。現在そこには三人座つている。その内一人は、ローブを身に纏つてフードを被つてるので顔はわからない。最後の一人は、ピンク色の髪を腰あたりまでのばしており、歳はなのは達と変わらないだろう。さらに顔を美少女その者だ。

「あれ~ゆつきーが連れてきたの?ヴィンは~?」

「NONEのメモリを彼に返しに行きました」

「なるほど~じゃあ、王様連れてくるんだね~?」

「そうなりますね」

「へ~。あつあなたたちが例の~こつちに座つて」

ピンク色の髪の女性はテーブルについているコントロールパネルらしき物を操作した。すると、地面が開き、椅子が三つ出てきた。

「さあさあ。座つて~」

「はあ」

三人はおそるおそる、椅子に座った。

「よろしくね～私は守護神のRe・C?DE・05Hミリオンだよ～」

「Hミリオン、あの人の許可無く本名を明かさない」

「いいじゃん～この子達大丈夫でしょ～？」

「はあ」

どうやらこの青年はピンク色の髪の少女・・・Hミリオンの事で苦労しているようだ。Hミリオンは我知らずといった感じで三人に話しかける。

「ねえねえ～三人はどんな仕事しているの～彼氏とかいる～？」
「えっと」

三人が返答に困っていると、ドアが開いて人が入ってきた。

「Hミリオン。お客様を困らせないの」
「え～王様、そんなつもり無いけど」

入ってきたのは二人の人間だ。一人は先ほどの男だろうか。今はジヤケットを脱いでいた。髪の毛は逆立つており、顔は強面の青年だ。最大の特徴は左顔に瘢痕がついていることだ。

そしてもう一人はローブを先の二人と同じく被っていた。背丈はなのは達と変わらないか。ローブの者は上座の席に座り、瘢痕の青年も椅子に座った。

「さて改めまして、Re・C?DEによつこそ。高町なのは、フエ

イト・T・ハラオウン、ハ神やはて

「あつはい。初めまして。えつと・・・」

なのはが、名前がわからず、困惑していると、上座から一番近い席のなのは達から見て左側に座っているロープを被っている者がふるふる震えて、いきなり席を立った。

「ああ、もうじれったい！ ねえこれもう脱いでいい？」

「えつこの座・・・・・」

「まつまさか」

「つそやひ・・・・・」

なのは達が声の主に心当たりがあり、困惑していると、

「うんまあ良いんじゃない？ ていうか僕の声聞いてもわからないんじゃしようがないし」

「そつそうだね」

そつとおもむりにロープを被っている三人はロープを脱ぎ去った。そしてその者達の名前をなのは達は順番に言つた。

「れつ零君？」

「アリサ・・・・？」

「すずかちゃん？」

「やあ」

「全く、気付くの遅いわよ」

「あつあははははは

驚く二人に銀髪にハーフな顔立ち、眼鏡をかけている少年・・・・夢埜零は挨拶をし、金髪の少女・・・・アリサ・バニシングスはため

息をつき、紫色の髪の少女・・・月村すずかは苦笑していた。

夢埜零、アリサ・バニングス、月村すずか。三人ともなのは達にとつて小学校からの親友兼幼なじみである。

「落ち着いた？」

『すっすみません』

突然に三人の幼なじみがいた混乱したなのは達だがアリサの鶴の一聲で何とか落ち着いた。

「全く・・・・」

「まあまあ」

アリサはため息をつき、そんなアリサをすすかはなだめていた。

「でも何で零君がここにいるの？」

「そや。一体どうなつておるの？」

「それについてもこれから説明するのさ。さてとすーちゃん

「はい」

零が眼鏡の奥から真剣な目を送るとすすかはエミリオンと同じく、テーブルについているコントロールパネルを操作した。すると、部屋が薄暗くなりテーブルが発光し始め、モニターが空中に出現した。そのモニターの中には瘢痕の青年やエターナルが使っていたUSBメモリにしている化石みたいな形をしている物が映っていた。

「これって・・・・」

「これはガイアメモリ。地球上のあらゆる記憶を宿しているんだ。現在これらが大量にミッドチルダにばらまかれているんだ。もつと

も、最近は地球以外の星の記憶も宿り初めているみたいだけど……

「そして、これを人体に挿入すると超人的なパワーを宿したドーパントになるんです。なのはちゃんが遭遇したのは、『マグマ』の記憶を宿した、マグマドーパントなの」

「あれが……」

「そんなガイアメモリ犯罪に対応しているのが僕たちRe-C?D Eなんだ」

「そなんなんだ……でも何で零君達が？」

「話せば少し長くなるんだけどね……今は少し省かせてもらいつよ。僕の義父さんの仕事知っているよね？」

「うん。莊吉さんの仕事やろ？ 確か……探偵家業しているんやつたよな」

夢埜莊吉。零の義父で、ハードボイルドな渋いオッさんと言つのが正しい表現だろう。探偵家業と言つても殺人現場に赴き、捜査するわけでも無く、依頼人の願いを聞き届け、依頼を完遂するのが莊吉の仕事だ。零には訳あって、両親がいない。そんな零の本当の両親の知り合いの莊吉が零を引き取つたと、なのは達は聞いていた。

「義父さん何だけど……実はガイアメモリ事件の第一人者なんだ」

「え！？」

「でも莊吉さんってミッドに来たこと……」

「元々ガイアメモリは地球で作られていたんだ。そして僕たちは、

地球のガイアメモリ製造工場を完全に破壊したんだ」

・ けど

「そう。連中ははどうやらリッシュ・ナルダにいる犯罪者達と連絡を取り合っていて、僕たちが破壊していたときにはすでにデータやらを持つて逃げ去った後だつたんだ」

そんなん

「それから、地球にはまだガイアメモリが残っていたから義父さんはそれに対処。僕はすーちゃんはアーチャンと一緒にミッドで、ガイアメモリ犯罪の対応。管理局を交渉。そして徐々に仲間を増やして行き、Re-C?DEが誕生したんだ」

ヘーでも何でアリサとすすかはRe - C? DEに?「

私達以前がイノフモリ事件に巻き込まれて

それを嘗ては思ひでござりませんが、お情を聞いて、三條へござるれば

二
七
九
力
八
力
日
言
一
木
林
川
至
學
千
三
仁
九

アーヴィングとせやひの言葉にうなづくのはどうもイイ。

「『めんね。まだあの頃は魔法と言う物は知らなくて、それに”組織”は秘密を知った者に何をするかわからないし」

あの…・・・零君、”組織”って？

カイアメモリを製造していく

”ヒカル”と並んで組織た

EPISODE 2 (後書き)

いかがでしょうか? 仮面ライダーWでのミュージアムをC?DE: BREAKERのH?テンにしてみました。Re-C?DEと敵対していますし。

なのは達のデバイスの声が無いのは多めに見てください。人物が多すぎると大変なので・・・

試験勉強をそろそろ始めないとけなくなるのでもしかしたら更新が遅くなるかもしれません

EPISODE 3 (前書き)

なんとか書けました。内容が自分でも書いて行く内よく分からなくなつてきました。

「エーテン……？」
「そつ。奴らガイアメモリを使って、この世にエーテンを作りうとい
ているらしい」

その楽園がなんのかはわからないけど、と零は言った。

「そうなんか……あれ? なあ零君」
「何だいはーちゃん?」
「零君は何年くらい前からミッドで活動していたんや?」
「え? うーん……大体、小学六年の頃からかな」
「そうなんか……」
「どうしたの、はやでちゃん?」
「いやな、そんぐらい前から活動していたんやから、噂の一いつや一つ
あってもおかしくないと思つてな」
「あつ」
「確かに……」
「ああと零はつぶやき、言つた。

「そりゃ僕たちが秘密裏に処理しているからだよ。そして、管理局
に頼んで不自然に見られないように情報統制してもらつたりしてい
るんだ」

三人は唖然とした。何せそんな事ができるのは管理局でもトップに

位置する者だからだ。

「セド、それは今は置いておくよ。ドーパントの事については少し詳しく述べるよ」

零は、すすかに会話をすると再びモーターにいろいろなドーパントが現れた。

「セド、セツキも説明したけどドーパントは様々な星の記憶を宿している。そのためドーパントの種類は多種多様。色々いる。加えて、ドーパントは基本的に魔法が殆ど効かない」

「えつー?..」

なのはが驚きの声を上げる。はやてやフュイトも同じ気持ちだらう。何せ管理局は拳銃やミサイルと言つた、魔法を使わない兵器を禁止し、魔法を使つていてる。その魔法が効かないと言つならば驚く他無い。

「地球で製造されたいた頃は、おそらくそんな事は無かつたんだろうけど、どうもミッドチルダで製造されるようになつてから機能がアップしているようなんだ」

「やうな・・・あれ、でもじやあ零君達はどうやって戦つているの?..」

やうに零はクスリと笑う。

「ふつふつ、皿には皿を歯には歯をガイアメモリにはガイアメモリをつくな」

そつ言つと零は懐からあるものを取り出した。それは・・・・・

「れつ零、それ……ガイアメモリ?」

ガイアメモリだった。それは、モニターに映っていたガイアメモリよりも綺麗なフォルムをしており、端子は青色しているEと書かれたメモリだった。

「そうだよ……ああでも安心してこれは純正されたメモリで、これ使つてもドーパントには簡単にはなれないから」

「そう簡単に……?」

「まあそれは置いといて、ドーパントに勝つためには同じガイアメモリを使わないといけないんだ。そして僕たちは専用のドライバーを介してメモリを使つている」

「なるほど……あつそうだ零君」

「何? なーちゃん」

「あのエターナルさんって一体誰?」

「ん」

「え?」

なのはが質問すると、零は自分を指さす。なのはは意味がわからず、聞き返すとアリサはこめかみをぴくぴくさせ、すずかはそれをなだめている。

はあと零はため息をつき、先ほど取り出したメモリのスイッチを押す。

『ETERNAL』

「えつ?」

その音声になのはは聞き覚えがあつた。先日聞いた音声だからだ。

「 もつもしかして・・・・・」

「 零が・・・・・」

「 ・・・仮面ライダー エターナル?」

「 うん」

『えつええええええええええええええ!?』

一度目の絶叫がRe-CODEの本拠地で響き渡った。

「 全く、驚きすぎよあなたたち」

『すっすみません』

アリサが再び三人を黙らせて説教していた。現在三人は椅子の上で正座中である。

「アリサちゃんその辺にしといてあげなよ」

すずかが、アリサを止めようとしたが、

「だめよ。三人とももつとしつかりさせないといけないといけないから説教続
行」

『うへー。』

「まあまあ、アーチャン。まだ説明しないといけない事が多くあるからその辺にしといて」

「全く・・・・零に感謝しなさい」

『はい!...』

じろりとアリサに睨まれて、背筋をピンとするなのは達。

「まず僕があの時なーちゃんのいた異世界にいた理由は何かなーちゃんの体が非常に危なそうだったからついて行つたんだ」

「でもどうやってや? その頃まだ、零君まだミッドの方面で活動していなかつたんやろ?」

「ああ。これを使つたんだ」

そう言つと零はNOIZEと書かれた銀のメモリを出した。

「それって・・・・・」

「私達がここに来たときに使つたメモリ・・・・・」

そうさつき瘢痕の男が三人をここに連れてきたとき使つたガイアメモリだつた。

「I-JEETはゾーンメモリ。I-JEETは任意の対象物を自由に他の場所に転送できるメモリなんだ」

「そつか・・・・! それを使って私達をここに連れて行つたんだ」

「うん。そして先日あの空港火災の場所にいたのは、ドーパントの反応があつたからあそこに行つたんだ」

「なるほど」

三人は納得したようにうなずいた。

「さてと・・・・とりあえずガイアメモリに関してはこんな感じかな? 後は”H-DEN”に関してだ」

「ねえ零・・・・I-JEET言つちゃあ何なんだけど・・・・・」

「ん? 何?」

「”H-DEN”って組織本当に存在するの?」

「・・・・・どういう意味だい?」

「あの私、執務官やつていていろんな犯罪組織の名前耳にしているんだけど、”エデン”なんて組織聞いた事無いんだ」

零に質問するフェイト。

フェイトは執務官と言つ、主に事件の捜査、犯罪者の捕縛と言つ仕事をしており、そのため色々な犯罪組織の名前を知つてゐる。にも関わらず、フェイトは”エデン”と言つ組織を知らないと言つ。疑問に持つのは当然だらう。

そんなフェイトの疑問に零では無くすずかが答えた。

「えつとね・・・たぶんフェイトちゃんが知らなくとも無理ないと思つよ」

「えつどうじう事？」

「”エデン”は組織に関して殆ど情報が無いの。地球で活躍していた頃よりも

「そりなの？」

「うん。”エデン”と言つ組織の存在を知つてているのはここにいるメンバーとRe-CODEを支援している人だけなの」

「そつそれだけ？」

「うん。あつでも裏社会のかなり深い所まで言つている人はもしかしたら知つているかもしれない」

「まあ、すーちゃんが言つたように”エデン”は中々尻尾が掴めないだ。おかげでミッドでばらまかれているガイアメモリの対応だけで精一杯なんだ」

やれやれと肩をすくめて首を振る零。そんな零に今まで黙つていたエミリオンが言葉を発した。

「でもでも~昨日捕まえたあの男から情報引き出せれば、結構良いプラスになるんじやない~？」

「そうだね・・・ネバールどうなんだい？」

零は褐色肌の青年・・・・ネバールに聞いた。

「一応、吐いてはいますがこれと書つてめぼしい情報はありませんね」

「捨て駒・・・・と言つ詰か」

「おそらくは」

「そうか・・・・」

「しかし・・・・」

「ん?」

ネバールはいつたん言葉を切り、零は目をネバールに向けた。

「”エデン”の現在の幹部の人数はわかりました」

「ホントかい!? それは大きな進歩だ」

零は本当にうれしそうで声が弾んでいる。

「それで、現在の”エデン”のメンバーは何名だい?」

「現在は四人。やはり地球で倒した数の分だけ補充していますね」

「なるほどね・・・・使つているメモリはわかつた?」

「そこまでは・・・・」

「なるほど・・・・まあそれだけでも良い情報だね」

そつと零は何かを考え込む仕草をし始めた。

「・・・・零? どうしたの?」

「ん? いや何でも無いよ」

零が考え込んでいるのを見てアリサが声をかけたが、零は何でも無

いと答えた。

ふと視線に気がつき、その方向に向いてみるとなのはがじつと零を見つめていた。

「……」

「……何だい？」

「ねえ零君何で、言ってくれなかつたの？」

「えつ？」

「何で、言ってくれなかつたの？ 言つてくれればいくらでも手伝つてあげたのに」

なのはは少し涙目になつて零を見ていた。

「……”エデン”は、自分達の存在を知つた者の存在を許さない。知つたら殺されるか、存在しない者になるか二択だ」

「存在しない者って……」

「そのままの意味だよ。全ての個人情報を抹殺し、死んでも墓を立てることも許されない」

「そんな……」

「あの時……まだ”エデン”の事は全然情報が今よりも無くて、もしかしたら”エデン”に君たちが殺されたかもしないんだ」

「……」

三人は黙りこくつてしまつた。やがて……なのはが口を開いた。

「なら……何でアリサちゃんとすずかちゃんは良かつたの？」

「本当は一人にも隠し通すつもりだつたんだ……けど一人の家の影響でね……ばれちゃつて」

アリサとすずかの家は、世間一般で言う裕福な家庭に位置する。

「それに一人の家の影響で”エーテン”も一人には手を出せなかつたんだ」

それを聞くと三人は押し黙つた。

「わかつてなのはちゃん。私達も三人に黙つてゐるのは結構つらかつたんだ」

「それでも皆を巻き込みたくなかったのよ」

「ただ今になつて話したのは、君たちに隠し通せなかつたと思った事、そしてなーちゃん」

「えつ」

零に呼ばれて顔を上げたのは。

「なーちゃんがずっとエターナルを捜してゐると聞いて、もしかしたらなーちゃんの身に余計な危険が舞い降りるじゃ無いかなと思つてね」

「零君・・・・」

「ごめんね三人とも隠していて」

三人はしばらく顔を伏せていたがやがて顔を上げると三人とも笑顔だつた。

「大丈夫ちゃんと話してくれたし。私達も魔法の事隠していたからこれでおあいこ」

「そうだね・・・少し私達より長く隠していたけど・・・・」

「それでも話くれたからオツケーや」

三人は口々に許すと言つた。

「三人ともありがと」

その後少し話した後、三人に、Re-C?DEの航空艦を見る許可をもらい、女性陣は部屋を出て行き、零とネバールと瘢痕の青年が残った。

瘢痕の青年が零におもむろに訪ねた。

「それで・・・エターナルメモリの完成度は？」

「・・・まだまだ40パーセントかな？前回の戦闘は、あんまりデータがとれなかつたからね」

先ほどとは打つて変わつて零は、どこか冷たさを持つた表情で手に持つたエターナルメモリを見つめていた。

「しかし・・・あの男、本当に零様をお連れするように言われたのでしょうか。あまり実力はなさそうでしたけど」

ネバールが零に質問した。

事実あの男の実力ならば零が本気を出せば、直ぐに片がついただろう。そうしなかつたのは、あの状況で本気を出せばさらに空港が崩れる可能性があつたためだ。

「おそらく”H?ラン”の方も僕を連れ戻すのは良ければと言う感じだろう。本当の目的はエターナルメモリがどれほど完成しているか見たかったのだろうよ」

「なるほどな・・・それでこれからどう動く？」

「別に、今まで通りデーパントが出てきたら呪く。それだけ

「……それでよろしいので？」

「……地球とは違つて、//シードナルダはあまりにも情報流が違
います。下手に動いたらレジナがやられる

「なるほどな。やはり計画は年単位か？」

瘢痕の青年はため息をつきながら零に聞いた。

「おや、瘢痕のR e - C ? D E · · 3 破壊神は直ぐにでも破壊した
いと？」

「そうは言つてない。それに待つことも重要な事だ」

ネバールは瘢痕の青年に問うが、瘢痕の青年は違うと言つ。

「まあ、とにかく今は情報を待つだけかな。のんびり行こう」

そう言つと零は目を閉じながら眼鏡を外しテーブルの上に置いた。
そして零が目を開けると、いつもの目の色ではなく、金銀のオッド
アイとなっていた。

「……この間見たよりも色が少し濃くなっているな。遺伝子コ
ードが活発になり始めているのでは無いか？」

「そうなの？うーんこの眼鏡だとそれなり隠し通せなくなってきた
かな？」

零は眼鏡を見ながら呟いた。実はこの眼鏡度が入っていないのであ
る。

「……いつも思いますけど、それは掛ける意味がおありで？」

「ネバール、連中はこの目を頼りに僕を捜しているだよ。ならば目

を隠すのは当たり前だろ？」「

「なるほど・・・・」

「では、現状維持で良いね？」「ええ

「異論は無い」

こつじて永遠の悪魔と魔法少女達の始まりの出会いは終わり、新たな物語が紡がれ始める。そのとき永遠の悪魔は何を思つか・・・・・。

EPISODE 3 (後書き)

いかがでしょう。来週は投稿出来ないと想います。テストが終わり次第投稿します。

EPISODE 4 (前書き)

試験中に書いていました。何やってんのと聞この皆様・・・本当にやつてんだる自分。

EPISODE 4

「本当にかい、それは？」

なのは達とRe-C?DEの会合から四年。零達は、これといった進展も無くガイアメモリ犯罪の対処をしていた。そんな中ある人物からの情報に零は耳を疑つた。

「まさか、”エデン”が”レリック”を狙つているなんて……」

レリック

時空管理局が回収、管理している古代遺失物ロストロギアの一種で、外見はただの赤い結晶だが巨大な魔力を秘めた危険度が高いロストロギアである。

「……いよいよ”エデン”も魔法関連に本格的に乗り出していくのか？それともエネルギーを集めている……？」

指を組んで思考の海に入り込む零。そんな時自室のドアが開き、誰かが入ってきた。

「零、仕事だ」
「ん……」

入ってきたのは瘢痕の青年だった。そのまま零が座っている椅子の近くに行き、開かれているモニターを見た。

「奴からの情報か？」

「うん。現在は一ちゃん達の部隊が追いかけているロストロギアを”エデン”が狙っているんだって」「何？・・・なるほどだからか」

「?何がさ」

「いや、仕事の話だ。ドーパントが出現した」「どい？」

一端思考を中心じ、瘢痕の青年に聞く零。

「場所はミッドチルダ北部の山脈に連なる線路の上を走っているリニアレール」

「・・・・はい？」

思わず聞き返す零。

「いやいや・・・なんでそんな所にドーパントが出るの。ふつうドーパントはそんな所に出てこないだろ？」「

通常ドーパント達は己の私利私欲のため殆どが人がいる町中で出現する。なのでそんな人里離れた場所にドーパントが出現するとは思えなかつた。

「さつき自分で言つただろ？」

「・・・・レリックがあつたの？」

零は少なからず驚いていた。まさかこんなに早く”エデン”が動き出すとは思わなかつたからだ。

「さういへ、もう一つ伝えることがある」「・・・・何か嫌な予感しかし無いんだけど」

少し嫌そうな顔をして、零にやりと笑いかけると瘢痕の青年はこう言い放った。

「現在、そのリー・アレールでは機動六課がレリック回収任務に当たつている」

瘢痕の青年の言葉に思わずうめく零。

機動六課。零の幼なじみの一人、八神はやてが設立した新部隊で主にレリックの回収を任務にしている部隊である。他にも零の幼なじみ高町なのは、フュイト・T・ハラオウンもその部隊に所属している。

「はあ、めんどうかい事になつたね……すーちゃん達は？」

「月村ならエミリオンとバニングスと一緒に買い物に出かけた」

「……ネバールは？」

「あいつならドライブに行つた」

つまり現在Re-CODE本部にいるメンバーは零とこの瘢痕の青年の二人だけとなる。

「……何で……こんな時に誰もいないんだ……」

「おまえが行つていよ言つたんだろ」

再びうめく零に瘢痕の青年はあきれたように言つた。言葉通り零が四人に対して休暇を出したのだ。

「はあ。まあいいや……でドーパントは何体？」

「一体だそうだ」

「そう」

零は立ち上がると、椅子に掛けてあつた灰色のロングコートを羽織り、フードを田深く被った。

「おまえが出るのか？俺一人で十分だと思うが……」「最近本部から出でないし、たまには運動しないとね」

そう言つと零は扉附近まで近づき、瘢痕の青年の方を振り返つた。

「じゃ行こ。ヴェント」

瘢痕の青年・・・・・ヴェントに零がそう言つとヴェントはふつと笑つた。

「心得た。我らが王よ」

ハ神はやはては焦つていた。機動六課の最初の任務、レリック回収任務は新人達の手によつて、リニアレールにあるレリックを無事に回収した。途中新型ガジェットドローンも破壊し、任務完了と思つた矢先新たにアラームが鳴つたのだ。

「なんや！？何がおこつたんや！？」

するとロングアーチの一人が驚愕の報告をした。

「謎の生物がリニアレールのスターズ及びライトニングの所に出現！映像出します！」

するとモニターには一体の生物が映つた。その生物を見てはやはては

驚いた。

「ドーパント……！」

「知つているのですか部隊長？」

「いや……」

とか言いつつはやはては焦っていた。まさかドーパントが出現するとは思わなかつたからだ。ドーパントは魔法で倒せない。

（まずい！なのはちゃんと達ならまだしも今の新人達で危ない…どうすれば……）

そんな事を考へてゐるとはやはてのデスクにメッセージが届いた。こんな緊急事態にと思いつつ題名が「はーちゃんへ」と書かれていた。“自分の事を”はーちゃん”と呼ぶのは一人だけで、今もつとも連絡が取りたかつた人物なので急いでメールを開いた。内容を読んでいくうちににはやはてはにやりと笑顔を見せた。

「八神部隊長……？」

そんにはやてを不審に思つたのかロングアーチの一人がはやはての話掛けってきた。

「大丈夫や……最強の助つ人が新人達を助けに行つて来れた……！」

ティアナ・ランスターは困惑していた。今同僚で親友の青い髪の少女・…・・スバル・ナカジマと任務をしていた。任務の内容はレリックの回収。そして無事にレリックを回収して任務終了と思つた矢

先、何者かがリニアレールの屋根を貫いて侵入してきたのだ。

最初はガジェットかと思ったが、それは異形の怪物
レフアント・ドーパントだった。

「それはレリックだな？」

「……あなた何者ですか」

目の前の怪物がしゃべれるとは思わず驚くが直ぐに気を引き締めた。

(ティア、ティアこいつ一体何? 私見たこと無いんだけど)
(うさいスバル! 私だって無いわよ……でもたぶんこいつ敵
だ)

相棒と念話をしながら、ティアナは現状の確認をしていた。現在ここにいるのは自分とスバルだけ。隊長のなのは達はまだ空で戦闘中。

「そのレリックを渡してもらおう。我らが”エデン”のためにも
”エデン”？」

聞き覚えのない組織の名前に聞き返すティアナだが、エレファント・ドーパントはその言葉を無視し、ゆっくりとだが、重みがある歩きをしながらこちらに歩き始めた。

「つー! スバル!」

「おう! はああああ!」

一瞬で自分の言いたいことを理解したスバルは履いているローラー シューズを回しながら、リボルバーナックルがついている右手を打ち込もうとした。

相棒

そしてティアナも愛機の双銃型デバイス・・・クロスマーティアから魔力弾をエレファント・ドーパントに撃ち込んだ。しかし、さほど効いていないのかエレファント・ドーパントは対して気にもせず、そのまま歩いていた。

「（やはり防御型！私の弾丸じゃ・・・けど）スバル！」

「おうーぜああああああー！」

スバルがエレファント・ドーパントの懷に入り込み、右手で思いつきりぶち抜いた。しかし、

「効かんな・・・」

「えつ！？」

「嘘！？」

スバルの渾身の一撃にエレファント・ドーパントはその場から一歩も動かず、腹で受け止めていた。

「フン！魔導士が我々に勝てるわけ無かるー。」「くっ！」

スバルは急いで下がるがするが、

「逃がすか！」

「！！」

逃げようとするスバルをエレファント・ドーパントは自分の鼻でつかみ取り、そのまま床に叩きつけた。

バコン！！

「ぐはーー！」

轟音と共に床に叩きつけられたスバル。あまりのパワーに床に体がめり込んでいた。

「スバル！！」

ティアナは何かスバルを助け出そうとするがエレファンント・ドーパントはそれよりも早く鼻をほどき、未だダメージが抜けなくて身動きが取れないスバルに拳を振りかざした。

「まずは貴様から死ね！！」

「スバル！！」

エレファンント・ドーパントの拳がスバルに当たる寸とした瞬間、

「くうへき
空壁」

「ドカン！！」

「何！？」

「えつ・・・・・？」

スバルに当たる筈だった拳は、スバルの目の前で見えない何かに遮られて止まっていた。

「ほう、今回は重量タイプ・・・姿形から見ると象エレファントか」

通路の奥から現れたのは携帯型酒瓶で酒を飲んでいるヴェントだった。

「その頬の瘢痕、貴様 Re - C? D E O 3 『瘢痕の破壊神』か！」
「ほう、初対面の癖に俺の一いつ名を知っているか。少し素顔を見せすぎたか・・・・」

「くつくつ何故貴様がここにいるのかなど、どうでも良い。貴様の

首を組織に献上すれば俺の昇進は間違ひ無い」

「この俺を斃すたお・・・か。やってみるか？」

そう言つと、ヴェントは上着の懷からロストドライバーを取り出し、腰に装着した。そして緑色のこと書かれたガイアメモリを取り出した。

『CYCLOZONE』

サイクロンメモリを起動させロストドライバーの右側のスロットに挿入、そのまま右に展開した。

「変身」

『CYCLOZONE』

すると、風がヴェントを包み込み、風がやんだ時にはヴェントは全身を緑色の体赤い複眼を持つ疾風の戦士となっていた。

「貴様は・・・・！」

「仮面ライダー・・・サイクロン」

今、疾風の力を持つ破壊神が降り立つた。

一方、ティアナ達の反対側の車両にいるエリオ・モンティアルは自分の同僚のキャロ・ル・ルシエの使役竜、フリードリヒの上でティアナと同じく困惑していた。新型ガジェットを破壊し、勝利の喜びをキャロと漫っていたところ、突然リニアレーの屋根をぶち抜い一弾が打ち込まれてきてよけると、リニアレールの屋根をぶち抜いて、異形の蠍の怪物

スコーピオン・ドーパントが現れた。

「チツ、こつちは外れでガキが一人だけか。つまんねーの」

そう言いながらスコーピオン・ドーパントは、一人の方をじろりと見る。

キャロは怯え、フリードはグルルルとうなり、エリオはフリードから降り自身の愛機の槍型デバイス・・・ストラーダを構えた。

「何だ？おまえ達が俺とやるってのか？まあいい、あっちが終わるまでの暇つぶしにはなるだろ！」

スコーピオン・ドーパントは自身の背中にある毒針をエリオ達に向けて、エリオ達の方に歩き始めた。

ひとつ短い悲鳴を上げるキャロを守りつゝ、ストラーダを握りしめるエリオ。

「駄目じゃないか、そんな小さな子怖がらさせちゃったら」

「えつ？」

「何？」

三人が声がした方向を向くと、そこには灰色のコートを田深く被つていて素顔がわからない零がいた。

「てめ・・・！一体どっからわいて出た」

スコーピオン・ドーパントはわめくように零に言い放った。エリオ達も同じ気持ちだろう。何せ魔力も感じず、いきなりその場に気がついたらしいだから。

「うーん、企業秘密」

「なっ・・・おまえふざけているのか！」

スコーピオン・ドーパントは怒鳴りながら毒針を数発、零に向けて撃ち放つた。しかし、

「遅いよ」

「なっ！？」

気がつくと零はエリオ達の方にいた。

「あつあなた一体？」

「ん？ああ、大丈夫大丈夫。僕は君たちの味方さ。ここは僕に任せてくれない？」

「えつ？」

零は数歩歩くと、コートの中からロストドライバーを取りだした。そして、コートのポケットからエターナルメモリを取り出した。

腰にロストドライバーを巻き、

『ETERNAL』

エターナルメモリを起動させ、スロットに挿入した。すると黄色い波動がメモリを中心に発生し始めた。

「変身」

『ETERNAL』

そしてスロットを右側に展開すると、風が吹き白い欠片が零の姿を覆っていく。全身白い姿に、Eを横に倒したような触覚、無限のマーケを模した目。さらに胸、右腕、左腿に合計二十五個のマキシマムスロット。両腕には青い炎が描かれている。そして最後に黒いロープを身に纏っている。

「テーマは・・・・！」

「仮面ライダー・・エターナル」

EPISODE 4 (後書き)

次回は戦闘場面がメインになると想いますが、あまり期待せずお待ちください。

これからまた忙しくなるかもしだせんが何とか毎週投稿を目指します。

後以前書いたアンケート一応まだやっているので活動報告の方見てみてください。

EPISODE 5（前書き）

何か思ったより早く書けました。
感想とか、待っているので書いて
くれるとうれしいです。

「仮面ライダー」

「サイケロン？」

まるで特撮ヒーローみたいな名前に思わず目を丸くするティアナとスバル。

「ファン！何が仮面ライダーだ！貴様など俺がつぶしてやる！」

ふつと笑うサイクロン。

「けり、いつてゐるお母さんかね？」

吠えながらエレファント・ドーパントはサイクロンに突っ込んできた。対してサイクロンはその場で構えずに突っ立っているままだ。

「ちょ、危ない！」

ティアナは何もしようとしないサイクロンに思わず声を上げた。しかし、

۲۷۳

「はぐく」

卷之二

二
何
？

いきなりエレファント・ドーパントが何かに斬りつけられたようであ
後ろに飛んだ。

「なつ何、今何が起こったの? ティア!」

「うっさいー私だつてわからないわよ!」

そんな一人を一瞥してサイクロンはエレファント・ドーパントの方
を見た。

「・・・・弱いな」

「何ー?」

ぼそりと呟いたサイクロンの言葉に反応するエレファント・ドーパ
ント。

「弱いと言つているのだ。貴様は相手する価値も無い奴だ」

「ふ・・・ふざけるな!!」

エレファント・ドーパントは激昂して、再びサイクロンに突っ込んでいった。しかし、

ヒイヨ

「ぐはー!」

再び何かに斬りつけられたようすで、そして今度はさつきよつも吹っ
飛んだ。

「戦う気は起きんが、仕事だからな。さつあと終わらせる」

そういうとサイクロンの周りから風が渦巻いて来た。

「そつか・・スバルあの緑の奴の攻撃の正体がわかつたわよ」

「えつホント?」

「うん。たぶんあいつ、風を操っているんだと思う。風での怪物を切り裂いたり、さつきスバルを助けたのもあいつが風の壁を作ったからよ」「み

「なる世」

「そこなのよね・・・・」

普通どんな魔法を使おうとも、魔力は感じられる。つまりサイクロンは魔法を使つていないと言つ事になる。

「さて、行くぞ」

そう言つとサイクロンはエレファント・ドーパントの懷に一気に潜り込み、腹にアッパーを打ち込んだ。

「ぐわー」

あまりの威力にエレファント・ドーパントは腹を抱えてうずくまつた。

ג' טהראן

サイクロンはエレファント・ダーパントの首を持つと空中に浮かび上がらせて、怒濤のラッシュを打ち込んでいった。

「我、おまえのことを、もう……」

「ぐおおおおおー。」

何度もかの拳を打ち込んだ後サイクロンは素早くサイクロンメモリをマキシマムスロットに挿入した。

「破壊へりれな」

『CYCLONE MAXIMUM DRIVE』

サイクロンの右手に緑色の風が渦巻き始め、空中のエレファント・ドーパント掛けてその風を打ち込んだ。

「おーりあー。」「ぐあああああー。」

風がエレファント・ドーパントを直撃すると、エレファント・ドーパントは大きな爆発を起こした。

「・・・・破壊神」

そんな光景を呆然と見つめていたティアナはぽつりと呟いた。
そもそもサイクロンの攻撃は破壊神へりじんにふさわしいものだった。

リニアレールは周りが穴だらけになつたりして傷も多い。
エレファント・ドーパントが爆発した所を見てみると、メモリブレイクされたメモリと男が横たわっていた。

「えつ、人間・・・・?」

驚くのも無理は無い。スバルやティアナはドーパントを見たことが

無いので人間だとは思いもよらなかつたのだろう。

「セヒト、あちひづなつているかな？」

ヴュントは変身を解くと、携帯型酒瓶で酒を飲みながら零が戦つて
いるだらう方向を見つめていた。

「仮面ライダー……」

「エターナル？」

聞いた事が無い名前を聞いて、エリオとキャロは一人そろつて首を
傾げていた。

「エ、エターナルだと！？」

逆にスコープオン・ドーパントはエターナルの名前を聞いて狼狽し
ていた。

(おいおい[冗談だろ!]？何で俺の所にエターナルが来るんだよ！?)

スコープオン・ドーパントはこの任務の行く前にエレファント・ド
ーパントの男と一緒に上司で組織の幹部の男からこんな事を言われ
たのだ。

「いいですか、お二人とも。R e · C ? D E が出てきた場合その者
の首を取つてきたり昇進のチャンスが与えられます」

「おおー！」

「一人とも是非ともRe・C?DEが出てきて欲しいと思つた。

「しかし”エターナル”は別です」

「”エターナル”？」

「エターナルが相手だった場合は戦わないことをおすすめします」

「？どういう事です」

「もし戦うことになつたらエターナルのマキシマムは絶対に使わせてはいけません」

「何故ですか？」

「それはあなたたちが知らなくていいことです」

そう幹部の男に言われて一人は黙つた。基本”エデン”的”上下関係は非常に厳しい。幹部に口答えしただけで殺される例も少なくない。

「ただ一つ言つと、”エターナル”下手したらいづれ全てのガイアメモリを支配する存在になる可能性が出てきます」

「全てのガイアメモリを……？」

「話は終わりです。わざと行きなさい」

(くそー…どうするー…? の方は「冗談とかそういうのは言わないから冗談抜きで奴はやっぱいつてことだ。それに奴のマキシマムって一体…)

「何考えているか。まあいいや。わざと終わらせるよ」

エターナルはロープをはためかせると、スコーピオン・ドーパントの元に走つていった。

「…へ、へ…」

スコーピオン・ドーパントは覚悟を決めたのか、自分の元に来るエターナルに拳を繰り出した。

「甘い…」

エターナルはその拳を躱し、青い炎を纏つたパンチをスコーピオン・ドーパントに打ち込んだ。

「ぐは…」

「まだまだ、簡単にやられてくれるなよ?」

そう言いつとエターナルは青い炎のパンチを何発もスコーピオン・ドーパントに打ち込んだ。

「い、いのぉおおー」

スコーピオン・ドーパントは背中の尾から毒針を無数にエターナルに打ち込んだ。

対してエターナルはエターナルエッジを取り出し、青い斬撃波を繰り出し毒針を全て叩き落とした。

「なん・・・・・だと・・・・?」

「どうしたの?もう終わり?」

「くつ・・・・・まだまだだ!」

その後スコーピオン・ドーパントは尾の針をエターナルに田掛けて連續で打ち込み始めた。

「はっ！」

エターナルは躲したり、エターナルエッジではじき返したりして全て防ぎきっていた。そして、

「はっ！」

「何！？」

エターナルはスコープオン・ドーパントの尾を摑むと、

「はあああああ！」

「ぐあああああああ！」

そのままエターナルエッジで切り裂いた。

「ぐおおおおお！」

痛みで苦悶の声を上げているスコープオン・ドーパントを尻田にエターナルはロストドライバーからエターナルメモリを抜き出し、エターナルハッジにあるマキシマムスロットに挿入した。

「さあ終わりだ」

『ETERNAL MAXIMUM DRIVE』

エターナルメモリのマキシマムが発動されるとスコープオン・ドーパントに異変が起きた。

体に電流がしきものが流れ始めたのだ。

「な、何だこれは・・・!?

「知らないのかい?僕のエターナルメモリは特別でね、他のメモリを無力化する力があるんだよ」

「!?!他の・・・メモリの・・・無力化だと?」

スコープオン・ドーパントは信じられないと言つたふうに首を振つた。

そんなスコープオン・ドーパントにふつと仮面の下で微笑したエターナルは動けないスコープオン・ドーパント田掛けで駆けだした。そして右手のエターナルエッジを持ち替えてジャンプし、そのまま青い炎が渦巻いた右足で回転蹴りをスコープオン・ドーパントに打ち込んだ。

「ぐああああ!!

「田には田を歯には歯を悪には敵選たる裁きを」

スコープオン・ドーパントは爆発し煙が晴れると男とメモリブレイクされたメモリが落ちていた。

「終わつたようだな

「まあね」

もう一体のドーパントであるうつ男を肩にし�ょって、ヴェントが後ろから現れた。

「ちょっと待つて~

「スバル早いわよ!」

「・・・・何あの子達?」

「・・・・・じつやう勝手につこづきたよつだ」

スバルとティアナがヴェントを追つてこむらに来たのだ。

「あれ・・・あつ」

スバルはエターナルの方を見ると驚いた顔になつた。

「何だ、おまえの知り合いか？」

「ん？えーと・・・どこかで会つたような」

「えつと、四年前の空港火災で・・・」

四年前で自分の記憶の中にある人物の中から該当しそうな顔を探していく零。やがて思い出したよつて手をぽんと叩いた。

「ああ！あの時の女の子。大きくなつたね」

「はつ、はい！あの時はありがとうございました」

「いえいえ」

「だから早いつて言つてるでしょ・・・時空管理局の者です。先ほどの怪物の件とあなたの方の力の事でお話があるので同行願いますか」

ティアナはようやく追いついて職務を全つしよつとする。

「やだ」

即答するエターナル。

「なつ・・・」

「めんどくさいしね。話ならなーちゃん達から聞いてよ」

「なーちゃん？」

聞き覚えの無い名前に首を傾げるスバル。

「……それ私のこと。なのはだから一番最初の文字でなーちゃん」

空から声が聞こえてきた。声がした方を見るとバリアジャケットを身に纏つたなのはがいた。

「なのはさん！」
「みんな大丈夫？」
「はつはい。けどこの人達は……」
「大丈夫。私達の味方だよ」
「はあ……」

そのとき、

「！……ヴェント！」
「くうへき
空壁」

エターナルがヴェントに叫ぶとヴェントは全員の周りに風の壁を開した。すると、いきなりどこからかエネルギー弾が放たれた。

「なつ何？」

突然の事に混乱するなのは達。

「ぐは！」
「ぐお！」
「つ、しまった！」

ドーパントの男達から一瞬目を離すと、男達から短い声がして慌てて男達の方を見るともうすでに息絶えていた。

「くそ……やられた」

「……奴か？」

「ああ処刑人だ」
アサシン

男達の首筋には黒い痣らしき物が浮かび上がっていた。

リニアレールから離れた山脈そこには一体のドーパントがいた。ボディは黒く、目は赤く怪しく光つており、不気味さが目立つ。

「終わりましたか」

ドーパントの顔の右横にモニターが開き、そこに映っていたのは先ほどこのドーパントが始末した男達の上司の組織の幹部の男だった。

「……ああ」

「(イ)苦労様です。それで”エターナル”の方はどうでしたか?」

「……範囲は狭いが、やはりメモリの無力化はできるようになつていてる」

「そうですか。まずいですね、このままだと我々のエテンのための
計画に大きな支障が出てくるでしょう」

「……どうする?始末するか……?」

「……やめておきましょう。エターナル単体でも強いと言いつつ
に加えて破壊神が側にいるのです。いくらあなたでも無理があるで
しょう」

「……」解した。これより帰投する

「はい。詳細な報告は帰つてからお願ひします」

そう言い残すとモーターが閉じられた。

「……Hターナル。いずれ全てのガイアメモリを支配する存在
か……」

「で、どうだつたかね？」

「エターナルは完成し始めたよつです。このまま泳がせていたらま
ずいかと……」

豪華な屋敷の一室。そこには先ほびデーターパントと通信していた幹部
と他の幹部が会合をしていた。

「どうするんですお父様？早く零を確保しないと」

上座に座っている初老の男の方を向いて、三つの女性。

「慌てる事は無い。零もわかつてゐるはずだ。自分はあまり外に出
歩ける事はできないと」

「それはそうですが……」

まだ何か言いたそうな女性を手で制すると、初老の男はおもむりこ
立ち上がった。

「だがレリックの方もなんとしても手に入れないといけない。カル
マ君現在どれくらい回収できたかね？」

「現在は六個です」

「そりか・・・・諸君レリック及び、零の確保。そろそろ本腰を入れようと思つ」

その言葉に他の幹部全員が反応した。

「全ては我々のH₂T₂N₂のため^{樂園}」

『樂園のため』

EPISODE 5 (後書き)

いかがでしょ？零達Re・C?DEはそろそろ機動六課と協力していきます。

EPISODE 6 (前書き)

夏休みに入ったので、しばらくは書けたら投稿するってスタンスです。

「ぐ、あつ」

Re-C?DEの本部その自分の自室で零は頭抱えてうめいていた。

「やはり……エターナルの副作用か？これはまずいかな……」

「零君、お土産……って大丈夫！？どうしたの零君？」

ドアを開けてすずかが入ってきて、頭を抱えて苦しそうにしている零を見て驚いた。

「やあ、すーちゃん。大丈夫大丈夫」

「大丈夫って……」

すずかは零の元に駆け寄り、頭をさすった。すると自然と頭の痛みが引いてきた。

(痛みが引いてきた……しかし何故……?)

「大丈夫……？」

「ああ……大丈夫だよ」

「ならないけど……何かあつたら直ぐに言ってね？」

すずかは零の手を両手で優しく包み込みながら言つた。

「すーちゃん、ありがとう」

「もしもし……って、なんやお邪魔やつたか？」

いきなりモーターが開いたかと思つたが、やはり映つていた。

「ん？」

零は良く聞こえなかつたが、すずかには聞こえていたようだ。

「なつ何言つているのせやでちゃん！」

現に真っ赤になつて動搖している。

「へ・ビうしたのすーちゃん」

「なつ何でも無いよ零君！ うん何でも無い！」

わたふたしながら言つすずか。そんなすずかを不思議に思いながら、零ははやての方に目線を送つた。

「さてと・・・メールの話？」

「せや。そのことについて何やけど・・・」

あの時零は出撃する前にはやてにメールを送り、助けることと手に入れた情報を書いたのだ。

「まさか”エーテン”もレリックを狙つているなんて・・・目的はわからんの？」

「まあね。僕たちも色々探つているんだけど、中々尻尾が掴めないんだ」

「そつかー・・・ねえ零君相談何やけど・・・」

「協力してくれ、かな？」

「うへ、返づいておつたか……でござりやへ。」

聞いてくるはやてに零はため息をついた。

「はーちゃん。今君の立場わかっている? 唯でさえオーバーランク魔導士がかなり投入されている。そのせいかなり風当たりも強い。」

「うひ、せやけど……って何で零君が知つとるん?」

「ん? こないだレジアスがモニター越しに愚痴を言つていた」

零の言葉に唖然とするはやて。

「えつ何零君、レジアス中将と知り合いなんか?」

「うん」

ミッド首都グラナガンでガイアメモリ事件を追つていてる過程で出会いい、最初は零達を警戒していたが今じやすつかり意気投合しており、ヴェントやエミリオンとは酒を飲みに行く仲にまでなつていてる。さらにガイアメモリ事件の協力をしてもらう代わりに零達もグラナガンでの犯罪の対処に協力してたりしている。

「まつまじかいな……」

「はあ……まあ僕たちも”ヒテン”に好き勝手させる訳にはいかないしね」

その言葉を聞いた瞬間。あと、顔が明るくなるはやて。

「じゃあ・・・

「待つて、とりあえずそちらに全戦力を投入する訳にはいかないから、とりあえず後日またこちらから連絡するから待つていて」「わかった。ほな零君またな・・・・そつそつすすかちゃんちやんとやらない・・・・」

はやてが最後まで言葉を言つ前にすずかがモニターを切つた。

「すーちゃん?」

「何でも無いわ。何でも・・・・」

「そう・・・・」

こういう場合女性にあまり深く聞かない方がいいと義父から言われたので零は何も聞かない。

「さてと、すーちゃんみんな集めてくれるかい?」

「わかった。じゃあまた後で」

そう言つとすずかは部屋から出て行つた。一人部屋に残つた零は無言で立ち上がり、そのまま部屋の一面の壁の前に来た。

そして、壁を三回ほど同じリズムで叩いた。すると、一部の壁が浮き出でそのまま右にスライドした。その中には白いアタッシュケースが入つており、零は指紋認証・暗証番号・鍵、三つのロックを解除し、ケースを開けた。

中にはガイアメモリ 零達が使う同種のメモリが計十六本詰まっていた。そして他にもメモリが収まる型が十個あった。

「At・・・・運命は誰に味方するかな・・・・ねえ

克己」

かつて同じ研究所において自分に世界という物を教え、そしてお互い裏切り合つた唯一無一の親友の事を思い出し、零は静かに親友の名を呟いた。

「さてと、みんなすーちゃんから聞いたと思つけど、機動六課にレリックに群がるドーパント専門で何人か派遣したい」「いや群がるつて……」

思わず呟くアリサ。それを無視し、話を続ける零。

「じゃ、誰が行くー？」

すっと手を挙げるネバール。

「はい、ネバール
「……まああなたとエミリオンは除外でしょ」「えへ何で~?」

ネバールの言葉に不満を漏らすエミリオン。

「……零はここからあまり離れられません。それにあなたは守護神でしょ？守護する者の近くにいないでどうするんですか？」

「ふ~」

エミリオンがぶーたれるのをすずかが宥めているのを見て零は苦笑しながら改めて回りを見渡した。

「じゃあ僕とエミリオンは除外つてことで。誰が行く？」

今度はアリサが手を挙げた。

「あーちゃん?」

「私が行くわ。最近運動していないから、いい機会だと思つ。後あーちゃん言うな」

ふむと考え込む零。しばらくすると顔を上げた。

「わかった。じゃあまず一人目はあーちゃんで。次は?」

「俺が行こう」

「ヴェントが?」

名乗り出たのはヴェントだった。

「ああ。レリックを現在”エデン”^{奴ら}が集めているならばそちらに戦力を集中させるだろ?」「あ~要するに・・・」

単純な話、ヴェントは強さを求める人間だ。そのため常に強者との戦いを望む。だから戦力が集中するであろう場所に行くのだらう。

「・・・それに気になる奴が一人いるしな」

最後の方の呴きはつまく聞き取れなかつたが零は気にせず話を進める。

「じゃあ、最後の一人はどうする?」

すずかとネバールの方を見るがどちらも手を挙げなかつた。ネバー

ルの方は興味が無いといった感じで、すずかの方はちらりちらりと零の方を見ながら手を挙げようかあげまいか考えている。

そんなすずかを見てアリサはため息をついて、手を挙げた。

「？何あーちゃん」

「最後の一人、ネバールを推薦するわ。後あーちゃんいうなつて言つていいでしようが」

その言葉にネバールは無表情でアリサの方を向き、すずかは驚いた顔をしていた。

「何でだい？」

「もしどづかまで行つたら誰が本部の家事やるのよ」

その言葉に殆どの人間はあ～と思つた。

R e - C ? D E のメンバーは戦闘においてはかなり優秀なのだが、その反面家事など生活スキルが皆無な者が多い。
男性陣は全滅。Hミリオンは出来無いこともないが、やる気が無い。後の二人のすずかがメインでアリサが手伝うといった風に家事をしている。

なので、家事が出来るすずかとアリサが抜けるとR e - C ? D E の本部がとんでもないことになる。

「そう言えばそうだったね・・・わかつた。じゃあネバールいいかい？」

「・・・構いません」

「よし、じゃあ機動六課に行くのはあーちゃん、ヴァント、ネバール。本部に残るのは僕、すーちゃん、
エミリオンでオッケーだね？」

その言葉に全員頷いた。

「うん、僕はこれからは一ちゃんと連絡を取つていつ向こうに行くことになるか打ち合わせるから六課に行くみんなは準備だけはしておいて……じゃあ解散」

そう言つと零はさつと部屋から出て行つた。他のメンバーも皆、部屋を出て行つた。
部屋を出て無機質な白い廊下を歩いているとアリサは後ろからすずかに声を掛けた。

「すずか」

「あつアリサちゃん」

アリサが声を掛けるとすずかは振り向いた。

「すずか、感謝しなさいよ？」

「えつ？」

「だーかーら一人が折角好きな人から離れないようにしてあげたんだから感謝しなさい」

最初は何を言われたのか良くなかったが、やがて理解した途端すずかの顔はぼんと音が出るくらい赤くなつた。

「なつ何言つているのアリサちゃん！？」

狼狽するすずかを尻目にアリサは大きなため息をついた。

すずかが零に思慕の念を抱いているのはRe-C?DEのメンバーはもちろん、なのは達も周知だ。零本人は気づいていないようだが・

正直な所すずかがいつから零を好いていたかは他のみんなは知らない。おそらく初めてすずかから零を紹介されたときからすずかは零の事が気になっていたのだろう。

「いいすずか？あの超鈍感男を落とすにはせりに色々やらないと駄目よ？」

「こつ色々？せりに？」

「そうよ。今まで色々なアプローチをあいつ仕掛けてみたけど、あいつはほぼ感じなかつた」

アリサの言つ通りすずかはなのは達からのアドバイスを受けて、零に対し色々なアプローチを仕掛けたが、確かに零は喜んだりしたりもした事があつたがそれだけで、結局親友以上の関係になることは無かつた。

「うん、そうなんだけどねやつぱり零君どこか普通の人と違うから・・・」

「・・・確かにね」

零は昔から少々変わつた少年だつた。自分の興味があるものを見つけたら直ぐにそこに行き、周りの人間が気がついた時にはすでにいなくなつてゐる事が多々あつた。もっともその度にすずかが見つけ出すのだが・・・

「・・・やつぱり零君引きずつているのかな？」

「すずか？」

小さく呟いたすずかに聞くアリサ。

「えつううん何でも無いよ」

「そつ・・・・・せひとと私もそろそろ準備しないと・・・・・じゃあす
ずか頑張るのよ?」

「ううん・・・・・」

アリサはそれだけ言つと自分の部屋に戻つた。廊下の角にアリサが消えるのを見たすずかはその場で大きなため息をついた。
おそらく零の家族を除けば自分が零と一番付き合いが長いと自負している。あの日の夜に聞いた話は自分以外知らない事だらう。誰も知らない零の秘密を知つているところうつれしたと反面、その内容を誰にも打ち明けられない苦しさもある。

「零君・・・・あなたはじこに行こうとしているの?」

すずかの咳きに答える者は誰もいない。

「じゃあそつこつ訳で」「おつけーや来る日は」の口で

血塗ではやじと最終の打ち合わせをしていった。

「しかし・・・・はーちゃんこれは親友としての忠告だよ」「・・・・なんや?」

「レジアス・ゲイズは機動六課を潰すつもりだ。明確な理由をぼかし、地上の人間ではなく本局の人間で固められているからね」「確かに・・・・けど、ビリしても必要な事やからな」「・・・・予言の事?」「...?」「その顔を見るとまたのようだね」

「……何で零君が知っているん?」

「僕にわからないことなんてそつは無い」

くすりと笑う零に内心はやてはまたかと思つた。零はたまに全てを見透かすような目をする。今もそんな目をしている。事実今までの人生で零に自分の秘密をいきなり知られたこともたまにあった。それでも探ろうと思つたら探せる秘密なのでいいが、今回は零が絶対に知らない事だというのに。

「はあ、まあええわ。零君のそれはいつものことやし」

「そうそう。気にしない気にしない」

少し話した後はやてとの通信を切り零はふつとため息をついた。

「……いいのか? あんな事を言つて」

そう言つのはヴェントでソファーに座つておりネバールは壁に寄りかかっている。

「何が?」

「予言の事だ。まだ話すのは早かつたんじゃないのか?」

「大丈夫さ。はーちゃんもそんなに深く考えないよ」

「ならいいが・・・・」

「・・・・それで、我々をここに呼んだ理由は?」

零はあの後ヴェントとネバールを自分の部屋に呼びつけたのだ。

「いやあ、ちょっと一人に釘を刺しておいつと思つて」

「釘?」

「そ、頼むからあつちで面倒な騒ぎを起しきれないでね。処理する」

つちが大変だから

「・・・・善処しよう」

「わかりました」

その言葉に満足そうに頷いた零は直ぐに真剣な表情になつた。

「・・・・いいかい一人とも、能力はあまり使わないでね」

「わかつてゐる。管理局に田をつけられたらたまらんしな」

「ヴェントはもう聖王協会に知られてゐる存在なのでは?」

「・・・・もう俺は協会とは関わりは無い」

「そうですか・・・・」

「ふうん。素直じゃ無いね」

「おまえに言われたくない」

「えつ何のこと?」

まるでわからないと言つた顔の零に、ヴェントはため息をつき、ネバ
ークはクスリと笑つた。

EPISODE 6（後書き）

いかがでしょうか？次いつ更新になるかはわかりませんが頑張って
投稿します

EPISODE 7 (前書き)

こないだ総アクセス数が12000超えました。やつたー

「じゃあ午前の訓練はここまで
『ありがとうございました！』

機動六課訓練スペースで午前の訓練を終えた先日リー・アレールにいたフォワードメンバー四名がなのはと一緒にいた。

ブウウウウン

「えつ？」

訓練スペースから機動六課本舎に戻る途中、バイクと車の音が聞こえてきてそちらの方を見たら徐々に近づいてくるバイクと車があつた。

「あれつて……」

「誰かな？」

フォワードちびっ子組のエリオとキャロが一人そろつて首を傾げた。

「ティアティアあれ誰だろ？」「

「さあ？」

もう一組のスバルとティアナも首を傾げていた。

「ああ……もしかしてもう来たのかな」「
「なのはさん？」

一人なのはだけわかつたようで頷いていた。
やがて徐々にこちらに近づいてきた。そう近づいてきた

「ねえティア……」「ええ……」

車とバイクは「ちらり」と近づいて来た。スピードを落とすやうにだ……

「…………って、ちょっととーせーの車とバイク止まつてください……」
なのはは慌てて止まるように大声を上げるが……車とバイクは
止まる気配は無い。

「ちよ、みんなよけるよー」「はっ、はいー!』

そう言つと顔が脇に逸れた。そして皆がいた場所に車とバイクが止
まった。

「ふむ……よけたか」

そう言いながらバイクから降りた男はヘルメットを被らず、ゴーグ
ルだけをつけていた。

「久しぶり……と言つほど時間はたっていないか高町」「この声もしかして……ヴァントさん?」

ゴーグルを外すとその顔はヴェントだった。

「ああ」

ガチャリ

音が聞こえて、その方向を見ると車のドアが開き、ふらふらとおぼつかない足が出てきたのは・・・・・

「アリサちゃん？」

アリサだった。その顔は青く、今にも吐きそうだった。

「だつ、大丈夫アリサちゃん？顔色悪いよ」

「うえ、もう最悪・・・・・」

「何をそんなにうめいているんですか？」

ネバールが運転席から降りて不思議そうに聞いた。

「ネ～バ～ル～、忘れていたわあんたの運転・・・・・」

アリサはじろっとネバールを睨みつけた。しかしその眼光はひどく弱っていたが。

「一体何があつたのアリサちゃん？」

「ネバールの運転はとんでもないのよ」

「どういう事？」

「ここまで来る道のりで法定速度ぎりぎりのスピードで車を走らせ、他の車を色々と荒っぽい運転で追い越したりしていたから揺れるわもう大変よ・・・・・」

「うわ・・・・・」

アリサの顔を見る限り相当ひどかつたようだ。

「なやははは・・・・・けどヴェントさんとネバールさん危なかつた
ですよもう少しで当たる所だつたですよ?」

アリサに苦笑を返し、なのはヴェントとネバールの方を向いた。
いくら躲せたからといつても危つくひかれそうになつたのだから無
理もない。

「ん? 零がそうしろといつたんだが」

「えつ、零君が?」

「ふむ。高町は驚いている時の顔がすごくおもしろいから何か驚か
せることをしたらいいよと言つたんだが・・・・当てが外れた」

「いや・・・・あれじや黙田でしょ」

はあとため息をつきながら携帯型酒瓶を取り出すヴェントに突っ込
みを入れるアリサ。

「ふふふ、そつかー零君が全く・・・・今度あつたらO・H A・N
A・S Iしないとね?」

黒い笑みを浮かべながら笑うなのはにその場にいる殆どの人間が、
怖!-!と思つたのは言つまでもない。

「つおー。」

「どうしたの王様?」

「いや・・・・なんか急に寒気が・・・・」

「あへもしかして、ヴェント達が行く前に言つた言葉かな~」

「えつちょ、ホント?」

「零君・・・何いつたの？」

Re-C?DE本部で一人の青年が悪寒に震えていたのは言つまでもない。

「零君のお仕置きは後でと言つ事で・・・じゃあはやでちやんに所に行きましょうか。案内します」

「ああ」

「お願ひね、なのは」

「・・・」

ぞろぞろと再び隊舎に向かつて行くメンバー。そんな時ティアナは視線を感じ、その方向を向いたが誰も向けておらず氣のせいかと思ふにしなかつた。

しかしティアナは当たつていた。誰にも気づかれないように静かにヴェントはティアナに視線を向けていた。

(あの日から随分大きくなつたものだ。なあ、心友よ)

人知れずヴェントは心中で今は亡き心友に語るのだった。

「はやて久しぶり。元気みたいね」

「せやな、アリサちゃんも元気そうで何よりや

親友同士で話しが弾むアリサとはやて。

「ちよつとはやて、ヴェントさん達が・・・」

「ああ、せやつたな。ごめんな。改めまして機動六課部隊長八神はやてです。よろしくうな」

あの後はやてのいる部隊長室に行き、フヒイトや副隊長達も連絡を受けてそこにいた。

「で、そちらにいるのが……」

「スター・ズ²ヴィータだ」

「ライトニング²シグナムだ」

赤毛の三つ編みの少女とピンク色のポニー・テールをした女性がそれ各自紹介した。

「ヴェントだ……」

「……ネバール」

対する二人は素つ気ない。むつとなる二人。

「……ええと、ほなうじじどのアリサちゃん達の役割を説明するわ」

何となく険悪な雰囲気を振り払う様にはやはては仕事の話に話しづをえた。

「まずはレリックを狙うドーパント専門の遊撃部隊として働いて貢います。ホールサインはどうしようか?」

「そうねえ……わたしはR e - C ? D E O 2、ヴェントはR e - C ? D E O 3、ネバールはR e - C ? D E O 4でお願い」

アリサとはやはては話をどんどん進めていく。

「でフオワードとも一緒に前線で戦つてほしいやけど……」

「断る」

はやての頼みをネバールが一蹴する。

「貴様、主はやての頼みを断るのか?」

シグナムネバールを睨み付ける。ヴィータも口には出していないが、同じ気持ちの様だ。

「いひネバール!」

アリサがとがめる様に言つがネバールはいつも通りの表情でいた。

「えつと……一応教えてもらつてかまわへん?」

「……俺の仕事じゃない」

表情を変えず言い切つたネバールにその場にいたヴォント以外の者は目を丸くしていた。ヴォントは気にせず酒を飲んでおり、アリサもああと顔を覆つていった。

「……はい?」

一番早く回復したはやてが再び聞き返えした。

「だから俺のっこでの仕事はドーパント対応だけだ

「えつと……」

「ごめんみんな。こっこいつも奴なのよ」

アリサがすまなそつに呟づ。ネバールは基本こととさドライな性格

をしており、零に言われた仕事以外は一切やらない主義なのだ。

「あー……零君が言つていたのは『』の事やつたやんやな」

はやてが小さい声で誰にも聞こえない様にぼそりとつぶやく。

「はーちゃん、ちょっと言つとかないといけない事があるだ……」

「なんや、零君？」

普段はきはきと答える零にしては珍しく歯切れが悪い。

「その……六課に行くメンバーなんだけど……」

「アリサちゃん達？」

「あーちゃんは良いんだ。ただ僕は気にしていないけど他のメンバーがね……」

「他のメンバーって確か……」

「ヴェントとネバールの事なんだ……」

「二人がどうかしたんか？」

正直な所はやてもそつだがなのはもフェイトも余り一人と話しを交わしたことは無い。

「二人とも正直に言つと……性格がちょっと……ねえ？」

「性格が……？」

「うん……僕たちRE-CODEでは大丈夫なんだけど、多分ヴェントは大丈夫だと思うけど、ネバールはもう何言つても意味無いから気にしないでね？」

「はい？」

「会えば解るよ」

(なるほどこれはまたやな)

はやては心なかでため息をついていた。
ネバールは相変わらずの表情で、シグナムとガイータは睨み付ける
し、アリサは手のひらで顔を覆つており、ヴォントも我知らずと言
つた風だ。

フェイドはおおむりしているし、なのはも困惑している。

「せひと、話はおしまいや」

席を立ちながらひそひそしゃべりはじめるやつ。
それにならい次々と他の者も立ち上がる。そんな者の中にはやてこ
声を掛ける人物がいた。

「主はやて、よろしいですか?」

「なんやシグナム?」

シグナムだった。

「実はこの者達のどちらかと模擬戦をしたいのですが……」

「なんやて?」

「この者達が使うガイアメモリの戦士の力を知りたいのです

キラキラと田を輝かせて言つシグナムにああとRe・Co?DEメン
バー以外は納得した。

シグナムは戦闘狂バトルマニアだ。故に自分の知らない力を持つRe・Co?DE

に興味を持ったのだらう。

「えーと、誰かやつて貰つ訳には・・・・

「いつなつたシグナムは止められない。わざとやるに限る。

「・・・・俺がやる」

そつぱつのば、ヴェントだった。

「あー・・・・あんたがやるなら良いわ

「ふむ、改めて名乗らせて貰おつ。機動六課ライティング2烈火の
将シグナム」

「Re-C?DE03瘢痕の破壊神ヴェント」

それぞれ自分の肩書きを名乗り、見つめ合つた。そこにはお互いを
強者と認め合つた二人がいた。

「すぐに訓練場へ行こ。構わんな？」

「ああ」

そつぱつの一人はさつさと部隊長室を出て行った。
わざと行つてしまつた一人に部屋に残つてゐる者の殆どはしばし
ぽかんとしていた。

「・・・・どういづ事だ」

「何がだい？」

「とぼけるな！――Re-C?DEの半数を機動六課に送つた事だ

「……」

「……モニター越しとはいえないでしょ

レジアス」

零は半眼でモニター越しの人物を見つめた。いつか連絡が来るとは解っていたがこんなに早いとは。自分の席に座っているすずかは心配そうに零を見つめ、エミリオンは面白そうに事の成り行きを見つめていた。

「レジアス……貴方も解つてはるはずだ。ドーパントは僕たちしか倒せないと」

「だからといって……あの機動六課にこれ以上戦力を増やすなど……」

再びの怒鳴り声に零は顔をしかめる。まさかここまで本局と地上の溝が深いなんて。

「……レジアス、貴方の怒りも解らなく無いけど、半分は残つているんだ。地上の方は僕たちで対処するからだ」

レジアスはまだ興奮しているのか息が荒い。それでもやがて落ち着いてきたのか呼吸が整ってきた。

「……すまない。取り乱した」

「全くだよ、そんなに怒つていると……禿げるよ?」

「禿げるかー! まだまだふさふさだ!!」

「今はね……」

「やめんかー! 怖くなつてくだろ?」

怒鳴るレジアスにクスクス笑う零。すずかは苦笑いをし、エミリオンは二コ二コしている。

「さてと……レジアス、あなたの懸念もわからぬもない。だが忘れたかい？僕たちの契約を」

「むつ・・・・・」

レジアスは苦い顔をする。管理局とRe·C?DEとの間に結ばれた契約はこうだ。

- 1、管理局はガイアメモリの事件と判断された事件はRe·C?DEへ捜査を任せ、情報を託す。
- 2、Re·C?DEはその代わり他の事件の協力を約束する。
- 3、なおガイアメモリ事件に関して管理局はRe·C?DEに情報を求めてはいけない。

「これだろ・・・・・」

「そうそう。良く覚えているね」

「ふん！忌々しい事にガイアメモリは貴様らしか対応できんからな」「まあね・・・・・ガイアメモリは魔法が効かない。質量兵器だつて怪しいものだ」

「そもそもこちらは貴様らに情報を与えているのに、貴様ら情報を与えるのだ」

「・・・・・レジアス、あなただけてわかつているはずだ。あの事件を体験したのだから・・・・・」

その言葉にレジアスは少し暗い顔になった。

あの事件、まだ零達がミニドで活動し始めた頃で、Re·C?DEもまだ出来ていなかつた頃だ。当時管理局は交渉していた零の言葉に耳を貸さず、ガイアメモリ事件を独自で解決しようとした。

その結果、たつた一体のドーパントに担当魔導士の大半をやられ、町にもかなりの被害が起きた。

零はそのドーパントを難なく斃したため、これにより管理局上層部はガイアメモリ事件を零達に委任し、先の契約を交わした。

「別に僕たちはあなた達のじがらみについて興味は無い。僕たちには僕たちのやるべき事があるからね」

「・・・お前達は何をしようというのだ。ガイアメモリ事件を解決するだけとは到底思えない」

「それは秘密」

人差し指を口に当ててにこりと笑つた零に対しレジアスはまた苦い顔をした。

EPISODE 7（後書き）

いかがでしょう。感想とかくれるとありがたいです。
になるかは解りません
次投稿は何時

EPISODE 8 (前書き)

今回から少し文章の構成が変わります。

機動六課訓練場。そこには一人の人間が立っていた。

一人は機動六課副隊長シグナム。すでに騎士甲冑を纏い、剣型デバイスレヴァンティンを手に持っている。もう一人はR e · C ? D E 03ヴェント。こちらはいつも通りの私服で酒を飲んでいる。

「じゃあ、二人ともあまり本気の勝負はやらないことええね？」

「はい」

「問題無い」

訓練場に浮かぶモニターに映るはやてにそれぞれ答える二人。

「ほなう……試合開始！」

シグナムはレヴァンティンを構え、ヴェントはロストドライバーを腰に巻いた。

「では見せてもらおうか……仮面ライダーとやらの実力を」

その言葉に、ヴェントは少し嫌そうな顔をした。

「ん？ デウした」

「いや……あまり俺を仮面ライダーなどと呼ぶな

「何故だ？」

「元々その名は零が名乗れといったものだ。あまりそれを使いたくない」

「そうなのか」

「誰が好きこのんでそんな特撮ヒーローみたいな名を使うか」

「へっくし！」

「やだ、零君風邪？」

「んー誰かが僕の噂しているのかな」

Re-C?DE本部で一人の青年がくしゃみをしていたのは別の話

「まあいい。私は貴様と戦えればそれでいい

「そうか」

『CYCLOONE』

ヴェントはサイクロンメモリを起動させ、ロストドライバーの右側のスロットに挿入、そのまま右側に展開した。

「変身」

『CYCLOONE』

音声と共に緑色の風がヴェントの体を包みそして風がやむと緑色の体の仮面ライダー サイクロンがいた。

「では……」

「行くぞ！」

そして同時に二人は地面を蹴り開いてに接近した。シグナムはレヴァンティンをサイクロンは右手の拳を風を纏わせながら放った。

ガキイイン！

レヴァンティンと拳をが当たると、当たりに余波の風が吹いた。

(「一拳一つでこれほどのかとは……」)

(ほら、中々いいな)

二人とも正反対の事を考えて、距離を取つた。そして、少しお互い動かすにいた。

『一』

二人は再び同時に動き出し拳と剣を交えた。

「はあ！」

「ふん！」

シグナムは剣をサイクロンに斬りつけるが、サイクロンは腕に風を纏わせたりしながら防ぎ、サイクロンは、拳に風を纏わせながら打ち込むがシグナムは剣と鞘で防ぐ。

一見お互い決定打が決められずにいるように見えるが、確実にサイクロンの拳はシグナムにダメージを与えていた。

(くつ……手が痺れてきたか。あいつの拳は恐ろしいな)

サイクロンの拳はRe-C?DE内最強を誇り、生半可なシールドでは直ぐに破壊じわしてしまう。もつともシグナムはそのことを知らないが・・・

(どうする……そろそろ……)

「そろそろけりをつけるか」

「……」

今自分が思ったことを言わされて動搖するシグナム。

「何故自分の考えがわかつた?」と言いたそうな顔だな

シグナムは答えず、サイクロンはそのまま続けた。

「知れたこと。俺自身の拳は俺が一番知っている。いくら剣や鞘で防いだところで、ダメージはたまつてくるぞうだろ?」

図星だった。

「まあいい。次で決める

そつこいつとサイクロンはサイクロンメモリを取り出し、右腰についてこるマキシマムスロットに挿入した。

『CYCLONE MAXIMUM DORIVE』

するとサイクロンの右手の拳に風が渦巻き始めた。

「ならばひらも……レヴァンティンカートリッジロード』

レヴァンティンがカートリッジをロードすると刀身が炎に包まれた。

「行くぞ……

「来い……』

再び固まる一人。見学している者達も固唾をのんで見守っている。そしてどこともなく一枚の葉っぱが落ちてきて、やがてその葉が地

面に落ちたとき、

『……』

二人は動き出した。

「^{ひか}破壊れな」

「紫電一閃！」

サイクロンの風とシグナムの炎がぶつかり合ひ、強い衝撃波を辺りに出した。その余波は見学していた者達の所まで来た。

「あやあー」

「くつー」

「ど……どうなったんや」

モニターを見るが土煙のせいで見えてこない。

(どうだ……)

シグナムは片膝をついて、荒い息をしながら辺りを見渡した。先ほどの自分の紫電一閃とサイクロンの拳の勝負はお互い衝撃波で吹き飛ばされて、サイクロンは位置がわからない。

「……奴は一体どーじ……」

「……こじだ」

「……」

声がした方向に慌てて向くとそこにはやうりとサイクロンが現れた。

「いつの間に……」

「気配を読むのは得意なのでな」

それだけ言つとサイクロンは拳に風を纏わせた。

「ぐぐーー！」

シグナムは慌てて立ち上がり、レヴァンティンを構えようとするが、
「遅い」

サイクロンがそれよりも早くシグナムの懷に入つて、右のストレー
トに思いつきりぶちかました。

「ぐ……ぐふおー！」

あまりの衝撃にシグナムの騎士甲冑が一部破損した。

「すさまじいな……その拳……私の……騎士甲冑を超えて私にダメ
ージを喰らわせるとは……」

「ふつ……だがこれで俺の勝ちだ。勝利はこのヴェントが頂く」

「そうか……また……戦おうではないか……」

それだけ言つと、シグナムは意識を落とした。

「……こつでも相手にならぬ」

土煙が晴れた後そこにいたのはシグナムを肩で背負ったヴェントだ

つた。

「シグナム大丈夫なの？」

フェイトが心配せつな声を挙げる。

「心配はこりん。ちゃんとダメージが体に残らないよつじ当て所を考えた。今日一晩ゆつくり寝れば大丈夫だろつ……さて医務室はどこだ？」

「えつ？」

「いや……一応運んでおいつと思つてな」

じゃあ私が案内しますと言つてフェイトはヴェントを連れて行つた。

「ティア、ティアすゞかつたね！！」

「まあねあれがガイアメモリの戦士の力、……」

「すゞかつたねエリオ君！」

「うん」

フォワード陣はサイクロンを褒め称えていた。

「まさか、リミッター付きとはこえシグナムに勝つとはなあ

はやて自身サイクロンの実力を改めてみてすゞ」と思つた。

「こことは、ネバールさんやアリサちゃんもあれぐらこ……？」

「いやいや、ヴェントの強さは反則だから。あれと同レベルなんてRe・U? DEじゃあ零とネバールぐらこよ」

なのはの予測をアリサが否定する。Re・U? DEの強さ頗るはヴェ

ント、零、ネバール。その下にエミコオン。さらにその下にアリサとすずかといった感じだ。

「アリサちゃん……？」

いきなり黙り込んだアリサを見てなのはは声を掛けた。

「どうしたのアリサちゃん？」
「いや……そういえば本部の零達どうしているかなと思つて」「零君達？」
「うん……あれなんかどんどん不安になつてきた。すずか一人での一人の面倒見切れるかしら……心配なつてきた」
「あ、にやはははは……」

エミコオンは知らないが零の事は良く知つてるので不安なアリサを見てなのはは苦笑いしか出来なかつた。

件の零達はと言つと、

「あー」
「暇だね～」

だらけきつていた。零とエミコオンは、なおすずかは本部の掃除をしていた。

現在零達がいるところは本部のラウンジに当たる所で、一人とも大きめのソファーでぐでーとしている。

「ふー一人とも掃除おわつ……つて二人とも何しているの？」

すずかが掃除を終えラウンジの扉を開けるとだらけている一人を見て呆れた。

「やあ、すーちゃん。いやね、何かやること無くてもう暇なんだ」「私も王様と同じく〜」

はあとため息をついてすずかはラウンジにある冷蔵庫からペッドボトルを取り出し、キャップを開けて、中の水を飲んだ。本部は思つた以上に広く普段はすずかとアリサの二人が分担してやつてているのだが、アリサが機動六課に行ってしまったのですすか一人でやる羽目になつていていたのだ。

「もう、そんなに暇なら少しば掃除手伝つてよ」

「えー……だつてすーちゃんがやらなくて良いって言つたんだよ?」

「そ〜そ〜」

うひ、となつてしまい何も言ひ返せないすずか。以前も他のメンバーに家事をやらせてみたが、零は几帳面な性格をしており、少しでも測り間違えるとやり直しそしたらどんどん変な事になつていった。ヴェントは適当に洗剤や調味料を入れたりして、零と同じく変な事になり、ネバールは頭は非常に良いのだがそれだけで家事スキルは一切無い。

エミコオノはやろうと思えばやれるし彼女の料理は一級品だ。唯やる気が無く、気まぐれでしか料理を作らない。

「はあ……」

すずかが再びため息をつくと零の近くにモニターが開いた。零はそのモニターを見ると顔色が変わり、起き上がりソファーに座り直した。

「零君……？」

「もしかして王様……？」

「うんドーパントが現れた。場所はミッドにあるショッピングモール。数は一体

エミリオンも真剣な表情になり、すずかも零の側に来た。

「で、誰が行くの？」

「じゃあ僕が……」

「駄目よ。零君は本部で待機よ」

零が名乗りを挙げようとしたがすずかが駄目と言った。

「……」

「そんなえーっと顔をして駄目。それに零君こないだ外に出たばっかりでしょ？」

「そうだけど……」

「とにかく、今回は私が行く。良いよね？」

やがて滲々といった風にはーーと零は答えた。そんな二人を見てエミリオンは相変わらずニコニコしていた。

「いやー、じつしてみると一人つてなんだか姉弟みたいだよね~」

それは昔から良く言われることだ。暴走する零をすずかが止めるそんな関係は一人が初めて会ったときからずっとそうだ。逆にそれ以上関係にずっと進められないのだが……

「ふつふふふふふ姉弟かー……ホントそれ以上の関係になれないん

だよね

ぶつぶつと文句を言いながら体育座りしているすずかに零は義父の
教えのそういうときの女性は強く言わず控えめに言つ事と言つ教え
を守りながら声を掛けた。

「あーすーひゃん? 行くななり早へじつて欲しいんだけど……」

ためらいがちに零。その言葉にはつとして立ち上がるすずか。

「「うへ」めぐみ君……じゃ、じゃあ行つてきまーす」

それだけ言つとすずかはそれくちにラウンジを後こうした。

「じつしたんだひすーひゃん?」

「はあ……H様の鈍さは筋金入りだね」

「えつ?」

「何でも無いよ~」

ミッドのショッピングモール。そこには蜂の記憶を持った怪物
ビーダーパントが暴れ回っていた。

「はっはっははははー!! すげえぜこの力これさえあれば管理局の連
中に吠え面をかかせてやれるぜ」

ビーダーパントは自身の能力で無数のビー兵士を作り出していた。

「…………それは出来ませんよ」

「一誰だ!!」

このショッピングモールはすでに殆どの人間が避難しており管理局員がここから一帯を封鎖しているので人がいるはずがないのだ。

それは紫色のローブを羽織り、顔をフードで目深く被つたすすかだつた。

Re-C?DEは”エデン”にその正体を知られないために、仕事の時は素顔を隠す必要があるので。もつともヴェントのように素顔が割れている者もいる。

「まあ、さつやと終わらせよ」と

そう言いつとすずかはロストドライバーを取り出し、腰に巻いた。そして懐から黄色で月の形の「と書かれたメモリを取り出した。

『LUNA』

幻想の記憶を宿したメモリ ルナメモリを起動させてロストドライバーのスロットに挿入し、右に展開した。

「変身」

『LUNA』

すずかの体を光りが覆い、やがて光りがやむと黄色の体をした幻想の戦士がいた。

「てめは……！」

「あんまり名乗りたくないけど…………仮面ライダールナ」

EPISODE 8（後書き）

いかがでしょうか？感想とか待っています

EPISODE 9 (前書き)

何とか書けました。これからしばらく部活の合宿なので更新出来ません

「仮面ライダーだと……？」

「…………あまりその名で呼ばないでくださいね？恥ずかしいですか
」

「

ビードーパントの言葉にルナは少し嫌そうに答えた。

「フン！仮面ライダーだかなんだかしらねえが！」の俺に勝てる訳ね
え！」

そう言いつとビードーパントは生み出したビー兵士をルナに襲わせた。

「…………」

ルナは慌てる「」とともに自分の周りに群がつてこむビー兵士をぐる
りと一警すると、そのままその場で一回転した。

「はっ！」

するとルナの両手が鞭のようこ伸びて、ビー兵士を蹴散らしていく
た。

「なっ…………！？」

そしものビードーパントもこの攻撃は予測出来なかつたのか驚いて
いた。

「ふう…………残念でしたね。私のルナメモリは対多人戦でも

個人戦でもどちらでも対応出来るんですよ

すずかの言葉通りルナメモリは使用者に幻想的な能力を与えトリックな戦法が可能になる。

「くそ……！ なめるな！」

再びジークーパントはジークーピー兵士を生み出し、ルナに襲わせた。

「同じ事を……」

またジークーピー兵士を蹴散らしつとしたが、嫌な予感がしてその場から離れた。

ヒュン

するとジニー兵士の数体が針を飛ばしきて、先ほどまでルナがいた場所に突き刺さっていた。しかも針が刺さっている場所から周りの地面が黄色く変色していた。

「これは……」

「はつはつは！ 驚いたか。こいつらの針にはいろんな種類の毒があるんだよ！ 痢れたり、眠ったりいろんな毒がある」

わざわざ教えてくれてありがとつと胸中で呟いてルナは対策法を考えた。

(どうする……奴の話が本当だとすると、少々面倒ね…………零君から他のメモリを借りていかないし)

やレジラーピークーパントにての対処法が思ついた。

(ルナ)……………あたわば怖いけど当たらなければ良いんだ

「これで終わりだ!…」

ビードーパントのかけ声と共にビー兵士は再びルナに毒針を繰り出した。しかし、

「……………はう…」

ルナは腕を伸ばしビー兵士の一體を掴むとそのまま掴んだビー兵士に近づき全て躰した。

「くそ!逃げんな!」

ビー兵士はまたルナに毒針を打ち出した。

「…………」

対するルナは掴んでいたビー兵士を頭にした。

「なに!…?」

そして針が刺さったビー兵士をそのまま他のビー兵士の所に投げつけ、動搖して所を腕や足を伸ばし全てのビー兵士を叩き落とした。

「なつ……………」

「確かにあなたの兵士の毒は恐ろしい…………ですが、当たらなければどうって事ありません」

それだけ言つとルナはビーダーパントの頭を腕を伸ばし掴んでビーダーパントに近づいた。

「ぐむーー」

「はつーー」

ルナは回し蹴りの要領でそのまま右足を伸ばし何度もビーダーパントに叩きつけた。

「う…………ああ

「まだまだ行きますよーー」

それからルナは何度も体を回転させながらその度に両手足を鞭のように伸ばしながらビーダーパントに叩きつけた。

「くそがあーー

「無駄だと書いてます」

ビーダーパントは負けじと腕から針を何発も打ち出した。

そんなビーダーパントの針をルナは伸ばした腕ですべて呪き落とした。

「う…………そだろ」

「これで終わりになります

そう言つとルナはルナメモリを抜き、右腰のマキシマムスロットに挿入した。

ルナの体は六体に分身した。

「増え……！」

「さあ、終わりです」

分身した三体は腕を伸ばしビーダーパントに叩きつけた。そして残りの三体はビーダーパントに近づきクロスチョップを叩きつけた。

「ぐああああああああああ！」

「田には田を歯には歯を、悪には永久の懺悔を」

ビーダーパントは爆発し、煙が晴れた後一人の男とメモリブレイクされたビーメモリが落ちていた。

「さてと……」

すずかは変身を解くと、ロープの中から通信端末を取りだし零に連絡した。

「…………あつももしもし零君？…………うん倒した…………大丈夫だよ。メモリの相性も良かつたし…………うんじやあ犯人はいつも通り管理局に…………そう、この人”エデン”の人間じゃ無い」

”エデン”はメモリの実験の為、組織の人間以外も売人の手を通じて売られている。そんな事件の場合は管理局のガイアメモリ担当の人間に引き渡し、逆に”エデン”関係者の場合はR e - C ? D E本部に連行し”エデン”的情報を引き出すために尋問する。専らその

役目はネバールがやつているのだが。

「じゃあ…………うん、本部に戻るね…………！？」

突如視線を感じ、ぱっと辺りを見渡すすずか。しかし辺りにはドーパントの男が倒れているだけだった。

「…………うん何でもない。じゃあまた後で…………うん」

通信端末を切るとすずかは再び辺りを見渡した。

(確かに感じたんだけど…………誰もいない…………)

すずかは首をひねるが管理局員の声が遠くから聞こえてきたので急いでその場を後にした。

「…………驚いたな。気つくとは…………」

ショッピングモールから少し離れたビルの屋上から処刑人のドーパントがすずかを見下ろしていた。

今回は”Hデーン”の命令では無く独断ですすかを見に行つたのである。

「…………しかし、組織は何を考えている?」

前々から処刑人アサシンは組織の考えについて行けない事がある。前回のリニアレールの時もそうだ。やろうと思えば自分はエターナル一人ぐらいいならば何とか倒せる。にも関わらず組織は手を出さなくて良い

と言つた。

「…………組織はわざと泳がせている?」

「…………ここにいましたか」

処刑人アサシンの後ろから足音が聞こえてきて後ろを振り向くと後ろで手を組んでこちらに来る幹部の男アサシン……カルマがいた。

「…………何の用だ?今日は…………仕事が入っていないはずだ…………」

「いえいえ。あなたが任務以外でこういつた場所に行くのが珍しいので」

どうだかと処刑人アサシンは内心毒づく。元々この男はこの世界に来てからの幹部で普段から何を考えているのかわからない男なのだ。しかし、組織の新参の幹部にしては組織の運用を一部組織のトップから任せられるほど信頼されている男なのだ。

「なるほどあれがR e · C? D Eの一人ですか」

双眼鏡なども使わず肉眼だけでそれを確認したカルマに処刑人アサシンは少なからず驚いていた。

(こいつ一体…………何者だ?)

「さてと…………私もそろそろ戻らないといけませんね。あれらを開発するために」

「…………あれ?」

「ええ。エターナルが残した遺産の一つですよ。あれが完成すれば中々おもしろいことになりますよ?」

ニヤリと笑うカルマに色々な死線をくぐり抜けた自分が少しそくりとした。

(なんだこの男…………一体)

「ではまた仕事が入つたら連絡します」

カルマはそれだけ言つとビルの屋上に通じるドアに向かつて行つた。

「…………T2に唯一対抗出来る”R2”…………もつとも今はまだまだ試作段階のR1ですがね」

カルマはスーツのポケットから一本のメモリを取り出した。それは”エデン”幹部が使う”ゴールドメモリ”では無く、零達が使うT2にそっくりで違うのは端子の色が青色では無くプラチナ端子で、漆黒の翼のような形でしと書かれたメモリだった。

『LUCIFER』

とある管理外世界。そこではその世界の政治を制するために一つの勢力が長年争い続けており泥沼状態となつていて。そんな管理外世界だが今戦争が終わるとしている。一つの傭兵部隊により。

「第五部隊壊滅！！」

「第三部隊も壊滅！！」

「バカな！！AAAランクの魔導士が二人もいるんだぞ」

司令塔で次々来る報告に司令官は悲鳴に近い声を挙げる。

「どうしてこうなった。そんな事を考えながら司令官は今回の戦闘の事について思い返していた。

今回の戦闘で敵側がこの泥沼状態を開拓するために傭兵部隊を雇つたという情報を手に入れた。部隊名まではわからず、人数は少數精銳部隊であつたためたいしたことは無いと思っていたが……

「駄目です！！第六部隊とも連絡が取れません！！！」

「くそ！…どうなつてゐる」

次々と自分達の陣営の部隊がやられていく様である。わかっている情報はその傭兵部隊は質量兵器を使つており、さらにはどんな攻撃を受けても死なない事。

（くそ！一体何のどこの傭兵だ）

司令官が考えていると通信係から再び連絡が来た。

「てつ…………敵部隊まつすぐこちらに向かつてゐること……！」

「……何だと！？」

直ぐにこの司令塔の一階の映像を出すと次々に一階を守つてゐる部隊員が同じジャケットを着てゐる者達によつて殺されている。

そしてジャケットを着てゐる者の一人が監視カメラの方を向きニヤリと笑つた。

ぞくりとその目の奥に宿つてゐる狂気に震える司令官。笑つた後その者は拳銃で監視カメラを撃つたため、映像は砂嵐みたいになつた。

「さつ……さつさと奴らを殺せ！！早く！！」

「司令官は怯えたように声をあげた。

しかし司令官の願いは空しく、次々とその階を守る魔導士はやられていこうとに彼らはついにこの司令室にたどり着いた。

「よお。あんたが」この司令官だな？」

まるで旧友に会つたかのような親しさで話掛けてくるリーダーらしき男。

「まあ、以外とイケメンね！嫌いじゃないわ……！」

厳ついおひやんの箸なのに女口調で話す男。

「おい克己ーー！わざと終わらせようぜーー！」

「まあ待て……なああんたに聞きたいことがあるんだが」

リーダーらしき男、克己と呼ばれた男が司令官に向かつて歩き始めた。

「うわああああああーー！来るなーー！」

司令官は半狂乱になりながらもバイクスを起動させ魔導弾を克己に撃つた。

全弾克己に当たつたが……

「…………良い腕してんな」

何故かけるつとしている。司令官は驚愕した。

デバイスには殺傷設定と非殺傷設定という物がある。当然戦争中な

ので司令官も殺傷設定だ。なのにこの男は血も流れずナーフとしている。

「何で……」

「ほり……なあ、この[写真の小さい方のガキ見たこと無いか?」

克己は司令官の顔面の近くに[写真をつきだした。

「つ……知らな」

「あつや。じゃあ……死ね」

[写真を戻すと克己は一瞬で司令官の眉間に拳銃を突きつけて迷い無く撃つた。

パアーン!!

司令官は氣づくまもなく絶命した。

「何だよ克己…………またやっつまつたのか」

すでにその場にいた者達は克己以外のメンバーによって克己が話している途中で殺害された。

「まあいいじゃない。克己ちゃんも色々あるんでしょ

オカマの男がクネクネしながら言へ。

「…………もうここに用は無い。行くぞ」

克己は本当に興味なさそつて出口に向かった。他のメンバーもお互

い肩をすくめて、克己に続いた。

克己は司令塔を出ると、ポケットから何かのスイッチを取り出し、ある程度離れると押した。

ドカン！……！

すでにあちらーから煙りを出していいる司令塔から一際大きな爆発が起つて、司令塔は崩壊していった。

「うわ……克己えげつねえな」

克己はその言葉に応えずただただ写真を見つめていた。

「前々から思つたんだけどその写真って誰が映つているの？」

メンバーの一人真っ赤な髪をした女性が質問した。

「お前達が気にする事じゃ無い」

克己は写真を見つめながら答えた。

「お前達は先に帰つていろ」

克己の言葉にメンバーは反論することもなくそのまま行つた。

「…………零。お前はどうしているんだ？」

写真を見つめながら克己は呟いた。

その写真には少年時代の克己と小さい無表情の零が映つていた。

EPISODE 9（後書き）

いかがでしょうか？感想とか待っています。

R2は自分のオリジナルです。

あとアンケートを後書きのほうでやっているのでよかつたら見てください

EPISODE 10 (前書き)

お久しぶりです。今回は中々ネタが浮かびませんでした

「なるほど、うん報せあつがとつすーちゃん」

Re-CODE本部の零の血壓で零はすずかから今回の件の報告を聞いていた。

「うそ…………」

すずかはじりか浮かない顔で言った。

「へ.ビ.うしたのすーちゃん」

「えつひつて何でも無いよ」

そつづがすずかの顔は晴れない。

「仕事で何かあつたの…………？」

「やついつわけでは無いんだけど」

「こやこや～それは無いでしょ～？」

HIIコロンはつづがすずかは黙つているだけだ。

「じつしたのすーちゃん。聞いてみてよ」

「実は…………」

「視線ね…………」

すずかが感じた視線の事を聞くと零は手をあげて口を開じて

じつくりと考えた。しばらく黙つているとやがて目を開けた。

「もしかしたら処刑人かもしない」

「処刑人？」

「うん…………ん？ ああ、すーちゃん知らないんだつけ処刑人
の事？」

「えつ、うつうん。何それ？」

「処刑人つてのは文字通り処刑人のドーパント事さ。おそらく秘密
保持のため組織の敗北者達を殺す奴の事さ」

「殺すって……」

「まあ連中は秘密主義の組織だからね」

肩をすくめながら零は答えた。

「そう…………それでなんのメモリを使つているの？」

「わからない」

「…………へ？」

予想外の答えに一瞬すずかの頭をフリーズしたが、直ぐに我に返り、

「わつわからないうつて零君どういう事……？」

零に詰め寄つた。

「おつ落ち着いてすーちゃん」

まあまあとすずかを落ち着かせる零。

「僕だつて調べたいけど情報が少なすぎるんだ。実際僕たちは処刑
人の姿さえ見たことが無いんだから。男か女かもわからないし」

ため息をつきながら言つ零。

「やつなんだ…………」

「まあ今度出でたら絶対にその姿見るけどね」

「ヤリと笑つ零にすずかとヒコオルは唯苦笑するしかなかつた。

「わざと…………なんかニースやつてないかな~」

やつ零とヒコオルは零の血室にあるテレビをつけた。

『「』覗くださこー。』ミッドタワーもすでに完成間近。式典も予定通りの日程で行われるそうです

テレビにはレポーターらしき人物がでかいタワーの前に立つており、どうやらそのタワーの説明をしているようだった。

「何だいミッドタワーって？」

「知らないの零君？今ミッドでは有名なんだよ。こないだ買い物に行つたら色々な店でキャンペーンをやつていたよ」

「そうだよ王様～ミッドの住人で知らないの王様ぐらこじやない？」

「うつ…………しつ仕方ないだろ。僕はあまり本部から出られないんだから」

その言葉にすずかと常にヒコーコしているヒリオンは表情を曇らせた。“ヒテン”はあらゆる所に密偵を放つている。それこそ人通りは多いところや、人が少ないとこにも。零は“ヒテン”にとつて無くてはならない存在故、その身柄は常に狙われている。なので零が外出するときは仕事をするとき以外殆ど無い。管理局との交渉も

ヴァントとかを通じてしている。

「ほ…………他にも何か一コースやつてないかな？」

すずかは話題を変えるために、Hミコロンに質問する。

「ええっとね~どうだろ」

『臨時一コースをお伝えします。第17管理外世界で起きていた紛争がついに終末を迎えました』

「あれ、この世界、紛争終わったの!？」

すずかガ驚きの声をあげる。何せこの世界の紛争は何年もそれこそ零達が生まられてくる前から起きている物だ。驚くのも無理はない。

「一体何が決まり手だつたんだろうね~」

Hミコロンも不思議そうな声を挙げる。

『まだ確定情報ではありませんが勝利した陣営はある傭兵部隊を雇つたという情報です』

傭兵という言葉にピクッとき零は反応した。

『あ、たつた今入つてきました情報によりますと傭兵部隊の名前まではわかりませんが、現場での写真が入手出来たとのと申つ事で出します。こちらです』

そう言つとモニターに写真が映つた。画像少しづやけていて顔はわ

かりづらいが確かに何人の顔が映っている。

ドタン！！

大きな音がしてその方向にすずかとエミリオンが向くと、零が立ち上がり、その反動で椅子が倒れた音だった。

「どうしたの零君？」

すずかが言葉を掛け零の顔を見ると言葉を失った。何故なら普段は冷静沈着で常に落ち着いている零は驚きの表情をしているから。

「…………止めて」

「えつ？」

「写真で映像を止めて！－」

零の剣幕に押されながらもエミリオンはモニターを写真で止めた。そして零はそのままモニターに近づき写真を凝視した。

「れつ零君…………？」

「どうして…………君がそこそこいる？」

「王様…………？」

「何故だ…………壳口…………－－－－－」

ふらふらと壁に近づきそして思いつきり壁を殴った。

「…………って何しているの！－？」

一瞬零の行動が理解出来なかつたがやがて我に返り慌ててすずかは零に駆け寄つた。

「ちょっと零君！」

「大丈夫だよ……………またすぐに治る」

その言葉通り零の拳は血が滲んでいたがすでに治りかけていた。

「さうだけど……………でも一体何が……………」

「「」あん……………ちょっと一人にしてくれないかな……………」

弱々しく言つ零にすずかは声を掛けようとするが、肩を掴まれて後ろを振り向くとエミリオンが静かに首を振っていた。

「じゃあ零君……………夕飯までには来てね？」

その言葉に零は返さず、そのまますかとエミリオンは部屋から出て行つた。

バタン！

一人になつた零は大きく息を吐いた。

「はあ……………まさかこんな場面で君を見るなんてね……………ねえ

克己」

モニターに映る赤いメッシュを所々に入れている黒髪の青年とポケットから取り出した常に大事にしている写真に写つてている少年を見比べながら零は静かに呟いた。

「ん？」

「どうしたの克己ちゃん？」

「いや…………誰か…………懐かしい奴に呼ばれた気がしてな」

とある倉庫、そこは克己達傭兵部隊NEVERの秘密の隠れ家の一つだった。

「あらそひ…………それより克己けやん！次はどこの戦場行く？」

体をクネクネしながら克己に聞くオカマ…………泉京水が聞いた。

「そりだぜ。克己ー早く戦いたくて体がひびきしちるぜー。」

そりだのは普通の人間よりも何倍もでかい大男、雷全だった。

「あんた達少しは静かにしなさいよ」

倉庫の一室から出てきたのは赤髪の女性、ネリルがうつむきに向つた。

「何だよネリル！お前つれないなあ」

「うつむき。あんた達がうるさいせいでバイクの点検が中々進まないのよ。どうしてくれるのよ」

「まあまあ……てあれコウは？」

京水が辺りを見渡すがもう一人のNEVERのメンバーがいなかつた。

「ああ…………「ウならあそこよ」

ネリルが指さした場所を見ると、大量につまれているコンテナの上に一人の青年、コウが無表情でライフルを磨いていた。

「おい」「ウーにしてんだ?」

「…………銃を磨いている見ればわかるだろ?」

「そりゃそつだな」

ガラガラ

倉庫の扉が開く音がして全員ぱっと扉の方を見た。

「あれ、みんないたんだ」

入ってきたのはNEVERのジャケットでは無く普通の私服を着ている青年だった。それを見た五人は警戒を解いた。

「何だ、マキベルか。驚かせるなよ」

「全くだ……それで何かあつたのか?」

克己が寝転がっていたソファーカラ降りてマキベルの方に歩いて行つた。

「とりあえず、依頼の方は結構入ってきたね。後は…………例の物だ」

「…………R2か?」

「うん。まずはやつぱりまだ出来ていらないそうだよ。未だ試作段階を超えていないそうだよ」

「当然だ零の残した物だぞ? そう簡単に作られてたまるか

「ヤリと笑う克己はどこか楽しそうだ。

「克己はホントにその”零”って人が好きなんだね」

「まあな…………」

そんな克己を見て他のメンバーはひそひそと言葉を交わしていた。

「あの克己ちゃんがあそこまで評価するなんて…………」

「全くだぜ…………なあ、誰か零って奴知らないのかよ」

「ああ？ 私は知らないわよ。」

「…………同じく知らない」

そうNERVERメンバー克己以外”零”という人物について知らないのである。何度か克己質問してみたこともあるがその度に、

お前達は知らなくていい

そう言って答えずにいた。克己にはあまり強く出られないのでも、メンバーはあまり深く聞かなかつたのだが、

「けどよ、克己の奴はR2はその”零”って奴が作ったって言ったよな

「そうねえ。それだけだとガイアメモリの関係者かしり？」

「…………関係者ってレベルじゃ無いよ

『うわ――』

いつの間にかマキベルが近くまで来ていた。

「マキベル…………驚かせるなよ。つか、お前”零”って奴知つているのか？」

「うん…………一度だけ克己と飲んできたとき克己が漏らしたんだ」

『しつかし、皮肉なものだな』

『何がだよ克己?』

『いや…………』の俺がガイアメモリを求めるなんてな』

『ちょっと…………僕結構必死に情報を集めているんだよ?今更やめろなんて言つたら殴るからね?』

『そつは言つていな。唯零が作った物を使うのかと思つてな』

『へ…………?』

『ん?何だどうした?』

『いや…………克己…………零…………』って人がガイアメモリを作ったの?』

『ああ。そうだぞ』

「…………つて訳なんだ」

「おいおこ…………」

「あらまあ克己ちやんたらす!」に交友関係ね』

「それより肝心の克己は?」

「…………資料らしき書類を持って部屋に戻つた」

すでにその場に克己はおらず、メンバーは各自散つていった。

「全くマキベルの奴余計な事しゃべりやがつて…………」

自室のデスクの上で足を組んでいる克己は外の会話を聞き、舌打ちしていた。

その後しばらくマキベルの報告書を読んでいた。

パラ…………パラ…………

紙を捲る音だけがしていた。やがて飽きたのか、書類を机に放つた。

「はあ……たいした情報も無いな…………」

内容が自分の期待した物が全然無くがっかりした様子だった。

「………… なあ、零お前は一体どこにいるんだ?」

克己は天井に顔を向けて静かに呟いた。
同じ頃零も自室の天井に顔を向けていた。

「克己……どこにいるんだい?」
「もし次に会つたら…………」
「もし今度会つたら…………」
「俺が…………お前を…………」
「僕が…………君を…………」

『殺す』

EPISODE 1-0 (後書き)

いかがでしょ？ 感想とか待っています。あとアンケートまだやつているので活動報告の方を見てください

ピギンズナイト（前書き）

十話行つたことと、pvが一万超えた記念に零とすずかの出会いを
書きました

ペギンズナイト

「綺麗な瞳だね」

「えつ？」

今日初めて会った男の子は女の子の顔を見て「うつむいた。

「綺麗…………？」

「うん。すこしく綺麗」

すると男の子はいきなり女の子の頬を両手で挟み込み自分の顔に近づけた。

「ふえ！？」

「うーん。近くで見るともっと綺麗だな」

近くで話していた男性が気づき少年を少女から放した。

「うわ……一何するんだい義父さん」

「お前…………初対面の女の子の顔をいきなり触っちゃ駄目だろ？」

「そうなの？」

「…………ああ。わかつたか？…………零」

「はーい」

「全く…………すまない大丈夫かな…………すずか嬢」

「はつはい」

顔を少し赤くしながら女の子…………すずかは言った。

これが夢埜零と当時七歳の月村すずかの出会いだった。

「しかし……おもしろい子ですね」

月村邸の一室、そこには一人の男女とメイドが一人いた。

「まあな。扱い方が少し大変だ」

「あら……ハードボイルドなあなたがそんな事を言つなんておもしろいですね」

白いスースを着た男、夢埜莊吉のぼやきに対面に座っている女性……月村忍は紅茶を飲みながらクスリと笑った。

夢埜莊吉と月村忍、探偵どこの令嬢。何の接点もなさそうな二人だがそれなりの親交がある。

以前とある事件に巻き込まれた忍を助けたのが莊吉なのである。それ以来の仲なのである。

「さてと…………あの子何なんですか？」

「…………」

あの子とはすずかと一緒に近くの公園に遊びに行つた零の事だろう。忍も莊吉がかなり危険な仕事をしていることは知つてゐる。その延長線で零を保護したのかも知れない。しかし、莊吉は零を養子と言つた。莊吉が子供を引き取るとはよほどの事なのだろう。

「…………あの子は俺のある依頼人の願いで救い出された子だ。そして、あの子には特別な力を持っている」

「特別な力？」

バタン！

大きな音がしてそちらの方を向くと扉を開けて肩で息をしてくるメイドがいた。

「どうしたの？」

忍がそのメイドに近づきどうしたのかと聞くと、

「申し訳…………」「ぞこません……忍お嬢様。すずかお嬢様と零様が…………誘拐されました」
『一…？』

その言葉に忍と荘吉は驚きを隠せなかつた。

「何をしていたのー? いくらあなたが一人とはいえそんな……！」

「それがお嬢様……誘拐犯の一人がUSBメモリみたいな物を取り出し、そのスイッチを押し体に差し込むと変な怪物になつて……」

「…」

「変な怪物……？」

USBメモリといふ単語に反応した荘吉はステッジの内ポケットから写真を取りだしそのメイドに見せた。

「すまない…………犯人が使つたメモリとはこいつにうのか？」

荘吉が見せた写真にはどいか化石を連想させるデザイントメモリだった。

「あつそりです……これです！」

「莊吉さん……」

「やはりガイアメモリか……」

今は使われていない廃ビル。その最上階ですすかと零は捕まっていた。

二人とも拘束などは一切されていないが、周りには銃などで武装された男達がいるため逃げ出せない。すずかは怯え零にしがみついていたが、しがみつかれている零は些少の恐怖も見せず、むしろ犯人達を興味深そうに見ていた。

「はっはっは！－ボスやりましたね！」

「ああ。これで月村家から金をぶんどってやるー！」

犯人達は下品な笑い声をビルに響きかせた。

「零君……どうじょう？」

「大丈夫さ月村すずか。直ぐにでも義父さんが迎えに来てくれるさ」

不安がるすずかに零は安心させるよつて言つ。

「おいおい何だ坊主！かつこつけやがつて」

すると犯人の一人がニヤニヤ笑いながらこちらにやってきた。すずかはひつと短い悲鳴を上げ、零の後ろに隠れてしまった。

「何だい？僕達に構う暇があるなら拳銃持つてニヤニヤしていいなよ

「お前それ変な人じやねえか！」

「安心したまえ七歳の少女を誘拐している時点で既に変態だ」

「ちげえよー金銭目的だよー！」

「やうかな？本当は口で始まつてソで終わる…………」

「ちーがーうー！俺はノーマルだーーー！」

犯人の一人をいじくり回して楽しんでいる零。すずかの目にはものすごく腹黒そうな笑みを浮かべていた。

正直なところすずかはこの夢埜零と言つ少年がよくわからなかつた。もつともつこわつきあつたばかりなのでそう簡単にわかるわけでは無いのだが、この少年は既に自分ぐらこの年齢ならば体験していることも

ものすゞく興味を持ち、田をきりあひせながりしつるのだ。

「おい、何やつているんだ」

「ボス！」

ボスと呼ばれるこのグループのリーダーらしき存在が一いつ瞬間に近づいて來た。

「けつガキはおとなしくしていいやあ良いんだよ

「何ともまあ汚い言葉使いただ」

「れつ零君」

零は小馬鹿にしたような目でボスの方を見る。そんな零を見てすずかは慌てた。

「テメヒ…………なめてんじゃねえぞ。そもそも月村の穰さんしかいらないからなお前は見せしめで殺してやるよ

そう言つと野はポケットから零達を誘拐するときに使つたUSBメ

モリ……ガイアメモリを取り出した。

「へえガイアメモリを使うのかい？」

「ほお……お前みたいなガキがガイアメモリの存在を知つているなんてな。じゃあ……これがどういう使い方をするかわかるよな？」

『MAGMA』

ガイアメモリを起動させ、右腕にあるコネクタに挿入し、ボスはマグマの記憶を宿したドーパント……マグマドーパントに変わった。

「ひつ！」

再び自分の前に現れた怪物にすずかは短い悲鳴を上げ、零にしがみついた。しがみつかれた零は唯々じっとマグマドーパントを見つめた。

「ねえ、月村すずか」

「なつ何？」

「もし君が望むならばこのドーパントを僕が斃たおしてあげよう

「えつ？」

「だからそこから助かりたい？」

「助かりたいけど……無理だよ……あんな怪物相手に……」

そうすくが言つと零はくつくつと笑つた。

「零君……？」

「いや、ごめんごめん。あいつが怪物なら僕は……悪魔さ」

「え……？」

「さてと月村すずか。君は決断しないのか？」

「決断……？」

「そうだ。僕は……今まで自分で何かを決めて決断した事が無い。それが僕の……罪の一つ」

「罪……？」

「そして、僕は”あの日”決断を迫られた。そして僕は生まれて初めて決断したんだ」

「零君……」

「さあ、月村すずか君はどういう決断をする?..」

零の眼鏡越しの田はすずかの顔を黙つて射貫いた。

「……………」

「何?」

「助けて!零君!!」

「わかったよ……すーちゃん」

「話は終わつたか?」

「ああ。君を斃す相談がなたお」

「笑わすな!!ガキのお前に何が出来る!!..」

「どうかな?」

「う言うと零はど」から取り出したのかロストドライバーを取りだし、そして首から提げている袋からメモリ……エターナルメモリを取り出した。

『ETERNAL』

「ガイアメモリだと!?何でお前みたいなガキが持っている!?!」

「さあ……何でだろ?」

『ETERNAL』

「変……身」

零はドライバーにエターナルメモリを挿入そのまま右に展開した。

『ETERNAL』

すると零の体は風に包まれてエターナルに姿を変えていった。しかし通常時のエターナルと違い、腕のアンクルは青い炎では無く赤い炎。胸と右腕と左腿もものあるマキシマムスロットは無くロープも無い。そして变身じに赤い炎が上がった。

エターナル・レッドフレア。これがこのエターナルの状態である。

「何だそれは…………？」

「零君…………？」

マグマードーパントとすずかは信じられないような目でエターナルを見る。他の犯人達も同じ気持ちのようだ。

「ん? このエターナル…………まだ完全では無いな」

そんな周りの視線を気にせず、エターナルは自分の体を見た。

「なつ何なんだお前! ?」

「うん? ああ、これはエターナルだよ

「エターナル…………？」

「うん……エターナル、いずれ全てのガイアメモリを支配する存在さ

「いざれ全てのガイアメモリを支配する存在だと……ふざけんじやあねえ！！」

マグマードーパントはエターナルの言葉が気にくわなかつたのか、激昂し火炎弾をエターナルとすずか目掛けて打ち込んだ。

「ちょっとボス！何してんですか！？月村すずかも一緒に殺しちゃ意味ないでしょ！？」

「つるせえ！－あのガキぶつ飛ばす！－」

部下の言葉に耳も貸さずどんどん火炎弾を打ち込んでいった。やがて辺りを煙が覆い、何も見えなくなっていた。

「はあはあ、これでビリ…………」

マグマードーパントは煙が晴れた場所を見て言葉を失つた。何故ならばそこにはすずかの前で片膝をつき、腕をクロスさせたエターナルとその後ろに無傷のすずかがいた。

「バカな…………」

「…………はは、すゞこや。わかるよ、このエターナルは僕が使つていれば、やがて全てのメモリの王者の力を發揮する」

「零君…………」

「大丈夫かいすーちゃん？」

「うつうん」

「それは良かった」

それだけ言つとエターナルは立ち上がり、マグマードーパントに向かつた。

「！」のガキ！

再びマグマードーパントは火炎弾をエターナルに打ち込んだ。

「考えが無いね！！」

エターナルは全て躰し、マグマードーパントに接近した。

「何！？」

「はつ！？」

エターナルは両手に赤い炎を纏わせマグマードーパントにたたき込んだ。

「ぐあ！？」

『ボス！？』

手下どもが揃って声をあげる。

「おつおい…………やばいんじゃねえか？」

「ああ…………まさかあのガキもガイアメモリを持つていてるなんて……」

「こいつや、逃げた方が…………」

「…………残念だが、逃がさんぞ」

『！』

知らない声が聞こえて慌てて後ろを振り向くと、自分達の仲間の一人の肩を掴んでいる白スーツの男、……莊吉がいた。

「てめ……！」

肩を掴まれている男は慌てて拳を莊吉に振りかぶったが、莊吉は難なく躰かわし、腹に右ストレーントをぶち込んだ。

「ぐお…………！」

それだけで男は腹を抱えてしゃがみ込みうめいていた。

「さあ……お前達の罪を数える」

その言葉は犯人達にとつて死刑宣告に聞こえた。

「くそがあ…………」

マグマードーパントはエターナルの猛攻になすすべ無く片膝をついて荒い息を吐いていた。

「さあ、これで終わりだ…………」

『ETERNAL MAXIMUM DRIVE』

エターナルは腰のマキシマムスロットにエターナルメモリを挿入するとエターナルの右足に赤い炎が渦巻き始めた。

「このガキがあ…………」

マグマードーパントは考えもなくそのままエターナルに突っ込んだ。

「バカだね…………」

エターナルもマグマードーパントに向かつて走り出し、そのままジャンプした。そして右足で思いつきり蹴りを打ち込んだ。

「ぐおおおおーー！」

「さあ、お前の罪を数えろ」

マグマードーパントは爆発し、後に残つたのは倒れているボスと呼ばれた主犯格とメモリブレイクされたメモリだけだった。
すずかはエターナルを見て不覚にもこゝつ思つた。

かつこいと

「大丈夫かい？すーちゃん」

エターナルは変身を解除しながらすずかの元に歩いて行つた。

「うん…………大丈夫だよ」

「そう、それは良かつた」

クスリと笑う零の顔を見るとすずかはあと顔が赤くなるのを感じ、
顔を背けた。

「?.?うしたのすーちゃん」

「なつ何でも無いよ」

「それなら良いけど…………」

(どうしたんだろ私……零君顔を見ると顔が赤くなっちゃう)

「そつそれにしてますごかつたね……零君」

「ん？ ああ、別にこんな対した」と無いよ…… 唯の悪魔の力さ」「えっ？」

すずかは零の顔を見ると、わずかに悲しみの色が出ていた。

『零一、忘れるなよ……お前は俺と同じ悪魔だと叫ぶ事を』

(克).....

「……違つよ」

「蜘蛛の子は黒蠍（くろにしこ）」

「トーチサン」

「だつて私を助けてくれたでしょ？だから零君は私の英雄だよ」

にひいりと笑うすずかに零は言葉を失つた。そして、

「」

「どうしたの零君？」

泣いていた。膝をつき唯々泣いていた。

ギューム

すずかは零を抱きしめて頭を撫でた。

「えっと……大丈夫だよ……大丈夫だから……」

泣き続ける零をすくは子供をあやすかのよつになで続けた。そんな一人を莊吉は黙つて見つめていた。

ペギンズナイト（後書き）

いかがでしょうか？感想とか待っています。
こないだWの映画をDVD借りて久しぶりに見ました。リターンズ
見た後ではNEVERの印象が変わりますね

EPISODE 1-1 (前書き)

最近、オリジナル作品書いているんですか、中々文章が思いつかない

森が生い茂る場所。そこの道にバイクと自動車が走っていた。

「ちょっと……ネバール！あんた運転……」

「…………」

車の助手席に座っているアリサは運転している青年……ネバールに声を掛けるが、ネバールは聞こえてないようでそのまま運転していた。

「ちょっとネバール！！もつと運転しつかりやりなさい！」

ネバールの運転は非常に荒く、ネバール本人は何とも無いが、他に乗っている者は必ずと言つていいほど酔う。アリサも例外ではない。

「…………何？」

ようやく聞こえたらしく、ネバールはアリサの方を向いた。

「だーかーらー！運転をしつかり…………きやー！」

いきなり大きく車が揺れアリサは短い悲鳴を上げた。

「ひりー！危ないでしょー！」

「…………問題無い」

「問題大ありよーーーて…………うふ、気持ち悪くなってきた…………」

何でこうなったとアリサはつい数時間前の事を思い出していた。

「ホテル・アグスタの警備?」

「せや」

部隊長室に呼ばれたアリサ達ははやてから新たな仕事の説明を受けていた。

「ホテル・アグスター確かに、富豪とかの避暑地で有名なあそこでしょ?」

「うん。実はなホテル・アグスターで大規模なオークションが行われるんやけど、その中にはロストロギアも含まれているんや」

「ああ……何とか無く読めてきたわよ」

アリサははやてが言つとしていることが何となくわかつてきてジト目ではやてを見る。

「いやあ三人にホテルの警備を頼みたいんや」

頭をかきながらあはははと笑うはやてにアリサはため息をついた。

「はやて…………わかっていると思つけど私達Re-C?DEは存在を隠さないといけない存在なのよ?そんなホテルなんてたくさん人が来るようなところで大それた事出来ないわよ」

Re-C?DEは”エデン”に対抗するためにその存在は秘匿されている。知っているのは管理局のほんの一握りだけだ。

「それはわかつていいんやけど…………実はな、そのロストロゴニアの中にレリックがあると勘違いして”エデン”が来るかも知れないや」

「”エデン”が？」

自分達が相手する組織の名前を聞いて、話を殆ど聞いていなかつヴェントとネバールも話に耳を傾けた。

「けど……レリックは無いんでしょ？だつたら”エデン”が来るとは限らないんじゃ……」

そう言つアリサだがネバールは何か気づいたらしく珍しく口を開いた。

「成る程…………嘘の情報を流したな」

あつと言つアリサとふつと笑うヴェント。そんな二人にはやてはにやりと笑つた。

「せや……数日前からホテル・アグスタにレリックが運ばれると言う偽情報を流したんや」

「成る程ね……現在、”エデン”はあまり動いていない。だからこそ何かアクションが欲しいわね……」

「そこで偽情報で誘き出し、組織の人間を捕まえるという訳か」

二人とも納得したよつに言ひ。

「で…………誰の知恵だ」

くつくつと笑つてゐるはやて顔がヴェントの一言で固まった。

「なつ何言つているんや? ヴュントさん」

「お前が”エーテン”相手に自分で考えてこいつ事が出来るとは思えん。大方誰かの入れ知恵だろ?」

冷や汗をかくはやてにヴュントは追い打ちを掛ける。

「まあ十中八九、零だろ?」

その言葉にはやはぎくつとじていた。

「はやて…………」

アリサがジト目ではやての事を見つめる。

「あつはははは…………はいそつです。零君に相談しました」

最初は笑っていたが三人の視線に耐えられなかつたのかはやはては白状した。

「全くもう…………何で自分の手柄みたいに言つたの?」

「いやあ、零君に自分の考えにしていいつて言われたもんでつい……」

……

頭をかきながらははと笑うはやて。

そんなはやてを見て大きくため息をつくアリサだった。

「しつかし、”エーテン”は来るかしら?」

バイクと車もホテルの地下駐車場に停めた三人。アリサは顔を青くさせながら言った。

「どうだうな、零の情報操作なら奴らも引っかかる可能性は大きいにある」

ヴェントは酒瓶を取りだしながら叫ぶ。

ガシ！

「…………何をする」

酒を飲もうとしたヴェントの手をアリサが掴む。

「あんた…………いくら酒に強いからって飲むのやめなさい」

「断る」

「…………即答ね」

ヴェントの酒好きに呆れるアリサ。

「ああ…………三人ともここにいたのね」

後ろから声を掛けられて後ろを振り向くと金髪の白衣を着た女性……シャマルがいた。

「シャマルさん? 何でここ」「元」

「私も今回警備に参加するのよ」

「…………医務官なのにか?」

シャマルは機動六課の医務官を務めているのだ。

「人手が足りないのよ……それでこの話は置いといて、三人の配置を教えようと思つて」

話を変えるとシャマルは三人の顔を見渡した。

「まず、ヴェントさんとネバールさんはホテル内で警護を、アリサちゃんは外でフォワードと一緒に警護をお願いね」

「ちょっと待つてください」

「何アリサちゃん？」

真っ先に異議を唱えたのはアリサだった。

「オーラクシヨンつてたくさんのお金持ちや上流階級の人気が集まるんですね？」

「ええ……」

「だったら……何でこの二人をホテル内に配置するんですか！？」

アリサの叫びももつともと言える。何せヴェントはヴェントで愛想が悪く、ネバールに至っては人間が持つ常識という物を一欠片も持ち合わせていない。そんな者達を社交辞令がモットーの場所に入れるとなんて言語道断とアリサは思つている。

「まあ……はやてちゃんが決めたから……」

シャマルも困ったよつて言ひ。

「…………とアリサちゃんは言つていたけど……」

「その心配は…………」

「無さそうだね」

ドレスに着替えたのは、フロイト、はやはある方向を見つめていた。そこにはたくさんの人人が集まつてお、その中央には人が二人いた。

言わざともヴェントとネバールである。しかも周りの人は全員女である。

ヴェントは緑色のワイシャツに黒スースに黒ズボン、決め手に黒いサングラスを付けていた。

ネバールは青色のワイシャツにヴェントと同じ黒スースに黒ズボン。長髪を首の後ろで束ねていた。

「しつかし……す”いなあ」

「うん……」

はやてとなのはも感心と言つよつは呆れの方が大きいだらう。

「確かにあんなの私達、見たこと無いからね」

「せやな……零君もこんなに無かつたよね？」

零も中学時代はかなりモテていた。さすがにヴェント達までとはいかないが。

「ああ……それはすずかちゃんが原因かな」

「すずかが?」

「うん…………零君つて実はものすごく人気があるんだよ?」

「そうなの?確かにそこそこ人気だと思つたけどそこまでじやあ……」

「……」

フェイトの言葉になのははああと呟つ。

「そつか……フェイトちゃん知らないんだっけ。実はそれ全部すず
かちゃんの仕業なんだけじね」「すずかの？」

「うん……零君に近づく女子全部すずかちゃんが遠ざけていたから」

零君は全く気づいていなかつたけどと付け加えた。

「そりなんだ……」

「恋いは盲目つていうけどなあ……」

二人はすずかを思い浮かべて苦笑いしていた。

「へくし！」

「どうしたのすーちゃん？」

「風邪かな～？」

「どうだろう？零君みたいに誰かが噂しているのかな」

一人の少女がくしゃみをしていたのは言つまでない。

ホテルの外、そこ警備を任せられたティアナは一人機動六課のメンバーについて考え込んでいた。

隊長陣の高町なのはは時空管理局のエースで、フェイト・T・ハラ
オウンは優秀な執務官で、八神はやはうラフランクの魔導師で四人
の守護騎士を従えている。

自分のパートナーであるスバルは訓練校を主席で卒業し、エリオ

は十歳という幼い年齢ながらも陸戦Bランクで将来有望でキャロは竜を操るレアスキル。

そして極めつけにRe-C?DEと呼ばれるあのメンバーだ。ガイアメモリと呼ばれる道具を使い戦い、アリサとネバールはまだ戦った所を見たことは無いが、ヴェントはリミッター付きとはいえ副隊長のシグナムを斃したのだ。他の一人も同等の力を持っているのだろう。

結局ティアナは自分には何にも取り柄がない凡人と思ってしまう。
(関係無いわ!私は……兄さんの……ランスターの力を証明するだけよ!!)

ホテルの外の一角でアリサはロープを纏いふてくされていた。

「もう……何で私が外の警備なのよ納得いかないわ」

すると、自身の端末が鳴りアリサは取り出した。

「誰だらう?」

通話ボタンを押すと、モニターが開いて連絡相手の顔が映った。

「ヤツホーアーちゃん。元気かい、つてなんだか機嫌悪そうだね……」

零だった。はあとため息をついて若干零を睨んだ。

「あんたの能天氣そうな顔を見ているじますます悪くなつたわ。後
アーチャン言つな」

ええ、と言つ零を無視して話を続けるアリサ。

「所で、”Hデン”は今回来るのかしら？」

「うんどうだらうね。僕も巧妙な情報を流したんだけどね……」

…

「ふん……つて言つた聞いてよ零」

「どうしたのさ？」

「ホテルの警備何で私が外で、あの性格若干破綻している一人が中
なのよ！？」

「それは僕が提案したからや」

「…………はい？」

アリサは一瞬零が何言つているのかわからなかつた。

「だからさ～僕がアーチャン達の配置決めたんだよ」

「…………何ですつて！？」

思わずモニターに叫ぶアリサ。ここに人がいたら確實に変人扱いだ。

「つ……いきなり大きな声出さないでよ」

「いやいや、何であんたが六課での私達の任務を配置を決められ
るのよ！？」

「えつ、実はこないだはーちゃんから連絡が来てさ」

「うんうん」

「アーチャン達の配置どうしたらいいって連絡でさ」

「成る程、あとアーチャン言つな」

「でも、とりあえずなーちゃん達はホテル内で警護だつて言つから

そ、男性陣が少ないから「ヴェント達を入れたんだ」

「…………何ですって？」

「いやあ、ヴェント達のスース姿見た？あれ、僕が手配したんだよね。一人には結構似合うと思ってた」

「ねえ、零……」

「何だいアーチャン？」

「アーチャン言うな……つまりそんな理由で私は外でこんなロープを着て警備をしているわけ？」

「あのーアーチャン？」

「…………だつて」

「くつ？」

「私だってドレス着たかったわよ――――！」

「えつ！？」

「零のバカ―ふざけんなー」

「えつちよ…………あつ何かすーちゃんが呼んでいるみたいだから切るね」

「つて待ちなや…………」

言い終わる前に零はわっさと切ってしまった。
アリサは肩をわなわな震わせて、天を仰いだ。

「零……あんた絶対殴り飛ばす――！」

「うひ……」

「どうしたの零君？」

「まざいな…………何でアーチャンあんなに怒っていたんだろう？」

「はあ……零君は女心をまるで理解していないね」

「えつ？」

「何でも無いよ…………」

ホテル内現在なのは達は一組に分かれて警備を行つてゐる。

「せう言えばヴォントさんはいつRe-C?DE入ったなんですか？」

一組目のなのはがヴォントに質問した。

「ああ……よく覚えていらないな。気づいたらいた、みたいな感じだな」

「そつそつですか……」

ヴェントの答えになのはは少し呆気にとられた。
するとヴェントはワイヤーシャツの中に指を入れたと思つと、中から古
そうなペンダントを取り出した。

「それは……？」

「これか？今は亡き心友の物だ」

「あつ……すみません」

「気にするな……元々これは心友が持つっていた物を無断で持つてい
る物だからな。…………唯、これはある意味では俺がRe-C?D
Eに入る切つ掛けを与えた物でもある」

「そうなんですか？」

「ああ……」

ペンダントを見ながら言つたヴォント。サングラスに隠れている瞳の
奥にはわずかに悲しみがあるようになのはは見えた。

一方同じ頃警備一組目のフロイト、はやて、ネバールは、

』…………『

沈黙している。

(フフフフエイトちゃん。何かしゃべってなあ
(むつ無茶言わないでよはやて)

フェイトとはやはては念話で話ながら、さつきから全くしゃべらない
ネバールの方を向いた。
相変わらず無表情で歩いていた。

正直なところフェイト達はネバールについてよくわかつていない。
他のR e - C? D Eメンバー……アリサは元々幼なじみで長い付き
合いだし、ヴェントはシグナムとの試合以来、シグナムとよく組み
手をしていた。そんな中ネバールは誰とも殆ど話さず、普段どこに
いるかもよくわからない。

そんな中ネバールになついている者が一人だけいた。

はやてのユニゾンデバイスリインフォース・ツヴァイだ。初めて顔
合わせしたときからリインは何故かネバールを気に入つたらしく、
自身の仕事の休憩時はよくネバールの頭に乗つかつている。

リインは人見知りな所があるので初対面の者に懐く事はあまり無い
ので理由を聞いてみると、

『なんだか一緒にいると落ち着くのです』

だそうだ。

ネバール自身もあまりいやがつていないのでそのままなのだが、
(コイケン……………えりちゃんたらこの人と仲良くなれるんや?)

はやは心中、自分のコニゾンテバイスに呟いた。

EPISODE 1-1（後書き）

いかがでしょう？感想とか待っています。次回はいよいよアリサ変身回です

EPISODE 1-2 (前書き)

最近オリジナル小説を書いています。こいつをメインに書いているのでいつ投稿になるかはわかりませんがそちらも投稿したら読んでみてください

「ふむ、どうやらここに元々レリックは無もそつだねカルマ君
「そつのようで」

ホテル・アグスタの中、一人の男が話していた。

一人は初老の男で見ただけでも高そうなスーツを着ているのがわかる。もう一方のカルマと呼ばれた男性は無表情で初老の男性に付き従っていた。

「うーむ……どうやら当たが外れたね」

「やはり、あの情報はダミーだったのでは？」

あの情報とは零が流した”ホテル・アグスタのオークション時にレリックが一緒に出展されるという情報だ。

「やはり、零の仕業かな……」

初老の男性がため息をつきながら言った。

「それで、どうされます？我々は元々レリックがここにあると思って来たのですから、帰りますか？」

カルマがそう提案すると初老の男性は首を振った。

「待ちたまえ、カルマ君。我々とてここに招待された身だぞ？そう簡単に帰るわけにはいかんよ」
「そつでした……申し訳ありません」

そう言つと一人はホテル内を歩き出した。

「……ローバンさん？ ローバンさんじやないですか！」

「おや……久しぶりだね」

ふと初老の男性……ローバンに声が掛けられて、その方向を振り向くとそこには数人の男女がいた。

「いやあ、久しぶりですね」

「はつはつはつ何、仕事が忙しくてね。中々休みが取れないんだよ」「娘さんがいらっしゃるでしょ？ そろそろお任せになられたらいかがですか？」

「何、まだまだ若い者に世代交代は早いよ」

「そうですか……おやそちらの方は？」

男性が苦笑しながら言つとふと、カルマの方を向いた。

「ああ……彼は私の会社の人間でね、今回のオークションに付き合つてもらつたんだよ」

「そうですか……初めてまして」

「初めまして、カルマと申します」

手袋を付けた手でカルマは握手した。

しばらく談笑していると、カルマの端末に連絡が入った。

「失礼」

それだけ言つとカルマは少し離れて、なにやら話していた。やがてローバンの元に戻ると、耳の近くで言つた。

「どうやらガジットローンが出現したらしいです」

「そうか……」

ローバンは男達に断りを入れその場を後にし、カルマと歩きながら他人に言葉が聞こえないように話した。

「ふむ……カルマ君、今回連れてきたメンバーは何人だい?」「二人です」

ふむと言いながら手をあごに当てて口を開じて考え込むローバン。やがて考えが纏まつたらしく、口を開けた。

「よしカルマ君出してもらえるかい?」「…………レリックは無いのですよ?」

さすがにカルマも今回はローバンの指示に少し異議を唱えた。

「なに、別にレリックが無くても構わないさ。彼らもこの警備に参加しているんだろ?」

「はい」

彼らとはRe-C?DEの事だ。既にあるつからRe-C?DEがこの警備に参加する事は知っている。

「そうそう。マグレラ君も行くよつに言つとこてくれ」「幹部の一人を出すのですか?」

「ああ。そろそろ本格的にRe-C?DEを始末しようと思つてね」「…………わかりました。では早速」

「ああ頼む」

カルマがマグレラに連絡を取っている所を見ながらローバンはあることを考えていた。

(零……お前は必ず私が手中に收める。必ずだ)

ホテルの外、アリサは自分に向かってぐるガジェットを見ていた。

「いめんなさい、アリサちゃん。私たちフォワードの方のサポートで精一杯で……」

モニター越しでシャマルが申し訳なさそうに言つた。

「あー気にして下さい。私一人でも大丈夫ですか？」

対してアリサは問題なさそうに手をひらひらさせた。

「やつ……なら良いけど……」

「あ、ガジュットが近づいてきたのでそろそろ通信切ります」

そのままアリサは通信を切つた。

「さてと……あんた達、私の憂さ晴らしに付けて貰つわよ?」

アリサはロープの中からロストドライバーを取りだし、腰に巻いた。そして懐から赤い”H”と書かれたガイアメモリを取り出した。

『HEAT』

ヒートメモリを起動せると、そのままドライバーのスロットに挿入した。するとドライバーを中心に赤い波動が発生した。

「変身！」

『HEAT』

言葉と共にアリサはドライバーを右に展開した。すると、アリサの体は赤い炎に包まれて、やがて炎が消えるとそこには赤いボディに赤い複眼をしたガイアメモリの戦士が立っていた。

「仮面ライダー……ヒート」

ヒートはやつぱり足に炎を纏わせた。

「はっ……」

かけ声と共にヒートはガジェットに向かつて走り出した。そして、一番自分に接近していたガジェットを思いつきり蹴飛ばした。それだけでガジェットは爆発した。

「私さあ……今ものすげく機嫌悪いからね……ほじほじにしてあげるわよ？」

ゆっくりとガジェットの方を向くヒート。その仮面の下でどう猛に笑っていた。

意志も感情も無いのに一瞬ガジェットはおびえたように動きを停止させた。しかしすぐさまヒートめがけて動き出した。

「ふつ……私だつて……ドレス着たかったわよ……！」

かなりビーフショウも無い理由で戦っているヒートだった。

ホテル内ヴェントは零からのメールを見ていた。

「零君なんて……」

「どうやらドーパントが出たようだ。アリサの所に一休向かつたようだ」

なのはに簡潔に答えるヴェント。残りのメールの内容を見て、一瞬眉をひそめた。

「ヴェントさん？」

「高町…………俺とネバールも出る」

「えつ？」

「時間がない」

そつ言つとドーパントはさつわと歩き始めた。

「ちよつ、ヴェントさん！？」

なのはの声を無視し、ヴェントはネバールに電話を掛けた。

「ネバール……零からのメールは見たな？」

「ええ……確認されたドーパントは一体。それも別方向から向かっている」

「さらに一体は幹部クラス…………人気の無いところから来る奴はお前に任せる」

「…………わかりました」

通信を切るとヴェントは駆けだした。

ホテルの近くに現れたガジェットをスバル達フォワード陣は戦っていた。

「スバル、クロスシフトA行くわよー。」

「おう！」

スバルが前線に上がり、ウイングロードを開いた。ティアナはカートリッジを大量にロードし、足下にオレンジ色の魔方陣が展開された。

(証明するんだ……ランスターの弾丸に貫けないものは無いということを！－！)

「クロスファイアショート！」

ティアナの周りに展開された無数の魔力弾がガジェット目掛けて打ち出された。

その殆どはガジェットに当たったが、一発だけ逸れスバルに目掛けていった。

「え……」

唐突な事でスバルは反応出来ず、シールドも展開できなかつた。その場にいた誰もが当たると思ったが、

「ヴェント……ヴェントさん？」

スバルに当たる前にサイクロンに変身したヴェントが魔力弾を防いだのだ。

ヴィータが遅れてやつてきてティアナに向かつて怒鳴りつけた。

「このバカ！！味方撃つてどうする…！」

「あ……あ」

ティアナは呆然としていた。

「あの……ヴィータ副隊長……今は……コンビネーションの内で……」

自分に当たりそうになつたのにスバルは相棒の弁護をする。

「ふざけんなタ！」—今のは直撃コースだよ…！」

そんなスバルもヴィータは怒鳴り散らす。

「……二人とも下がれ」

黙っていたサイクロンが言葉を発した。

「ヴェントさん……」

「味方さえ撃つような奴は戦場にて日障りだ。去れ」

ヴェントの今まで聞いた事がないような冷たい言葉にその場にいた者は言葉を失う。

「さてと……ヴィータよ。わざわざと手付けるぞ」

「おお、」

ホテルの裏側、そこにはスーツを着た男がぼんやりと突っ立っていた。

「はあ……やる気起きねえな。カルマの奴何でこんな所に俺を配置したんだろう？」

男はぶつぶつ言いながら自分と同じ組織の幹部の事を思った。
正直なところ男はカルマの事がよくわからない。常に無表情でとつつきにくいためだ。

「はあ、どうしようかな」

「……見つけた」

「ん？」

後ろを振り向くとそこにはネバールが立っていた。

「あり……どちら様？」

「探しだぞ”エデン”幹部の一人カミヤ・マグレア」

ネバールの言葉を聞き先ほどから浮かべていた氣怠そつた態度は無く、獰猛な笑みを浮かべていた。

「へえ、もしかしてR e · C? D E方?」

カミヤの質問には答えず、ネバールは腰にロストドライバーを装着した。

「黙りかよ。まあ、その腰のロストドライバーが証拠だな」

そう言つとカミヤはガイアドライバーを腰に装着し、自身が愛用するホールドメモリを取り出した。

『SOUND』

ガイアメモリを起動させるとカミヤはドライバーにメモリを挿入した。

すると、辺りに音が奏で始め、やがてカミヤの体はサウンド・バー

パントになった。

「…………」

ネバールは無言のまま水色の”H”と書かれたメモリを取りだし、起動させた。

『ICEAGE』

そのままドライバーのスロットに挿入した。

「変身」

『ICEAGE』

右にドライバーを展開すると、ネバールの体が氷で覆われて、それが砕け散ると中には水色に白いラインが入ったガイアメモリの戦士がいた。

「それがお前の……」

「仮面ライダー……アイス」

仮面ライダーアイスとサウンド。ドーパントの戦いはさすがに降りました。

「何よここつひ……全然相手にならないわね」

ヒートは仮面の下でやれやれとため息をついた。

その後、

「……」

ヒートは何か来るのを感じ、慌ててその場から動いた。すると、その場にエネルギー弾が撃ち込まれた。

「誰……」

よと囁うとしたヒートは敵の姿を見て言葉を失った。

異質

そのドーパントを表すならばそつ表現するのが一番良いだろう。全身ドス黒く所々赤い紋様が入っており、さながら零のエターナルとは正反対の存在。

「あんた……一体……」

「…………R e · C ? D E だな？」

無機質で中性的な声が辺りに響く。しかしヒートはその声を聞いて背筋が冷たくなった。

(何、こいつ……今まで戦つてきた奴とは何がが違う！)

アリサもこれまで様々なドーパントと戦つてきたがそれらのドーパントとも違う。そんな存在だ。

「悪いが……貴様を……処刑させて貰つ」

「あんた…………アサシン処刑人！？」

ヒートに近づいて来たアサシン処刑人は黒い炎を拳に纏わせてヒートに打ち込んだ。

「ぐつー！」

ヒートも腕に炎を纏わせて防御しようとするが、

「はつー！」

「きやあー！」

処刑人アサシンの拳に打ち負かされてヒートは数メートル吹っ飛んだ。

(なつなんて力なの…………)

「終わり…………だ」

処刑人^{アサシン}は黒い炎をヒートに打ち込んだ。

炎はヒートに直撃し、黒い炎の火柱が立つた。

「たわいも……ない」

処刑人^{アサシン}はつまらなそうにその場を後にしようとした。

ヒュン！

「！」

火柱からナイフが飛んできて、処刑人^{アサシン}は慌てて防御した。ナイフは火柱の中に戻つていき、人影がゆらりと火柱の中に浮かび上がってきた。そして人影が思いつきり腕を振ると青い炎の波動が火柱を弾け飛ばせた。そして中から出てきたのは、

「エター……ナル」

ヒートを庇うようにエターナルが炎の中から出現した。

「零…………あんた何でこんな所に」

「何…………アーちゃんの方に来るドーパントが普通そうじや無かつたから来たまでだよ」

「アーちゃん言うな…………まあ助かったわ。けどよくすずかが許可したわね」

その言葉にギクとなつたエターナル。

「あんた……すずか達に内緒で来たわね？」

「しつ……仕方ないじゃ無いか！」

「……おい」

苛立つたように処刑人アサシンが一人に話掛けた。

「やあ、君が処刑人アサシンかい？」

「……お前……達が……言う奴……ではある」

「そうかい……さてと、僕の幼なじみを傷つけた罪は重いよ?..」

エターナルは手に持ったエターナルエッジを処刑人アサシンに向けた。

こうして対局に位置するガイアメモリの戦士の戦いはきつて降ろされた。

EPISODE 1-2 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待っています。

EPISODE 1-3 (前書き)

夏休みも後僅か・・・やだなあ

EPISODE 13

エターナルと処刑人^{アサシン}の間に緊張が走っていた。どちらも相手の実力は知っているので容易には動くことが出来ない。アリサも黙つて二人の行動を見守っていた。

じりじりとゆっくりと横に移動しながらタイミングを計る一人。

『！』

次の瞬間二人は同時に動き出し、拳をお互いの胸に打ち込んだ。

「ぐつ！」

「はあ！」

その衝撃でお互い数メートル吹っ飛んだ。

（なつ、なんてドーパントだ！？いくら完全じゃ無いからって僕のエターナルと同じぐらいの力だと！？）

（ほお……これがエターナルの……力か）

お互い相手の実力に驚愕しつつ次の行動に移った。
エターナルはエターナルエッジを右手に持ち、処刑人^{アサシン}に突っ込んでいった。対する処刑人も黒い剣を取りだし、エターナルを迎え撃つ準備をした。

「はあ！」

「……」

エターナルの剣戟を処刑人は無言で捌いていた。

そのまま何度も斬り合いをしてエターナルエッジと剣が鍔迫り合いになつた。

「中々やるね……！」のエターナルと対等にやり合つなんて……！
「……やはり……お前は……危険だ……！」で……排除……した方
が……よさそうだ……」

「何……」

剣とナイフとでは込められる力が違うせいか、エターナルが徐々に押され始めた。

「ぐ……お」

エターナルは何とか踏ん張りつとするが、ゆっくりと確実に押され始めた。

「零！」

アリサが叫び声を上げる。

「零……？」

処刑人アサシンは零の名前に訝しげに呟えたと同時に、剣がの力が緩んだ。

「！！」

それを見逃すエターナルでは無く、一瞬の隙を逃さず処刑人アサシンの腹に蹴りを打ち込んだ。

「くつ！」

処刑人は腹を抱えつつもエターナルの方を見るが既にエターナルの姿は無かつた。

「どこに……」

辺りを見渡していた処刑人は後ろから殺氣を感じ、後ろを振り返るとエターナルがエターナルエッジを振りかぶるうとしていた。

「ちい！」

処刑人は後方に大きくジャンプし、躱した。

「まだまだ」

「！！」

再び声が後ろから聞こえ、慌てて後ろを振り返ると、エターナルが既に立っていた。

「はあ！」

かけ声と共にエターナルは青い炎を拳に纏わせて処刑人に打ち込んだ。

「ぐあ！」

思わず処刑人は後ろに転がり、何とか止まり片膝をついたがダメージが大きいのか荒い息をしている。

(バカな……どうやって……あの距離……を移動……した)

エターナルの移動の仕方に疑問を持っているとエターナルは新たなメモリを取り出した。

「さて……君をこれ以上好き勝手させる訳にはいかないからこれで終わりにしよう」

新たに取り出した”R”と書かれたメモリを起動させた。

『ROCKET』

エターナルはロケットメモリを腰のマキシマムスロットに挿入し、マキシマムを発動させた。

『ROCKET MAXIMUM DRIVE』

「これで終わりだ……！」

エターナルは両手を大きく広げた。すると、エターナルの頭上に無数のミサイルが出現した。

「なつ……！」

「はあ……！」

エターナルは大きく広げた両手を処刑人に向かって突き出すと、ミサイルは処刑人^{アサシン}に掛け飛んでいった。
処刑人は避けようとするがミサイルの方が早く、処刑人^{アサシン}に掛け打ち込まれた。

ドカーン！！

大きな爆発音と共に、処刑人は大きな爆発に巻き込まれた。
それを見てエターナルは満足そうにロープをはためかせた。
アサシン

卷之二

ふつ……じや無いわよこのバカ！」

アリサが唐突にエターナルの頭を思いつきり叩いた。

一 痛！アーチャーん何するのさ！？

よ！危ないでしょ！後アーチギンソンなニ。

あい！ロケットは曇りに何も無いとJINで使えるって言った筈

三

「あんたね

エターナルの言葉にアリサは大きくため息をついた。

「おはせせせ.....ん?」

エターナルはしばらく笑っていたが、はつと我に返り処刑人がいる
であろう爆煙が漂っている場所を見つめた。

「どうしたの零？」

「つ！アーチャン下がつて！！」

次の瞬間、爆煙の中から処刑人^{アサシン}が現れ、黒い炎を拳に纏わせてエターナルに向かつて来た。

「はあ！」
「くつ！」

エターナルは手のひらで何とか受け止めよつとし、一人の手が触れあつたとき、

「えつ……」
「なつ……」

『大丈夫だよ……僕が守るから』
『ホント……？』
『もちろんだよ約束』
『うん！』

綺麗な花々が咲き誇る野原で無邪気に笑う一人の同じ瞳をした少年と少女。本当に仲良さそうに笑っていた。

「つー？」
「なつー？」

お互い同時に我に返り、急いで距離を置く二人。

(いつ……今のは……)
(何だ……?)

お互い自分の手のひらを見つめて考え込む一人。

「零……？」

そんなエターナルを不思議そうに見るアリサ。

『…………戻ってください』

突如、^{アサシン}処刑人の横にモニターが出現し、モニターには一人の男^{アサシン}カルマが映っていた。

「……何故」

^{アサシン}処刑人が少々不満そうに言つ。

「今日はそもそもRe-C?DEを倒せたら倒すといった任務です。カミヤさんが離脱したのであなたも離脱してください。では」

それだけ言つとカルマはさつさと通信を切つた。

「お前……名は？」

^{アサシン}処刑人はエターナルに対して言つた。

「夢埜……零」

エターナルは^{アサシン}処刑人をまっすぐ見つめて答えた。

「零……か……また……会おう」

それだけ言つと^{アサシン}処刑人は踵を返し、どこかに消え去つた。

エターナルは変身を解き、処刑人^{アサシン}が消え去った方向をじっと見つめていた。

「……この、バカ！！」

アリサが零の頭を思いつきり叩き、思わず零は頭を抱えてうずくまつた。

「あんた何考へているのよ！..」エデン^{アーチャー}相手に名前明かすなんて！..」

アリサが怒鳴るのも無理は無い。零は長年”エデン”に狙われ続けている。そんな組織に本名を明かすなんて自殺行為だ。

「大丈夫だよアーチャー。たぶん彼女はそんな事はしない」「アーチャーちゃん言つな。つて、どういう事？」「何となくだけど……彼女は言わないよ」「ふーん……ん？あんた何で処刑人^{アサシン}が女性だとわかったのよ？」
「えつ？ そういえば、何でだろ」「はあ～？」

首を傾げる零に呆れるアリサ。

「あっ、じゃあ僕そろそろ戻るね」

思い出したかのように顔を上げる零。

「そうね……わざととすずかに怒られときなさい」

「うつ！……勘弁してよアーチャー。あんまりそのこと考えたくないんだから……」

「アーチャーなんだから。自業自得でしょ~。せりかつたら帰った」

少々落ち込みながら零はロストドライバーを再び腰に巻き、ゾーンメモリを起動させた。

『NONE』

そして腰のマキシマムスロットに挿入した。

『NONE MAXIMUM DRIVE』

「じゃあねえ~」

やつと零の体は忽然と姿を消した。

「はあ…………やつと零の説明しようかな…………」

アリサはエターナルと処刑人との戦いで出来た森の木々が軒並み倒されていた場所や、ロケットのマキシマムで出来た大きな穴を見て再び大きなため息をついた。

「ただいま~」

Re-CODE本部に零ののんきそうな声が響き渡る。次の瞬間その声に反応して、すずかが光の速さの如く零の前に現れた。

「お帰り~零君……」

すずかは顔は笑っているのに目が笑っておらず、見る者全てが寒気

を起すよつたな笑みをしている。

「やあ……すーちゃん。ただいま」

だらだらと汗をかきながら挨拶をする零。

「ねえ、零君。私今すつじく怒っているの……」

ゆうつとゆうべつと零に歩み寄るすずか。

「ちよつすーちゃん?」

「何で……？」

「えつ?」

「何で私に何も言わずに外出たの――――――！」

「じめんなさい！」

「全く…………いぐらアリサちゃんがピンチだからって、私やエミリオンちゃんに何も言わずにいくのはやめてね」

「はい、すみません」

ふんふんと怒るすずかに零は正座しながらその説教を聞いていた。エミリオンも苦笑いしながらその光景を見つめている。

ふと零は処刑人アサシンの拳をとらえた方の手をじっと見つめていた。

「大体……つて零君どうしたの?」

説教を続けていたすずかが零の様子が変わったことに気づき、零に問いかけた。

「………… 今日さ、^{アサシン}処刑人とやり合つたんだ」

「うん…… それは知つていいけど…… それがどうしたの？」

「いや…………」

零は頭の中で考え込んでいた。

あの時、^{アサシン}処刑人の手を触れたときに流れた映像。あれは何なのか？あの少年と少女は誰なのか？そればかりが零の頭の中を駆け巡った。

(あれは一体…… 何なんだ……？)

一つの部屋、そこに置かれている簡素なベットの上で風呂に入つて濡れた頭にタオルを乗せ片膝を手で抱いている少女がいた。タオルの下から見えるわずかな金髪は美しく、全体的な体型もすらりとしている。

そんな少女^{アサシン}…… 処刑人^{アサシン}…… ゼロは今日の戦闘でエターナルの手に触れた自分の手を見つめていた。

あれは何だったのか。 わからない何も。

ゼロには記憶が無い。 気がついたら妙な研究所みたいな場所について変な研究者達から殺しの技術を習つた。ゼロはそのことについて何も疑問に持たなかつた。 そしてある日その研究者の上の人間らしき者がゼロの前に現れて、ある一つのガイアメモリをゼロに差し出した。

そしてゼロは言われるがままそのメモリの所有者になつた。以来ゼロはそのメモリを使い、裏切り者や組織にとつて邪魔な存在を消していく。

しかしそれだけ人を殺しても、どれだけ何かを壊しても、心のどこかに空虚感があつた。 それがなんなのかゼロはこれまでずっとわからなかつた。

ところが今日エターナルと戦い、エターナルの手を触れたときに流れれた映像。そして一瞬ほんの少しだけだが、心の空虚感が埋まつた気がした。

「…………あれは何なんだ？…………私の無い記憶なのか？」

ゼロはタオルを取り払い、ベットから降りて壁に掛けられている鏡の方を向いた。

そこには腰まで届くぐらいの金髪に整つた顔。そして零と同じ金と銀のオッドアイ

「夢埜…………零…………」

夢埜という名字は気にならないが零という名前。呟くたびにどこか懐かしいという気持ちがわいてくる。

「お前…………の存在は…………私の…………心を…………埋めるのか…………？」

その呟きは誰にも答えなかつた。

オーフショット会場でローバンとカルマは話し合つていた。

「カルマ君…………あの一人が接触したのは本当かね？」

「はい、まさかこれほど早く接触するとは思いませんでした」

そうかと言い、ローバンは深いため息をついて、じつと目を開じて考え始めた。カルマも黙つてそれを見守つた。

「ふむ……とりあえずは現状維持かな？まだあの子の記憶が戻つた

とは思えんし」

「確かに、先ほど通信したら普段と変わりませんでした」

「それは何よ?……おや、オーフショウが始まるよつだ。そろそろ

「ちりに集中しようつか」

「はい」

EPISODE 1-3 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待っています。零とジロの関係は追々明かされていきます。

EPISODE 1-4 (前書き)

夏休みも後僅か。

更新速度も遅れてくるかも知れません

「それで、あの後どうなったの?」

Re-CODE本部の自分の自室で零はモニターに映っている相手……ヴェントに問いかけた。

「取りあえずは俺の方はヴィータと協力し、ガジェットを破壊した。ネバールの方は幹部の一人と戦つたそうだ」「幹部と?」

「ああ。だが途中で逃げ出したらしい」

「そう……今は何しているの?」

「今は周りの巡回だな。もつともこれ以上敵が来ることは無いと思うがな……」

「…………だからって酒飲むなよ」

モニター越しに酒を飲むヴェントをジト田で見つめる零。

「何……俺が酒に強い事は知っているだろ?」

「そうだけどさ……そう言えば初めて会つたときもヴェントは酒を飲んでいたよね?」

「そうだったか?と言つより良くそんな事覚えているな……」

「僕が記憶力が良いのは知つていてるだろ?」そうだね……もう六年くらい前かな

「そうか……あれからもう六年経つたのか……」

ヴェントの憂い顔を見て、零も黙りこくる。しばらく沈黙が一人の間を漂う。

「ねえ……ヴァント」

「何だ……？」

「後悔している? RE-CUE入ったこと」

「…………何故そう想つ」

「いや、何となく」

その言葉を聞き、ヴァントはまた深いため息をつく。そんなヴァントの反応にむかとなる零。

「何だ! その反応は?」

「お前……別に立場など関係無い」

「えつ?」

「俺は俺の道を行く。それだけだ」

「……そう」

「それに心友のためでもある」

「何だよそれ」

零は苦笑しながらヴァントを見る。ヴァントもふと微笑してくる。

「さてと……実はもう一つ懸念事項がある

「? 何だ?」

ヴァントはティアナ弾丸ミスについて説明した。

「そつ…………あの子が……もしかして……」

「ああ……引きずっているな、あの日の」とを……」

「なーちゃんは何やってるんだか……教え子の心情も察してあげのも教導官としての務めでもあると思うんだけど……なーちゃん、そり辺は肉体言語わからせよつとしているからな」

管理局の魔王としての異名を思い出しながら零はため息をついた。

「もし、」Jの状態が続くなれば六課のフォワードは連携陣が崩れる恐れがある

「そうか……ヴェント」

「何だ？」

「ござつてこいつとおはやつてもこい。けどやり過ぎなこといいね

？」

「心得た」

それだけ言つとヴェントは通信を切つた。

ヴェントの通信を終えた零はふつゝと息をはいて天井を仰いだ。零の心の中にはヴェントが言つた言葉が残つていた。

(心友か……ねえ、克己僕たちはいつから親友になつたんだっけ?)

最初で最高の親友に語りかける零であった。

数日後、ホテル・アグスターでの任務を終えたヴェントは機動六課の敷地内にある森の中の木の一つに酒を飲みながら寄りかかっていた。

その視線の先には汗だくになりながらも射撃訓練を行うティアナがいた。

ここ数日ティアナは通常訓練が終わつた後もずっと自主訓練を行つており、ヴェントはティアナに気づかれないようそこでそれを見ていた。

「あれ、ヴェントの旦那じゃないすつか」

声をした方向にヴォントは顔を向けると、そこには機動六課のヘリの操縦者のヴァイスがいた。

「ヴァイスか
「どうしたんすかこんな所で？」
「少しな……」

それだけ黙つとヴォントは再びティアナの方を向いた。

「ん？……ああティアナすつか
「まあな」
「旦那……あいつに何か言つてやつてくれませんか？」
「…………何？」
「いや、俺が言つても全然駄目だつたし、旦那の黙つ事なら聞いてくれるかと思つて」
「どうだらうな……」
「旦那ここ数日ずっと見てたんでしょ？ティアナが気になるんじや……」
「別に、俺はあいつ自体にはあまり興味が無い」
「へつ？なら何で……」

ヴォントは一口酒を飲むと、ヴァイスの問いに答えた。

「俺があいつを気に掛けているのは心友の遺志だ」
「心友…………？」
「まあな、しかし…………」

ヴォントはそのままティアナの方に近づいていった。

ティアナは肩で大きな息を吐きながらも訓練を続けていた。また誰かを傷つける。兄の無念を晴らす。それだけが今のティアナの心を占めていた。

「…………その辺にしどいたらどうだ？」

いきなり声を掛けられて、びくっとするティアナ。恐る恐る声がした方向を見ると、ヴァントが酒を飲みながら近くに木に寄りかかっていた。

「ヴァントさん…………」

正直なところティアナはあまりヴァントと仲がいいとはいえないと言っても嫌いというわけでも無い。

何故ならばあまりヴァントと話すことがないからだ。

基本Re-CODEメンバーはアリサを除きあまり話そぐとしない。ヴァントはもっぱら酒ばかり飲み、たまにシグナムと組み手をしている。その御陰かシグナムとはものすごく仲がいい。ネバールはいつも人気が無いところでボケーとしたりしている。後はリインと一緒にいることが多い。

「…………何の用ですか？」

「特にというわけでは無いが、あまりやり過ぎると体をこわすぞ?」「ご心配なく。私凡人なんで、これくらいしないと」

とりつく島もないといった感じでティアナの声はどこか冷たい。

「凡人が…………なあ、ランスターよ」

「……何ですか？」

「お前は何のために戦っている?」「

「何のため?……?」

「管理局員のため?執務官になるため?違う……お前は唯兄の無念を晴らすために戦っているんだろう?」「

「……」

今度こそティアナは真っ直ぐヴァントの方を見た。

「何で……あなたが兄さんの事を……」

震えるような声でティアナはヴェントを見る。しかし、ヴェントは唯黙つてティアナを見るだけだった。

「……話は以上だ。忠告はしましたぞ」

それだけ言つとガントはわざと森から去つていった。

ティアナは長い間その場で立ち尽くしていた。

「私は……」

Re-C?DE本部の自分の自室で零は書類作業をしていた。

ピカア……

「ん?」

突然メモリの保管場所から青い光がほんの僅かあふれ、直ぐに消え

た。

零は不審に思い、保管場所のロックを解除し、メモリが保管されているアタッショニクスを開けた。中はRe-C?DEメンバーに与えたメモリ以外ちゃんと保管されていた。

「気のせいかな…………けど今のは……いや大丈夫だろ」

零は再びメモリを元の場所に戻した。

「零君ー」はんできたよ
「わかつた直ぐ行くよ」

内線ですすかに呼ばれた零は直ぐに自室を後にした。

保管場所で拳銃のような形で”T”と書かれたメモリが怪しく光っているとは知らずに……

『TRIGGER』

ミッドチルダ首都グラナガンの高層ビルとビルの間にポツンとある一つの屋台。

大抵の人間なら知らないが、知る者がいればそこは隠れ名店と皆口を揃えて言う。

そんな屋台に一人の男が酒をちびちびと飲んでいた。

「すまない。遅れた」

そこに一人のオレンジ色の髪をした青年が入ってきた。

「遅かったな、どうした？」

「いや、中々妹が寝付かなくてさ。おっさん、ビール一本に適当に何か見繕つて」

オレンジ色の髪の青年が屋台の主に注文すると、男の隣に座った。

「妹か……確かに今年で10歳か良いのか？一人にしどいで。もう夜遅い」

男の言うとおり既に今日は夜遅く、家に一人の少女を残しておくのは少々危険と思われる時間帯だ。

「大丈夫さ。あいつもそんなやわな性格はしていないぞ」

オレンジ色の髪の青年はあつけらんと答えた。

「どうか、なら俺から言つ事は無いな」

それからしばらく一人は酒を飲みながら談笑を続けた。

「しかし、お前ホント外見変わらないよな」

酔っているのか少々顔が赤い青年。

青年が男と出会ったのは、一年ぐらい前の事だ。青年は管理局に勤めていてその任務中に男に出会ったのだ。

その時青年は色々誤解をし、男を犯人と間違え、戦闘を挑んできたことがあった。

しかし、青年は男にボコボコにやられてしまい、誤解が解けると青

年は直ぐに男に謝った。

その時からの縁で青年と男はよく「ひじ」して酒を飲みあう仲や青年が暇なときに模擬戦をやる仲になつていてる。

「まあ、色々とやつてるのでな」

男は酔つている風には見えず、ちびちびと飲んでいた。

「ふーん。まあ良いけど」

青年は特に気にした様子は無く、ビールを飲む。

「つて、それよりもお前の力ってどうなつているんだ?」

「ん?」

「ん?じゃ無いよ。魔力を使わずにあんな事をしているなんてホント何で?」

男は魔力を使わず、と言つより魔力の源であるリンカー「コア」が無いのだ。なので男が使つてている力は魔法による物ではない。

「さあ、何だと思う?」

「んー魔法じゃ無いんだつたら、レアスキル希少能力か?」

「まあ、あながち間違いでは無いがな」

「そうか、で結局何なんだよ?」

「教えん」

「えー俺たち心友ともじや無かつたの一?」

微妙に傷ついた顔で言つ青年に男はふつと笑つた。

「まあ、時期が来たら話しても構わん」

「時期ねえ。それつていつ?」

「お前が俺に勝つまで」

「いやいや、それ無理だろ? 拳でバリアジャケットを越してダメージ通すなんて奴倒すなんて無理だから」

くつくつと笑う男に青年が手首を左右に振る。

それからしばらく飲んでいた一人だが、青年がふと腕時計を見るとおもむろに立ち上がった。

「さて、明日も早いからそろそろ帰るよ」

「さうか。一日酔いにならないと良いがな」

「まあな」

勘定を済ませ、屋台から抜ける一人。しばし一緒に歩き、やがて分かれ道についた。

「じゃあ、またな……ヴォント
「ああ、またな飲もうティーダ」

そう言つとティーダ・ランスターはくるりと後ろを向くと手をひらひらさせながらそのまま帰路に着いた。少しの間それを見ているとやがて、ヴォントもズボンのポケットに手を入れると帰路に着いた。

「ん……」

ヴォントは機動六課で当たられた血室のベッドで目を覚ました。

「…………」

ヴェントは無言で起きると、近くに置いてあった水が入ったペットボトルを取り、キャップを開け中身を口に含んだ。

「……何故今頃あの夢を見るのだらうな」

ヴェントは窓から見える月を見ながら呟いた。
数ある心友との思い出。その中の一つでしかないのに。

「ディーダ……お前がこの世から亡くなつて六年……お前の遺志を最後まで尊重しようつ

ヴェントは常に肌身離せず持つて居るペンダントを見て語つた。

「しかし、あまりにも見ていられなかつたら俺も行動する気だ」

ヴェントの鋭い眼光が薄暗い部屋を刺した。

「このとおりヴェントはその言葉が現実になるとは思わなかつた。

EPISODE 1-4 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待っています。

「報告があります。

実は親の仕事の都合により、パソコンがあまり使えない状況になりました。

なので、しばらく更新が遅れる可能性があります。
どうか」「承ください。

ヴェントとティアナの会話から数日後、ヴェント達は六課のフォワード陣等と一緒に六課の訓練場でなのは対スバル・ティアナペアの模擬戦を見ていた。

しかし徐々に雲行きが怪しくなってきた。

「ねえ、ヴェント……」

アリサが隣にいるヴェントに話掛けてきた。しかし、ヴェントは何も答えず唯黙つて戦闘の行く末を見つめていた。

ティアナとスバルの戦闘は危なつかしいを越え、既に危険と言えるレベルだ。

そしてスバルが正面から、ティアナが上空からクロスマリージュをダガーモードに切り替え、なのはに斬り掛かった。対するなのはは

「レイジングハート……モードリリース」

呟いた。

「二人ともどうしちゃったのかな…………模擬戦は喧嘩じゃ無いんだよ……練習中は言つ事聞いていて

も、本番で勝手に動くんじゃ練習の意味、無いじゃない

なのははバリアジャケットこそ展開しているが素手でスバルの拳を防ぎ、上空から斬り掛かってきたティアナの刃も素手で止めた。御陰で手から血が滲み出たが、なのはは気にした様子もなく淡々と無表情で言った。

「あ…………あ…………あ」

スバルは何も言えず、必死に言葉を探していた。

「…………っ……」

ティアナは素早くなのは達よりも上に存在するウイングロードに飛び移り素早くクロスマリージュを構えた。

「私はもうー誰も傷つけたくないからーー！」

泣きながら自分の心情を吐露するティアナ。

「ティア…………」

そんな相棒にスバルは何も言えない。

「少し…………頭冷やそうか」

ティアナの慟哭になのはは気にしていない様子で指先をティアナに向ける。

「うわああああーー！ファントム…………
「シユート」

ティアナが魔力弾を放つより先になのはがティアナに大量の魔力弾を放つた。それら全てがティアナに直撃した。

「ティア…………っバインド！？」

「じつとして。よく見てなれ。」

スバルが慌ててティアナの方に向かおうとするがなのはにバインドを掛けられていて動けなかつた。

そんな中なのははさらなる追撃を打ち込もうとしていた。魔力弾が撃ち込まれたところからティアナが両手をだらんとして状態で現れ、なのはの方を見ていた。

「ああああああああああああああ

絶叫した。唯々絶叫した。

「シユート」

再びなのはがティアナに対して魔力弾を放つた。

しかし、

「なつー?」

同時刻 Re - C? DE本部の自分の自室で零は驚いていた。自室で自分が保管していたメモリの一個が光り輝いていた。

「まさか……」

その現象に覚えがある零は焦つた。

過去の記憶ではこの後、共通してメモリ達は同じ行動を取ろうとしたのだ。

「やばい……！」

そうなる前になんとしてもメモリを押さえつけなくてはいけない。

しかし、メモリは空中に浮かび始めた。

「くそー！」

いつになく焦つた零は急いでメモリを掴もうとしたが、

それよりも先にメモリはより輝き始めた。

キイイイン！

「うう……！」

思わず目を閉じた零。次に目を開けたとき既にメモリは無かつた。

キイイイン！

「えつ……！」

「なつーー？」

機動六課訓練場スペースでなのはの放った魔力弾が突如ティアナの前に現れた謎の光が全て弾いてしまった。

その光はやがて徐々に収まつてきてその中心にあつたのが、

「ガイアメモリ！？」

”エデン”が使つてゐるメモリでは無く零達が使つてゐるメモリに酷似したメモリ。

同じ頃見学していたアリサ達は驚いていた。

「うそ……何で」

「アリサ……？」

アリサの果然とした声にフェイトは怪訝そうな顔をする。

「おい！何であんな所にガイアメモリがあんだよ！－」

ヴィータがヴェントに詰め寄るがヴェントは答えず、じつとティアナの方を見つめていた。

このときティアナは正常な状態ではなかつた。なのはに大量の魔力弾を撃ち込まれて、傷こそ負わなかつたが頭は既に正常な思考はしていなかつた。

そんな時再びなのはの魔力弾を撃ち込まれそうになつたとき何かがティアナを魔力弾から庇つた。

それはガイアメモリだつた。ヴェント達が使うメモリと同じ形をしたタイプだつた。

ティアナはそのガイアメモリを見たとき、体に何かが走るような感じがした。

「ティア……？」

自分を呼ぶ相棒の声がしたがティアナは気にならなかつた。唯このメモリが欲しい。それだけが今ティアナの体を動かしていた。

「まさか……ティアナ！ やめなさい！」

自分を呼ぶのはの声がしたがティアナはそれすらも気にならなかつた。

やがてそのメモリの側まで来て、迷うことなくそのメモリを握つた。すると、メモリから光が消えた。ティアナは手のひらにあるそのメモリを凝視した。

そのメモリは青く、ディスプレイには“T”と銃みたいな形で書かれていた。

「…………」

そしてティアナは、

『TRIGGER』

迷うこと無くそのメモリを起動させた。

「あああああ！…」

ティアナの再びの絶叫と共にトリガーメモリは独りでにティアナの体内に入つていつた。

するとティアナの体は右手が銃火器そのもので青い体をした異形の怪物……銃撃手の記憶の力を持つたトリガー・ドーサントになつた。

「ティア…………？」

信じられない物見たかのよう！スバルはよろよろとトリガー・ドーパントに近づいた。

「…………」

トリガー・ドーパントは無言でライフルを構えると迷うことなくスバルに対しエネルギー弾を撃ち込んだ。

「……」

避けようとするとスバルは先程なのはにバインドをかけられたままで満足に身動きが取れない。
避けられないと思い、思わず目をつぶるスバル。

しかし、

ガキイン！

「なのはさん！？」

「…………」

エネルギー弾とスバルの間になのはが割り込みシールドで防いだのだ。

「ティアナ！何しているの！ガイアメモリがどれだけ危険かわかつてないでしょ！」

「…………」

なのはの叫びにティアナは無言で再び右腕のライフルからエネルギー一弾を数発撃ちました。

「くつー」

なのはは再びシールドで防いだが徐々にしかし確実にシールドに轟が入り始めた。

「！？」

なのははこれに驚いた。いくらリミッターを掛けているとはいえ、なのはのシールドを破る攻撃はそうは無い。

そしてついにシールドが破れ、エネルギー弾の一発がなのはに襲いかかってきた。

しかし、突如として現れた風がなのはの前に防護壁となつてエネルギー弾を別の所に方向を変換した。

「ヴェントさん…………」

その風を起こした本人は険しい顔でトリガー・ドーパントを睨みつけながら先の零の会話を思い出した。

ティアナがトリガー・ドーパントになった直後、Re-C?DEメンバーの端末が一斉に鳴り出した。

三人は急いで端末を取りだし、通話ボタンを押した。

「みんな！」

モニターに映っていたのは零だった。その表情はいつになく険しい。その後ろには同じくまじめな表情をしているすずかとエミコオンの姿があった。

「まあいい事になった。T2の一箇が誰かと引き合つたみたいでミッドのどこかに飛んで行つた。急いで回収してほしー」

「あー零知つているわ」

「えつ？」

「本人が私達の田の前にいるからよ」

「なつ……」

零は驚いた顔をした。後ろの一人も同様の顔をしていた。

「おこーお前らだけで話を進めてんじゃねえー私たちにもわかるようになしろー！」

ヴィーターが声を荒げながら言つた。よく見ると他の者達も同じようつに聞きたがつていた。

「…………すまないけどメモリの回収を頼めるかい？」

零は静かに三人に言つた。

「何言つてんの？私達を誰だと思つていいの？」

「問題あつません……直ぐに回収します

「…………」

アリサとネバールは直ぐに行こうとするがそれをヴォントが手で制

した。

「ヴェント?」

「…………」

アリサは疑問の声を挙げ、ネバールは無言でヴェントを見た。

「…………俺が行く」

ヴェントが一步前に進み、ロストドライバーを腰に巻いた。

「なつ！？相手が通常のドーパントじゃないのよー？」「はさすがあなたも…………」

言いかけた言葉をアリサは止めた。

ヴェントが笑つてゐるからだ。

クッククツクツと滅多にこんな風に笑わないヴェントなのでアリサは驚きを隠せなかつた。

「（）の俺が……負けるとでも？」

「いや、そういう訳では」

「…………ヴェントやるなひやつわひとやつた方が良い。なーちゃん大変そうだから」

零の指さす方向を見るとなのはのシールドが破壊されそうになつてゐる。

「なのはー！」

フェイトが声を挙げる。ヴェントはそれを一警すると自分の周りに風を纏わせやがて全身を包み込んだ。

風がやんだ後ヴェントの姿はそこに無かつた。

「ちょっとー零ー良いのー?」

「良いも悪いもないさ。ヴェントがやりたいならやらせればいいさ。それにアーチャンも知っているだろ?ヴェントがどういう人間なんか

「アーチャン言うな……わかっているわよそんぐらー」「どつどついつ事?」

フェイトがおずおずとアリサに訪ねた。

「……Re-C?DEメンバーは私や零、そしてすずか以外の人間はこの世界に来てから知り合った者達なんだけど、ヴェントはこの世界で一番最初にRe-C?DEに入ったのよ」

フェイトはちらりとフェイトを見て、再びなのはの方を向いた。そこにはヴェントの風がなのは達を守っていた。

「Re-C?DEに入る前は知らないけど、あいつRe-C?DE入つてから一度も戦いで負けたこと無いのよ

「えつ?」

「それで零はあるときひつひつしたのよ”勝ちしか知らない男”それがヴェントだつて

アリサの言葉にネバール以外は驚愕した。

何せ負けたことが無いなどフェイト達も無いからだ。

「さてと、所でメモリは何?」

「トリガーメモリだよ」

「他は惹かれていない?」

「大丈夫さ。その辺は」

フェイト達はしばらくポカンとしていたがキャロははつと我に返り、ためらいがちにアリサに尋ねた。

「あの……アリサさん」

「ん? 何キャロちゃん」

「さつきヴェントさんメモリを使わずに風を起しにしていましたよね?」

あつと他のメンバーも思つ。確かにヴェントはガイアメモリを使わずに風を起こしていた。

それに気がついたのかアリサと零はやばつと言つた顔をしている。

「ヴェントさん……」

なのはは自分を守ってくれた人の後ろ姿を見て咳く。

「……高町、ナカジマを連れてさっさとここから離れろ」

「…なつ何言つているんですか! ? ティアナを助けないと…」

そなのはが言つとヴェントは後ろを振り向いた。

その顔を見てなのはは凍り付いた。

ヴェントの表情は眼光が鋭く見る者が畏縮するような顔だ。

「お前がランスターを助けるだと? 笑わすな。お前なんぞにランスターは任せられん」

「なつー? ティアナは私の生徒ですよー? 私は……」

なのはは言葉を最後まで続けられなかつた。ヴェントが風を切つて拳をなのはの顔面すれすれで止めた。

「そこまでにしておけ。どのみちお前に出来る」とは無い。わざと戻れ

「…………はい」

ヴェントの言い分が通つたのかなのははスバルのバインドを解いて下がつていつた。

それを見送るとヴェントは改めてトリガー・ドーパントの方を見た。トリガー・ドーパントはヴェント達が話している間何も行動せず、唯それを観察していた。

「さて、ランスターよ。お前の目を覚まさせよう」

『CYCLOZONE』

ヴェントはサイクロンメモリを起動させるとロストドライバーのスロットに挿入した。

「変身」

『CYCLOZONE』

ヴェントの体を風が包み込み、風がやむとそこにはサイクロンがい

た。

「 わお、始めるやつ」

EPISODE 1-5（後書き）

いかがでしょうか？感想待っています。
フォーゼ見ました。

学園ものは初めてなので新鮮です。アストロスイッチが四十種類あるのが驚きます。

EPISODE 1-6 (前書き)

今回は間に合いました。

前回の話でまさかの展開と思つた方。 さらなるまさかだと思います。

機動六課訓練スペース。そこにはサイクロンに変身したヴェントと、トリガー・ドーパントに変身したティアナが睨み合っていた。

トリガー・ドーパントがサイクロンを見下ろすような状態だが、お互い一步も動かさない。

そんな両者を見学スペースで見ている者達は固唾をのんで見守っている。

「！」

先に動いたのはトリガー・ドーパントだった。
素早く右手のライフルを構えると、サイクロンにエネルギー弾を撃ち込んだ。

「ふつ！」

サイクロンは右手をエネルギー弾に向けると、手のひらに小さな竜巻を作った。

そして、エネルギー弾を竜巻の力でそのまま別方向に吹き飛ばした。

「ゴォン！」

大きな音と共に、トリガー・ドーパントが撃つた弾はビルに直撃しかなりのビルの壁を抉り取つた。

「……なかなかの威力だな。まさか”過剰適合者”か？」

ガイアメモリとそれを使用する者にも相性という物がある。過剰適

合者とはある特定のガイアメモリと極端に適合率が高い人間の事を指す。そして、ガイアメモリの力を最大限に引き出すことが出来る。しかし反面、過剰適合者はその適合率のあまりの高さから、使い過ぎると死に至る場合もある。

「過剰適合者」ならさつさと片を付けないといけないが……

そこで一端口を開じるとサイクロンはトリガー・ドーパントの方を見た。

「なあ……ランスターよ。お前が望んだ力はそんな物か？……お前の望みは何だ？……兄の無念を晴らし、執務官になるのでは無かつたのか？」

「…………」

トリガー・ドーパントは答えず、再びライフルをサイクロンに構えた。

「やうか、ならば……」

サイクロンは両手の拳に風を纏わせるとトリガー・ドーパントの方を向いた。

「俺が本当の強さというものを見せてやるわ」

そよ……

トリガー・ドーパントの近くに風が吹き、訝しがり次の一瞬間、サイクロンはトリガー・ドーパントの目の前まで近づいており、トリガー・ドーパントは反射的に右手のライフルを胸の前まで持つてきただ。

サイクロン！

サイクロンの拳がトリガー・ドーパントの「ライフル」に打ち込まれトリガー・ドーパントは思いつきり後ろに吹き飛んだ。

何とか体勢を立て直そうとするが、それよりも先にサイクロンがトリガー・ドーパントの真上まで来て、トリガー・ドーパントに怒濤の拳のラッシュを打ち込んだ。

トリガー・ドーパントは何とかそれを躱すのに精一杯で何とか隙を突いて、何とか一つのビルに飛び移る。

トリガー・ドーパントは自分のいた場所を見ると、スバルの作り出したウイングロードはサイクロンの拳に耐えられなかつたのか、粉々になつて消えていった。

トリガー・ドーパントは姿が見えなくなつたサイクロンを探し左右を見るがどこにもいなくて、ぱっと上を向くと、サイクロンが拳を振りかぶるつとしていた。

「おひあ……」

怒声と一緒にサイクロンは拳に風を乗せて、トリガー・ドーパントに突き出した。

風がトリガー・ドーパント田掛けで打ち込まれてきたがトリガー・ドーパントはすんでの所で躱し、上空に逃げよつとするが。

ヒュル

がくんとトリガー・ドーパントは突然動きを止めた。否、止めざるを得なかつた。

サイクロンの風がトリガー・ドーパントを逃がすまじとトリガー・ドーパントの足に絡まつたからだ。

慌てて、トリガー・ドーパントはライフルをサイクロンに向けるが、

「…………」

トリガー・ドーパントは本能で恐怖した。

何故なら見たからだ。サイクロンの後ろに鬼を……破壊神を。

「破壊れな」

サイクロンはトリガー・ドーパントの皿の前まで近づき、思いつき
り拳をぶち込んだ。

ドガアアアアン！！

トリガー・ドーパントはビルに直撃し、そのまま下まで床を破壊し
ながら地面まで行った。

トリガー・ドーパントは瓦礫の中で、何とか立とうとするがダメー
ジが大きいようで、動けないでいる。

「耐えたか。そうでは無くては簡単には破壊れるなよ？」

サイクロンがトリガー・ドーパントの近くに降り立ち、瓦礫に右足
を乗せながら言った。

「強さは果てしなく上がある。しかし、今のお前はそれがわからん
ようだな」

一步サイクロンがトリガー・ドーパントに近づくとサイクロンの横
にモニターが開いた。

『アーリー、ヴァントあなた何してんのよー?』

アリサだった。

「全く…やつ過ぎよ…さつわソマキシシマムで倒しなさい…」

怒鳴つてこるアリサを尻目に機動六課メンバーはサイクロン達が戦つている場所を呆然と見た。

シグナムの時とは違う圧倒的な強さ。おそらく破壊神。

『わかつていい。やるやく終わりにする』

サイクロンは鬱陶しそうにモニターを閉じた。

「あつ……ああもうー、ヴァントの奴!」

『おつ落ち着いてアーリー』

「アーリー言つたなー零も何とか言いなやつー、ヴァント止められるのはあんたぐらこなのよー!」

その言葉に零は苦笑顔から、一転して真剣な顔になった。

『アーリー。これは彼がしたいことなんだよ』

「アーリー言つたな。どういう事?」

『単純になーちゃんがしなかった事をヴァントがティアナ・ランスターにしているって事』

自分の事を出され、びくつとなるのは。

「じつじつこいつ事零君……？」

なのはが恐る恐る聞いてきた。

『それは自分で考へることだよ。なーちゃん』

零はいつも飄々とした感じは無く、どこか冷たさを持つていた。

「わい……アリサからも急かされているし、これで終わらじよ！」

サイクロンはサイクロンメモリを抜き、右腰のマキシマムスロットに挿入。

『CYCLONE MAXIMUM DRIVE』

普段の右手では無く、右足に風が集まりつつあった。

トリガー・ドーパントはふらふらな状態だが、それでも何とか立ちサイクロンにライフルを向ける。

「……今は、休め」

言ひやいなやサイクロンは、素早くトロガー・ドーパントに近づき、頭に思いつきり回し蹴りを打ち込んだ。

トリガー・ドーパントは爆発し、爆発が収まるときからティアナが現れ、前に倒れ込んできた。そしてメモリブレイクされていないトリガーメモリも一緒に地面に落ちてきた。

サイクロンは素早くティアナを抱え、肩に背負つた。そしてトリガーメモリも一緒に拾つた。

『ヴォントさん！直ぐにティアナを医務室へ！』

サイクロンの直ぐ側にモニターが開き、必死そうな顔でサイクロンに言つた。しかし、

『その必要は無いよ』

『零君ー!?』

直ぐ側に零が映つたモニターが出現し、そう言つた。

「やうだな、ランスターは我らが預かる！」

『ヴォントさん！？何言つて』

ヴォントは変身を解きながら言つた。

『何言つているのさ、なーちゃん。ガイアメモリに関しては僕たちが上だよ？当たり前じゃないか』

その言葉になのはは何も言えなくなる。

『じゃあ、ヴォント指定したポイントに来て、本部までの道を開けるから』

『心得た』

それだけ言つと、ヴォントは風を起こし、自分とティアナの体を包み込んだ。

風がやむとそこにはヴォントもティアナもいなかつた。

Re・C? DE本部のある一室。そこには無数の機械があり、部屋には人が入れる大きさのポッドが三つほど並んでいた。

その中にティアナは一糸纏わぬ姿で液で満たされたポッドの中に入つており、口には呼吸器が付いていた。その前のパソコンを零はいじくっていた。

「…………どうだ?」

ヴェントが酒を飲みながら零に聞いてきた。

「まあ、大丈夫だね。幸い直ぐにメモリを体に排出させた御陰で体に殆ど害が無い……ていうかまた酒飲んでいるの?」

零はあきれ顔でヴェントに言った。

「構わんだろう?別に」

「いやまあ良いけど…………」

何か言おうにも、ヴェントに酒に関して何言つても無駄な気がするので零はため息をついた。

「…………ん」

ティアナは柔らかい感触に包まれながら目をゆっくりと開けた。

「あつ起きた？」

声がした方向を向くと紫色の髪をしたなのはと同じぐらいの歳の女
がこちらを覗いていた。

「…………」

ティアナはきょろきょろ辺りを見渡すと白い無機質な壁が回りを囲
つており、壁には時計が掛けられている。そして自分はふかふかの
ベッドで寝ていた。

「大丈夫?どこまで覚えている?」

そういわれてティアナは自分の記憶を掘り返した。

「……………！」

ティアナは自分がなのはに大量の魔力弾を撃ち込まれて、そして自
らガイアメモリに手を出したことを思い出した。

「私…………私…………」

「大丈夫。取りあえず落ち着いて」

女がティアナの頭をゆっくりと撫で、ティアナは徐々に落ち着いて
きた。

「大丈夫?」
「はい……」
「じゃあ、これ着て」
「えつ?」

女から手渡されたのは下着と自分と同じ髪の色のドレスだった。ふと体がすーすーするのを感じ、ベットの中を覗くと一瞬でティアナの顔は赤くなつた。

「あーごめんなさいね。色々検査とかしないといけなかつたから」「検査……？」
「それも含めて後で説明するわ」

そう言われてティアナは下着とドレスを着た。

「あの……」
「何？」

ティアナは女にためらいがちに聞いた。

「こんな服、着て良いんですか？」

ティアナが着たドレスは見るからに高級そうで、とてもじゃないがティアナが払える額では無いと思つ。

「ああ、大丈夫よ……つてまだ自己紹介していなかつたわね」

そう言つと女はティアナを真つ直ぐ見た。

「初めてまして Re - C? DE 01月村すずかです」
「えつ Re - C? DE! ? ジャ あここは……」
「Re - C? DE 本部よ。じゃ あ付いてきて」

そう言つとすずかは扉を開けて外に出た。ティアナも慌ててそれに

続いた。

しばらく歩くとあるドアの前に立つた。そしてすかさぬドアをノックした。

『どうぞ』

声がしてドアを開けると一人は部屋に入った。

「やあ、こうして面と面で向かい合つて話すのは初めてかなティアナ・ランスター？」

ティアナが声をした方向を見ると上座の方に銀髪の金と銀のオッドアイの少年が座っていた。

「ようこそRe-C?DE本部ボルバルドへ」

EPISODE 1-6 (後書き)

いかがでしょうか?
感想とか待っています。
テイルズオブエクシリア買いました。おもしろい

ピギンズナイト2（前書き）

頑張りました。いよいよ口曜から文化祭。自分の所は劇やるんですが、まずいですね。自分照明やるんですが、役者が台詞覚えていません。
ぶっちゃけやばい（^_^）

ついに二万PV突破です。これから一萬PV行くたびにこういつ特別編を掲載します。

今回は零とゴホントの出会いです。

文章の都合上戦闘シーンはありません。ご了承ください。

「ディーダと分かれたヴェントは夜のリッシュ・ナルダの町をゆくつと歩いていた。

「はあ…………」

ヴェントはため息をついて再び酒を飲んだ。

「…………つまらんな」

ヴェントは自他共に認める戦いに生きる者だ。故に常に強者との戦いを望む。

なので、ヴェントは戦つて戦つて、戦い続けた。しかし、気がついた時にはもう、ヴェントと戦える者はいなくなっていた。

一時は管理局に勤めて、その最前線で戦おうと思つたが、自分には魔力が無いし、管理局のくだらない正義には全く興味無かつたため直ぐにその案を却下した。

最近は、ディーダと専ら模擬戦をしているが、それでも心の底から戦いを楽しめていない。

(あーつまりん。どこかに俺の心躍らせる戦いは無いだろうか)

「…………あるよ。君の心躍らせる戦いが」

「…………誰だ」

酒を飲むのをやめ、声がした方を見ると、そこには灰色のロングコートを着て、フードですっぽりと顔を隠している少年らしき人がいた。

「ん、僕？ そうだねえ、名前明かすこと出来ないから…… Hターナルって今は名乗つておこつかな？」

「Hターナル…… 永遠か…… ふざけた名だな」

本来なら興味が無いと一蹴し、さっさと立ち去るHエントだが、不思議とHターナルの話を聞いてみたくなってきた。

「それで？ 何故俺が戦いを望むと思つた？」

「んー、とHターナルはヴェントの方に近づきながら言つた。

「田さ」

「田？」

「そつ、君の田は強者との戦いを望んでいる。それも常にずっと。そうだろ？」

まだ十二、四歳ぐらいいの少年に自分の心を見透かされてヴェントは警戒心を上げた。

「……貴様何者だ？」

「ふふ、内緒さ」

どこか人を食つたような笑みを浮かべて、この少年にヴェントはこれ以上付き合いきれないと判断したのか、立ち去りうとする。

「あつ待つてよ。まだ話は終わつていないよ
「知るか付き合」

ヴェントは風を右手に纏わせると、

「切れるか

迷わずエターナルの方に放つた。しかし、

「うわ、危ないなあ」

「……」

ヴェントは頭がした方向を見るど、セレナがいつかと圓じよつに笑みを浮かべているエターナルがいた。

「お前どいつもこり……」

「君と同じ、あれさ」

「同じ……お前、おれか魔王の……」

ドカアーンー！

突如大きな爆発がし、ぱっとどちらの方を向くと異形の怪物が現れた。

「何だあこつは…………」

今まで色んな魔法生物と戦つてきたヴェントだが、あんなものは見たことが無い。

「あれはドーパント」

「ドーパント？」

「せつ、あれが君に心躍る戦いをプレゼントする存在ぞ」

そう言つとエターナルはぽんと手を呂き、ヴェントの包に向いた。

「折角だから僕とあのドーパントの戦い見ていいきなよ」

「何?」

エターナルは「E」の中から赤いＬ字型のバッклを取り出ると、腰に巻き付けた。そして、”E”と書かれたUSBメモリらしき物を取りだし、スイッチを押した。

『ETERNAL』

そうメモリは響き、そしてエターナルはそのメモリをドライバーのスロットルに挿入した。

「変身」

『ETERNAL』

ドライバーを右側に展開すると、風が吹き白い欠片がエターナルの姿を覆っていく。

全身白い姿に、Eを横に倒したような触覚、無限のマークを模した目。

さらに胸、右腕、左腿に合計二十五個のマキシマムスロット。
両腕には青い炎が描かれている。そして黒いロープを身に纏つてい
る。

そして最後に青い波動を放つた。

「貴様は……」

「仮面ライダー エターナル」

翌日バイクを走らせながらヴェントは昨日の事を思い出していた。その後エターナルは自分が見ている中でドーパントよ呼んでいた怪物を倒した。その時いつ言つたのだ。

『また、会に来るよじやあ』

やつとエターナルは忽然と消えたのだ。

「…………」

正直な所ヴェントは迷っていた。
何故ならばあの時の戦いを見たとき自分の心は震えた。
自分も戦いたい。ドーパントと、そして勝ちたい。そんな言葉がさ
つきからヴェントの頭の中に渦巻いていた。

「おいー・ヴェントー・」

「ん?」

突如上空から自分の心友の声ともが聞こえ、バイクを止めると上空から
バリアジャケットを開いたディーダが降りてきた。

「どうしたディーダ。何かあつたのか?」
「何かあつたつて……お前見てないのか!?」
「?」

本当に知らないヴェントを見てディーダは頭をクシャクシャをかき、
映像をヴェントに見せた。
ヴェントはそれを見ると、どうやらこの辺りに正体不明の怪物が出

現し、近隣住民の避難を勧告している映像だった。バイクを運転していたヴェントはそれに気づかず、走らせていたのだ。

「成る程な……」

「たく……俺が見つけたからいいものを……取りあえず、さっさと避難しろよ」

「お前…………俺の実力知つているだろ?」

「そうだけど……ヴェント昨日の事件知つていてるか?」

「…………ああ」

実は当事者とは言えず、そのままヴェントは聞いていた。

「実は今出ている怪物もあれと同じといふ情報があるんだ」

「……何?」

鋭い視線をティーダに送るヴェント。ティーダも真剣な表情でヴェントを見ていた。

「とにかく、早く避難しろよヴェント」

そいつ言つとティーダは再び空を飛んで行つた。

ヴェントはバイクでそのまま去ろうとしたが、どうしてもバイクをこの場所から動かすことが出来なかつた。

何か嫌な予感がする。そんな感情がヴェントの心を占めていた。

そんなヴェントの予感は最悪な方向で当たつた。

「ティーダ…………」

いつの間にか降ってきた雨に打たれながらヴォントは血だらけになつて倒れているティーダに言葉を無くした。

その後ヴォントはティーダを探し回り、大きな爆発音がして、そちらの方に行くとティーダを発見したのだ。

「なんだあ？ お前その男の仲間かあ？」

愉快そうにケタケタ笑っているドーパントが田の前にいるがヴォントはそんな事に気にしなかつた。唯、

「お前が…………」

「あん？」

「お前がやつたのか？」

心友ともを殺つたかどうか聞きたかった。

「ああー…そつそー…俺の邪魔をしたからやつただけさー！」

心の底から愉快そうに笑うドーパントを尻目にヴォントはティーダの前で膝まついた。

「ティーダ…………何か言い残す事はあるか？」

もう助からない心友ともに対してもヴォントは最後の問いかけをする。

「つああ…………」

「ディーダはぼそぼそと聞きづらこ言葉で言つたがヴェントの耳には確かに聞こえ、ヴェントは頷いた。

「やつか……必ず伝えよつ

そう、ヴェントが言つてディーダは一瞬笑い、そして息を引き取つた。それを確認するとヴェントは立ち上がり顔を天に向かへ仰いだ。

「何だあテメーは？まあいいこれ見られたからには死んで貰うぜ！」

ヴェントはゆっくりとドーパントの方を向く。するとドーパントは恐怖した。

「ひつ！」

鋭い眼光、隠しきれぬ殺氣。それらがドーパントの重圧となつて襲いかかってきた。

「なつ何なんだお前！？」

「俺か？……お前を斬りつけ押しつぶす最強の疾風だ！！」

キイイイン！

突如、ヴェントの後方に緑色の光が溢れ、ヴェントとドーパントが後ろを振り向くと、昨日と同じように灰色のロングコートにフードを被り、そして隙間から緑色の光が溢れているアタッシュケースを持っているエターナルがいた。

「ヴェント！」

「一。」

エターナルはヴェント田掛けてアタッショケースを投げつけ、ヴェントはそれをキャッチした。そして素早くそのアタッショケースを開くと中には昨日エターナルが使用した赤いドライバーと緑色の”C”と書かれたメモリが入っていた。

『CYCLOZONE』

「疾風……サイクロン」

ヴェントはドライバーを取りだし腰に巻くヒーパントの方を向いた。

『CYCLOZONE』

「変身……」

そのままサイクロンメモリを取り出し腰に挿入右側に展開した。

『CYCLOZONE』

するとビヴェントの体は風に纏われ、ドーパントは思わず腕で顔を覆つた。

風がやむとそこには緑色の体をした赤い複眼をした戦士が立つていた。

「お前は……」

サイクロンはその問いには答えず、手のひらをドーパントに突き出

すとぐつと握りしめた。そして一瞬、

「破壊れな」

言った。

「いいの？」

「…………何がだ」

「殺さなくて」

あの後、ヴェントはエターナルの指示に従いながらドーザントを圧倒。最後はマキシマムで倒した。

そしてヴェントはドーザントだった男を殺さずにいた。

「…………弱き者を殺す価値無し」

「…………そう」

エターナルはこれ以上追求せず、しばし一人の間に沈黙が漂った。

「ねえ……」

「…………何だ？」

しばらくするとエターナルはヴェントに問いかけた。

「昨日の話をえた？」

「ああ」

「じゃあ答えを聞い」

エターナルがそう言つとヴェントは目を閉じ、しばし考え込むよう
に沈黙を守つてゐると、やがて目を開けた。

「お前について行く……」

ヴェントは静かにはつきつと告げた。

「わづかい……じゃあ」

そう言つとエターナルはフードを取つた。
その中身は中性的な顔をした少年で銀髪の髪に眼鏡が良く似合つて
いる。

「血口紹介しようか。僕は零」

「零……」

「そして……」

零は眼鏡を外し、外した目をヴェントに見せると、ヴェントは驚いた表情になつた。

「その三……やはり魔王の……」

呆然としたヴェントの咳きに零はクスリと笑つた。

その笑みがヴェントの記憶の奥底にある何かが呼び起された。

『また、悲劇は繰り返されるのかな』

』

『どうでしょうかな。これから時代によんでしょ？』

古風な城のテラスで一人の男が語り合っていた。

一人は腰まで伸びている金髪を首の後ろで括り、もう一人の男は黒髪に左の顔に瘢痕が付いていた。

『なあ　　よ私は今まで民の為、國のためこの力を費やしてきた。霸王も聖王もそれに賛同した。しかし、この世界は何とも不条理だ。現に聖王はゆりかごに乗り、霸王は泣いている。こんな事があつていいのだろうか？』

『王よ……』

『ねえ　　？僕はどうかで間違えちゃったかな？』

昔の口調で、黒髪の男の方に向いてきた金髪の男は笑っているのに泣いているような顔だった。

「ヴェント？」

「う……」

零に呼ばれてはつと我に返るヴェント。

（今のはまさか……）

自分が垣間見た記憶にヴェントは心当たりがあつた。

（ならば俺が取るべき道は）

そう思つとヴェントは片膝を付いた。

「えつちょゴントー! ?」

「我が王よ…… ジの力を全てあなたに捧げましょーう」

ガルフ。 ジの新たな心友ともを

ペギンズナイト2（後書き）

いかがでしょうか？感想とか待っています。
文化祭故感想の返信が遅れると思います。
ご了承ください。

EPISODE 1-7 (前書き)

いよいよあの人があなたが変身します！

多分予測出来ている人もいると思いますが、どうぞ…。

ある部屋の一室、一人の少女が着替えていた。

少女はオレンジ色の髪をしており、今は黒の長ズボンを履き、そして黒をベースにオレンジ色のラインが入ったジヤケット着た。そしてその部屋の備え付けの鏡の前に立ち、髪を少々解いた。

先ほどまで前髪のせいで見えなかつた顔が現れ、少女の顔が映つた。少女の表情は無表情そのもので、どこか冷たさまで感じる。少女はそんな自分の顔を見て小さくため息をつき、部屋の外に出た。

「……中々似合つてゐるじゃ無いか」

「……

出た瞬間いきなり声を掛けられて少女は少々不機嫌になりながらも、声がした方を向いた。

そこには自分をここに連れてきた青年が相変わらず酒を飲んでいた。

「……何か用ですか?」

少女は不機嫌さを隠さず、青年に問うた。青年は普段見せない苦笑顔で言った。

「別に、まだこの地理が慣れていないだらうとこうじて、俺が迎えにきたんだ」

少女は何かを言いかけたがやめた。どのみちそれは正解なので、少女は何も言えない。

なので、少女は前を歩く青年におとなしくついて行った。しばらく歩いていると青年が少女に声を掛けた。

「……後悔していないか？」

「何です急に？」

少女は訝しげに青年に問い合わせ返した。この青年がこんな言葉を掛けるなんて初めてなので少々驚いた。

「いや、何も言わずここに留まっていることだ」

「…………どうでしょうね」

少女も正直な所その気持ちに関してまだ良くわかつていがない。そう簡単に決められることではないからだ。

「そりゃ……」

青年はそれ以上何も問い合わせず、一人は黙々と目的地まで歩いて行つた。

やがて目的の部屋の前にたどり着き、青年が扉を開けようとしたが少女がそれを制し、自分で扉を開けた。

部屋の中には一人の銀髪の少年……零と一人の少女……すずかとエミリオンがいた。

そして銀髪の少年がクスリと笑いながら少女に言った。

「やあ、僕たちの新たなる同胞………… Re - C? DE 07 ティアナ・ランスター」

少女……ティアナは真っ直ぐ銀髪の少年を見た。その瞳には迷いがなかった。

トリガー・ドーパントとサイクロンの戦いから数日、機動六課全体の空気はあまり良く無かつた。

あの日からティアナは未だ Re - C? DE から戻っていない。何度も零に連絡を入れてもまだ検査中で会わせることは出来ないと一点張りだ

管理局に、ガイアメモリに関するデータは殆ど無い。その為唯一ガイアメモリに対抗出来るRe - C? DEに言わると何も出来ないのだ。

そんな中、機動六課面々は生活していた。お互いわだかまりを残してたま。

「あつスバル……」

「つ……」

なのはとフロイトが廊下を歩いているとスバルが反対方向から歩いてきた。

「あの……」

「すみません、仕事終わっていいので」

なのはが声を掛けようとするがスバルは避けるよつて、わざと行つてしまつた。

「スバル……」

「なのは……大丈夫?」

「うん……」

そう言つがなのはの表情は暗いままだ。

あの日からなのはとスバルは碌に会話をしていない。精々、事務的な会話ぐらいだ。

なのははなのはであれ以来ティアナやスバルとも会話できず心苦しくて、スバルもスバルで親友を撃墜されてなのはとしゃべりたくないといった感じで双方しゃべれない状態である。

「けど、こくら向でも遅すぎだよ。検査といつてももう向日も終っているんだし」

「確かに……もしかして、零君わざと遅らせているんじや……」

そんな会話を続けている時、突如アラームが響き渡った。

「…なのまつ」

「うん…」

二人は急いで走り出そうとするが、

「えつ……」

「はやて……？」

突如部隊長であるはやてから聞いた念話に心惹かれたのはとフュイト。その内容とは、

「待機命令つて……」

今回は出撃せず、モニタールームでの待機を言い渡されたのだ。

「でも、相手がドーパントだし……」

はやてが言つには今回ドーパントのみでRe-CODE任せせる

という話だ。

釈然としないまま一人はモニタールームに向かつた。

二人がモニタールームに到着すると前線メンバーと、

「アリサちゃん？」

「ネバールさんも……」

現在機動六課に残つてゐる二人がいた。

「どうして……」

「今日は私達が近いから私達が出ようと思つたんだけど、零から待つたがかかるつて今日は私達見学」

手をひらひらさせながら、アリサが言つた。

「どうしてまた……」

「何でも、零達が新しい人材を確保して今回はその初のお披露目だつて」

アリサがそう言つとモニターが付き、そこには殻の記憶を宿したシエル・ドーパントが映つていた。

そこに、ヴェントともう一人黒にオレンジ色のラインが入つたコートに帽子を目深く被つた少女が現れた。

「あれが、新人さん……？」

「みたい……ね」

アリサが何か訝然としない感じで言った。

「どうしたのアリサちゃん?」「

「いや……あれ多分ヴェントがいるのはお皿付役だと想つたけど、普通それはすぐかがする筈なんだけど…………」

そう言いながらアリサはモニターの方を見る。つられてなのは達もモニターを見る。

そこに映っている少女が取り出した銃を見て、一同凍り付いた。

「あれって…………」

「そんな…………」

「まさか…………」

一同は震えそよな声で口々に叫んだ。

「クロスミラージュ…………？」

スバルが自身の相棒の愛機の名前を言った。

「じゃあ…………あれこれいこるのは…………」

シェル・ドーパントが放ったエネルギー弾を躊躇した際帽子が取れ、少女の素顔が露わになつた。

そんな少女の名前をスバルは震える声で言った。

「ティアナ…………！」

「やつぱり魔法は効かないか……」

そう愚痴りながらティアナはクロス//ラージュで魔力弾を撃ち続け
ていた。

「だから言つただろうに……」

後ろでヴァントがやや呆れながら酒を飲んでいた。

「うむわ」です。本当かどうか試してみたんですよ」

ヒシリル・ドーパントの攻撃を避けながらティアナは言つた。

「まあ、今回ドーパント戦初だが、さつさと終わらせん
「はいはい」

そう言いながらティアナはクロスミラージュを待機状態に戻し、ロ
ストドライバーと”T”と書かれたメモリ……トリガーメモリを取り出しました。

そして、そのまま腰にロストドライバーを装着し、トリガーメモリ
を起動させた。

『TRIGGER』

「変…身……」

ティアナはトリガーメモリをスロットに挿入。そのまま右に展開。
するとティアナの体はエターナルのとは違う濃い青い波動に包まれ、
次の瞬間青い波動が弾け飛ぶと、そこには濃い青色のボディ、赤い
複眼に左胸に銃を装着したガイアメモリの戦士が立っていた。

「仮面ライダー……トリガー」

今ここに青き銃撃手が誕生した。

「どういう事アリサちゃん！？ティアナがRe-C?DEしかも、仮面ライダーなんて！」

なのはが声を荒げてアリサに詰め寄つた。見ると、他のメンバーもなのはと同じ気持ちのようだ。

「私だつて知らないわよ！Re-C?DEに新しいメンバーが入つたとしか連絡は受けていないし、顔合わせすらしていないのよ！？」

アリサのやけくそ氣味の叫びになのはは、ついたじろいだ。

「うひごめん……」

「いいわよ別に…………後でちゃんと零を問い合わせないと」

そんな一人を気にすることなくスバルは親友の心配をしていた。

「ティア……」

「はっ！」

かけ声と共にトリガーハンドルを握ったエネルギー銃……トリガーマグ

ナムをシェル・ドーパントに向けて放つた。

「ふん！」

しかし、シェル・ドーパントの堅い殻に阻まれ、ダメージは殆ど通りなかつた。

「ぐつ」

思わず舌打ちをしそうになるのを堪え、トリガーはシェル・ドーパントに攻撃し続けた。

「くはっはっはっはっ！無駄無駄！私の殻の前ではそんな攻撃は無力！」

シェル・ドーパントは笑いながら殻の一部をトリガー目掛けて打ち出した。

「……」

トリガーはいち早く察し、トリガーマグナムを打ち落とした。
お互に決め手が無いまま一人は硬直していた。

（どうする……このままでは埒が明かない。ヴェントさんの手を借りるのは……）

そこまで考えた時点でティアナは思考を中止した。ヴェントの性格から一対一でさつと倒せと言つのが関の山だらうし、何より、ヴェントの力を借りたく無いのがティアナの考え方である。

(「ナビ、ホントどうしたら……うん? 待てよ確かヴェントさんあのメモリを……」)

そこまで考えた瞬間トリガーは叫んでいた。

「ヴェントさん! ”W” の……ウェザーのメモリ貸してください」

トリガーの言葉に、ヴェントは一瞬眉をピクリと動かしたが何も言わず、懐からメモリを取りだし、トリガーに投げた。

トリガーは素早くそれをキャッチするとメモリを起動させた。

『WEATHER』

銀色の”W”と書かれた上位メモリをトリガーは起動させた。

「はあ!? 零の奴ウェザーのメモリまで使わせたの…?」

アリサは本当に驚いているらしく大声で言った。その声の大きさに普段回りをあまり気にしないネバールも顔を顰めたほどだ。

「あつアリサちゃん。声大きい」

「あつ……」、「じめん」

「それでアリサ、どうこう事?」

フェイトは何故あれほどアリサが取り乱していたのか聞いた。しかし、その問いに答えたのは意外にもネバールだった。

「……零の所持するガイアメモリには能力的に上下関係がある。ウ

エザーはその中でもかなり強力なメモリ……だからこそ新人にそんなメモリを使わせるなんてあり得ない

「いくらヴェントが付いているからって新人ウェザーライドを使わせるなんて零の奴何考へているのよ」

アリサはいらいらしながら言った。

そもそも今回のティアナのRe-C?DE参入は変なのだ。そもそもRe-C?DE参入には全員が最初の内に顔合わせ、そして誰かが新人について行き、戦闘するというのが基本だ。しかし今回は最初の段階をすっ飛ばしている。自分はまだしもネバールにさえ聞かされていないのはおかしい。

(零……何考へているの?)

『WEATHER MAXIMUM DRIVE』

トリガーマグナムのマキシマムスロットにウェザーメモリを挿入しマキシマムモードにしたトリガー。すると、トリガーマグナムの銃口に雷や雪や炎や水など様々なエネルギーが集まり始めた。

「ぐ……」

あまりの力にトリガーは思わずめまいを覚えたが堪えて銃口をシリ・ドーパントに向けた。

「喰らいな……さい!」

トリガーがマグナムの引き金を引くと多種多様のエネルギーがショ

ル・ドーパントを襲つた。

「なつ！？」

直ぐにこの攻撃が驚異を感じたシェル・ドーパントは自身の最大の力で殻を出現させ、自身を覆つた。

「ぐ、おおおおおー！」

ビキィー！ビキィー！

しかし、上位メモリのウザーには勝てず自身を覆つていた殻は全て破壊された。

それでも殻だけ破壊されただけなのは驚きだが

「はあはあ……」

トリガーは息を荒げながらもウザーメモリをマグナムのマキシマムスロットから取りだし、ロストドライバーからトリガーメモリを取りだし、マグナムのマキシマムスロットに挿入した。

『TRIGGER MAXIMUM DRIVE』

そして、そのまま再びマキシマムモードにて、銃口をシェル・ドーパントに向けた。

「今度こそこれで終わりよー！」

そう言つとトリガーは引き金を引き、青い弾丸を三発続けて放つた。

「ぐあああああー！」

弾丸が命中したシェル・ドーパントは爆発を起こし、爆煙が消えると男とメモリブレイクされたメモリが落ちていた。

「つあ……」

トリガーは変身が解除され、ティアナはふらふらと数歩歩き、そのまま倒れそうになつた。

しかし地面に付きそうになつたときヴェントが抱きかかえた。

「やれやれ……」

ヴェントがため息をつくとティアナはすうすうと寝息を立てながら眠っていた。おそらくは疲労で眠つてしまつたのだろう

「まあ、素人にしてはすうまいか……」

そう呟くとヴェントはティアナを肩に背負いつゝ管理局が来る前にさつさと退散した。

EPISODE 1-7（後書き）

いかがでしょうか？感想とか待っています。

実はこれからティアナの立ち位置どうしようか迷っています。意見とかあつたらください

これを投稿している頃は文化際の打ち上げがあるので感想の返信が遅れると思います。ご了承ください。

EPISODE 1-8 (前書き)

いやあフォーゾの新ライダー中々すごいですね。オーブの方にも新ライダー出ますし

今回は戦闘無く、後半はあの人登場です。正直な所どこで登場させるかすごく困っていました

「どうこう事やー。」

機動六課部隊長室でやはては大きな声を挙げ、モニターに映つている人を怒鳴りつけた。

対して怒鳴られた方は顔を少し顰めながら、ちゃんと聞いていた。

「いやいや……何をそんなに怒鳴つているのさ……はーちゃん」

モニターに映つている人……零は飄々としながら言った。

「とほけるなやー！ティアナの件や！Re-CODEに入るなんて…

…」

あの後ティアナに会いに行こうとしたのはだが既にティアナとヴァントは現場にはおりず、結局しょんぼりしながら帰つてきたのだった。

「いやあ……中々良い人材だね。トリガーもうまく扱つていぬし、スカウトして良かつたよ」

「……引き抜きつちゅうことやか？出来ると思つておるの？」

「出来るさ、それだけの口ネを僕たちは持つている」

零の目を見つめはやては思わず身震いした。零は実質地上のトップのレジアスと個人的な知り合いだ。

レジアスにとって機動六課は田の上のたんごぶだ。弱みには簡単につけ込むだらう。

「私たちの部隊を潰すつもつが……！」

「そんなつもりは無い。六課は僕たちひとつでも中々良い場所だからね。そう簡単に失いたくないよ」

「『二口』と笑う零を見てはやはやは零がどじまで本気なのか真意を測れなかつた。

「…………まあ、これで行動を起しがなかつたらそれまでだナゾね」

「えつ？」

「ううん。何でも無いよ」

そこまで話した瞬間、

「零君……！」

なのはが部隊長室に文字通り飛び込んできた。

「ちゅ、なのはちゃん！？」

「零君お願い！ティアナに会わせて！」

はやこの事など耳に入つていないとこつた感じなのはは零に詰め寄る。

「…………駄田だよ」

しかし、零から帰ってきたのは冷たい言葉だ。

「零君……？」

「取りあえず、今のは一ちゃんには絶対ティアナを会わすわけにはいかない」

「どう、どうして…？」

「その理由は自分が良く知っていると思つよ。」

「……うー。」

零はそれ以上話す事は無いと思つたのかはやてに向かつて笑いかけた。

「じゃあ、はーちゃん。明日改めてそちらに向かうよ。ティアナの荷物取りに行かないと」

「なつー?」

「あつそうそひ……なーちゃん。一晩だけ考える時間あげる。考えて見るといい。君の罪を」

「私の……罪……?」

「じゃあそれじゃ

「ちょい待ち……」

はやての制止を聞かず零はモニターを切つた。

「はあ……」

零は自室は椅子にもたれながらため息をついた。

「大丈夫零君?」

先ほどの会話を聞いていたすずかが紅茶を差し出した。

「ああ……ありがとうすーちゃん」

零は椅子にちやんと座り直しすずかから紅茶を貰い、口に付けた。

「ふう」

紅茶の温かさが体に染み、零の心は安らいできた。

「大丈夫かなのはちやん」

「さあね、自分の罪に気づけないようならそれまでって事だよ」

零の素つ気なさに思わずすずかは苦笑する。

零のこの素つ気なさは零の一面性みたいなものだとすずかは考えている。初めてそれを見たとき思わずすずかは泣いてしまったものだ。零が相手に素つ気ない態度を取るのは相手に対して、何か嫌なものを感じ取つたときだ。それがどんなものなのかは零本人しか知らない。もつともそんな態度は殆どの人間に取つた事は無いのだが。

「失礼します」

ノックと一緒に入ってきたのはティアナだった。今はコートを脱いでおりラフな格好をしている。

「やあ、ティアナ。体の調子はどうだい？」

先ほどとは打つて変わつていつも通りの一団一団顔で思わずすずかはため息をついた。

そんなすずかを見てティアナは首を傾げながら、報告した。

「はい、大丈夫です。先ほど簡易検査でも問題無かつたです」

「それは良かった」

「『二二二』顔の零だがティアナは相変わらず無表情だった。

「しかし、驚いたな……いくら僕から貸したとはいえ、あそこまでウェザーを使いこなせるなんて驚きだよ」

ウェザーは上位メモリ故力が強いがその反面、反動が強すぎてRe・C?DE内でもあれほどの力を持つメモリを扱えるのは零とビーンとヒネバールの三人だけだった。

「いえ、使えたものあれで倒れるんじゃ意味ありません」

あの時ティアナが倒れたのはトリガーへの初変身からの疲労では無く、ウェザーを使った為の反動であった。

「まあ、それでもウェザーを使ったのは事実なんだから誇つて良いよ」

「そうだよ。私なんてマキシマムを発動しただけで、駄目だったんだから」

「はい……」

二人は口々にそう言つたがティアナは納得していなかつた。

「まあ、これから鍛えていけばいいよ」

「はい」

ティアナは部屋を出て行こうとし、ティアナがドアノブに手を掛けた瞬間零が声を掛けた。

「あ、そうそう。明日ティアナの荷物を機動六課に取りに行くから準備だけしておいて」

ピクリと一瞬体を揺らしたが、「わかりました」と言い、ティアナは部屋を出て行つた。

「ティアナちゃん……大丈夫かな」

「大丈夫さ……彼女はね」

「ふむ……やはり興味深いね」

薄暗い中、モニター や機械類が大量にある部屋の中で一人の紫色の髪の白衣を着た男が呟いた。

男の目線の先には、エターナル やサイクロン、ヒートが戦闘してい る映像が流れていった。

「ガイアメモリか……是非とも研究してみたいねえ」

男が狂気に満ちた笑みでそう言つと、突如男の横にモニターが開いた。

「ドクター！緊急事態です！」

モニターには男と同じく紫色の髪をした女性、ウーノが切羽詰まつた表情をしていた。

「どうしたんだいウーノ？」

「…………侵入者です！」

「へんー。」

悪態付きながらゾロゾロ、トーレは侵入者の相対している。トーレと侵入者の周りには無数のガジェットドローンの残骸が散らばっていた。

「まつまつまつ、中々やりますね……」

侵入者はドーパントだった。しかも腰にはドライバーを巻いており、その「ことからこのドーパントが幹部だとわかる。

「ライトインパルス！」

トーレは自身の特殊能力で高速移動でドーパントの後ろに行き、そこからのすごい速度で出される拳を繰り出そうとするが、

「ふん……

「なつー？」

しかし、トーレの拳がドーパントに当たる直前、見えない何かでトーレの体は止まってしまった。

「はつー。」

「ぐわー。」

動けないトーレにドーパントは回し蹴りを喰らわせた。その威力のあまりトーレは壁へと吹き飛んだ。トーレの体は壁に激突し、壁は歪な形に凹んだ。

「く……セ」

「はつはつはつはつ」

口から血が垂れているトーレにやつくりと笑いながら歩み寄るドーパント。

「…………トーレ離れる！」

「つー」

「おや……」

突然の第三者の声にトーレはライトインパルスでその場を離れ、ドーパントは声がした方向を向いた。

向いた瞬間、ドーパントの目の前には数本のナイフが飛び込んでおり、そして一気に爆発した。

ドカアアアン！

大きな爆発音と共にドーパントは爆発に巻き込まれた。

「大丈夫かトーレ！？」

「ああ……助かつたチンク」

第三者は小柄で銀髪に眼帯をした少女……Ｚ０５チンクだった。

「しかし何故この場所が……」

この場所は、隠蔽がかなり高くそう簡単に見つかる筈がないのだ。しかし、このドーパントは迷う」と無くこちらに来たのだ。

「……いやはや、油断なりませんね」

『！』

二人が振り向くと爆煙の中からドーザントがゆっくりと現れた。しかも無傷で。

「バカな……私のランブルデトネイターが効いていないのか？」

チングのエラランブルデトネイターは金属を爆発物に変化させるもので、普段は自身の固有武装の投げナイフのステインガーを使用しており、その爆発はかなりのものである。

「さてと……」

ドーザントはゆっくりと手を一人に向けて擎ってきた。すると、

「ぐ、あ」

「なつ何だ？」

一人は急に頭痛がしてきて、まるで見えない何かに締め付けられるような感触だった。

ドーザントは無言でさりに力を強めてきた。

「うつああー」

「く……そ！」

一人は頭を抱え込みその場につづくまってしまった。

一歩ドーパントが一人に歩み寄った時、

「やあ、少し待つてくれないかね？」

突然ドーパントの横にモニターが開き、紫色の髪の男が映っていた。

「ビックドクター！？」

トーレが苦しみながら言つた。

「ほお、あなたが……」

「君は一体何の目的でここに侵入したのかな？」

男は氣楽にドーパントに話しかけてきた。しかし、男とドーパントの間には見えない戦いが一瞬のうちに展開されていた。

「ふむ……簡単に言えば、取引……商談ですよ」

「ほお、商談とは？」

「今、あなたがほしがっている物の情報を差し出しましょ！」

「まさか……」

「ええ、ガイアメモリです」

ドーパントがそう言つと、男は途端にハイテンションになつた。

「おお！探し求めていた物がこんなに簡単にこいつらに来るのは…是非商談を聞かせて欲しい！！」

「わかりました……」

ドーパントは手を降ろすと、二人の頭痛が治まつた。一人は荒い息をしたまま、ドーパントを睨みつけていた。

「さて、今から案内人をそちらに寄越すよええと……」

「カルマと申します」

ドーパントは変身を解きながら言つた。

「おお、カルマ君か！」

「あなたの『高名はかねがね聞いていますよ……Dr・ジエイル・スカリエッティ』

男……スカリエッティはにんまりと笑つていた。

「いやあ、まさか生のガイアメモリの戦闘を見られるなんて今日はついているよ」

「それは何よりです」

先ほどの緊迫した雰囲気から一変一人はのんびりと紅茶を飲んでいた。

スカリエッティの背後にはウーノがいるが殆ど空気になりかけていた。

「さて、まずは謝罪を。あなた方の基地にアポの無く侵入、ガジェットドローンをいくつも大破に加え、あなたの部下を負傷させてしまった」

「いや構わないよ。ガジェットはまた作れば良いし、幸い一人とも怪我は対したこと無い」

「そうですか」

「ああ……それよりも早速だが商談といこうじゃないか」

「そうですね……わかりました。ではまず、我々が欲しいのはレリックです」

「ほお、レリックを」

「ええ、実は我々はある計画の為、膨大なエネルギーを必要としています。その為にレリックが必要なのですが、管理局、それにあなた方、極めつけに R e · C ? D E ときた。これでは満足にレリックを回収出来ない」

「ふむ」

「そこで我々のリーダーは戦力の統一を考えました」

「ほお、戦力の統一」

「ええ、管理局と R e · C ? D E は論外、となると残りは……」

「私達か……」

「はい。あなた方と組むことで、混戦状態にならないで済みますからね」

「成る程……それで商談というのは?」

「まず、レリックを少々分けて欲しいのです」

「ふむ……それで我々の利益は?」

「ガイアメモリの数個分のデータを差し上げます」

「おお!なんとすばらしい!あのガイアメモリを調べれるなんて!」

「では……」

「ああ!構わんよ!我々は特定のレリックさえもらえばそれで構わん!」

「感謝します。それでは今回の同盟の締結の印としてこれを差し上げましょ!」

そつぬづとカルマは自分の椅子の近くに置いてあつたアタッシュケースを持ち上げ、蓋を開け、その中身をスカリエットに見せた。

「これは……！」

中身はガイアメモリだった。それも二十本近くある。

「なんと！これほどのガイアメモリを！いいのかね？」

「構いません。既にこのメモリ達は量産に成功したものなので」

カルマの言葉をスカリエッティはもう聞いていなかった。いくつかのガイアメモリを手に取り、新しい玩具を見つけた子供のようにずっと笑い続けていた。

EPISODE 1-8 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待っています。

そろそろティアナ編も終盤です。ティアナはこのまま零についていくのか果たして

EPISODE 1-9 (前書き)

実は「J報告が、

これから中間試験が始まりますので親からJ禁止令が出ると想つ
のでしばらく更
新出来ないと想います。

なるべく早く更新いたしますのでお待ちください

零との会話から翌日、自分の「スクでなのはは零に言われた」とを悶々と考えていた。

(私の罪って一体何なの零君……?)

正直などいひなのはは零があそこまで言ひ、『罪』といつのがわからぬ。

確かにティアナを撃墜したのはやり過ぎかもしれないかもと思つたが、それでもそれは自分の思いをフォワードのメンバー達にわかつて欲しくてやつた事だ。なのに何故、

(どうしてなの? ティアナ……)

何故わかつてくれないのか? 自分の思いをどうして理解してくれないのか? 何故? 何故?

その事ばかり考えていてなのはは昨日一睡も出来なかつた。気がついたら朝になつており、大して眠くも無く本日の仕事をぼおつしながらやつていた。

(なつなのは…)

(ふえ! フ… フロイトちゃん?)

突然のフロイトからの念話に驚くなのは。

(どうだったの大丈夫? ……じゃなくて…)

“どうやらフロイトもよほど焦つてこゐるようだ。

(おっ落ち着いてフェイトちゃん。何があつたの?)

なのはに言われて深呼吸をするフェイト。やがて落ち着いたのか、さつきよりも落ち着いて念話をし始めた。

(「じめんなのは」)

(「うん。それでどうしたの?」)

(「そいつが……」)

(?)

フェイトの歯切れの悪さに首を傾げるなのは。

(……ティアナが来たの)

次の瞬間なのは弾丸のように弾け飛び、走つていった。

「へえ、ここが機動六課か~」

「何ですか、その田舎から都會に来たお上りさんみたいな言い方」

「あはははは……」

機動六課の入り口に三人の男女がいた。一人は灰色のロングコートを着て、フードをすっぽりと被つている零。

もう一人は零と同じくコートを着ているティアナ。

そして、ゆつたりとしたワンピースを着ているすずか。

三人は機動六課の前で先ほど連絡をして迎えを寄せたはやての言葉で六課の前で待つていた。

「いやあ、そう言えばここのアーチャーさんとネバールとかいるんだっけ？」

「零君……自分で六課に送ったんだから覚えておこうよ。ついでに零君覚えてるよね？」

零ののんきな言葉にすずかは思わず突っ込む。

「…………」

そんな二人をティアナは静かに見ていた。

「まあ、そんな事よりもねえティアナ」

「…………何ですか？」

「久しぶりの六課はどう？」

零が意地悪でこの問いをしているのはティアナもすずかも簡単にわかつた。しかし、ティアナは特に表情を顔に出すこともなく淡々と答えた。

「別に特にこれといって……」

「ふーん」

元々あまり興味が無かったのか零はそれ以上聞いてこなかつた。

「あれ……もしかして……」

「?.どうしたのすーちゃん？」

すずかが引きつった顔である一点を見ていたので零もつられてそちらを見ると、誰か土煙を起こしながらこちらに走ってくる人影があつた。

「げ……」

視力の良い零は直ぐにその人物が誰だかわかりすずかと同じく顔が引きつった。

「？」

何故そこまで顔を引きつらせるのか不思議に思い、ティアナもそちらの方を向いた。

よく見るとその人影はアリサでしかも鬼気迫る顔でこちらに全速力ダッシュしていた。

「れへいへー！」

こちらに一定の距離まで近づくとアリサはそのままジャンプキックを零に放つた。それまでの行動が鮮やかすぎて、零も一瞬その光景に目を奪われた。

「つてちよーー？」

我に返つたときにはもうアリサの足が目前に迫っていた。

「喰らうえええーー！」

「もひつぶーー？」

顔面にまともに蹴りを喰らつた零は数メートル後ろに吹き飛んだ。

『…………』

突然の出来事に固まるすずかとティアナ。

「つー、零君ー?」

我に返つたすずかは慌てて零に駆け寄つた。

「大丈夫!?」

「な……何とか」

よろよろしながら立ち上がる零。

「れーいー」

まるで地獄の底から響くような声にはっとなり恐る恐るアリサの方を向く零。

そこには修羅がいた。

「あ、アーチャン?」

「アーチャン言つな……零、私に何か言つ」と無い?

「ハハハ笑つているのに怖い。ぞくつと身體にしながら零はしもどろしながら言葉を紡いだ。

「えーと、何?」

「わ……わからない?」

「ハハハながらゆっくりと零に近づくアリサ。

「まづ一つ、ホテルの件……私だけドレスの着たかったのよ……」

「痛い痛い痛い！！」

零に十字固めするアリサ。

「そして二つ……私やネバールに何も言わず、Re-C?DEにテイの子アナ入れた事よ！！」「ギヤアアア！ギブギブ！！」

さらに締め上げるアリサ。そんな一人を見て、すすかとティアナは揃って嘆息した。

「…………」

少し離れた所から四人を見つめる者がいた。

「……何を……している？」

処刑人アサシンだった。現在はドーパント状態では無く、人間体だった。あの日以来、処刑人アサシンは零が外に出るたびにずっと尾けていた。正直な所処刑人アサシンは何故ここまで零に執着するのか自分でもわからない。

知りたい。あいつを夢壘零の事を。

「お前は……何なんだ？」

処刑人アサシンの言葉に答える者は誰もいなかった。

『…………』

空気が重い。機動六課部隊長八神はやてはそう思った。
自分のユニゾンテバイスリインもネバールの髪の中にびくびくしながら隠れていた。

改めてこの空気の元凶の方を見た。

そこにはお互にそっぽを向いている機動六課スターズ分隊高町なのはと元機動六課フォワードで現Re-C?DE07ティアナ・ランスターがいた。

その側では、零が愉快そうに笑つており、隣りにいるすずかはすずかでおろおろしていた。

はやはつていなつたはやはつと思つた。

はやはつていなつたはやはつと思つた。

あの後、零は何とかアリサに解放されて、ティアナに案内を頼んだ。

「へえー中々いい場所だね」

零が六課の廊下を見ながらそつ笑いた。

「まあそれでもあそこの設備にはありますよ」

ティアナが前を歩きながら振り返らないで言った。あそことはRe-C?DE本部の事であろう。

「あれと比べられたらい困るよ」

Re·C?DE本部は現在の技術でも再現出来るかどうかわからないほどの優れものだ。そんじょそいらの建造物とは比べてはいけない。

「……です」

そうティアナが指さす方を見るのはやがいの部隊長室があつた。

「失礼しまーす」

そんな軽薄そうな言葉と共に零が部隊長室に入ってきた。
中にははやてとフハイト。そして、不安そうにしているのはがいた。

「やあ三人ともこいつやつて顔を合わせるのは久しぶりだね」「……せやな

「コニコ笑つている零に対してはやはては少々怖い顔で返した。

「怖い怖い……まあ

言葉を切り、ちらりとティアナの方を向いた。ティアナは無表情で立っていた。

「話でもじょりつか」

あれから場所を移し、会議室に向かった零達。そこで途中ネバールと一緒にいたリインと合流し、お互い対面に座った。

「さて……じゃあ話を始めよつか」

零が切り出すと、はやてが不機嫌そうに言った。

「……ホンマにティアナを引き抜く気やか……」

「ああ。彼女の能力はきわめて高い。ここで生かし切れていないのなら、生かし切れるところで働くのが一番良いのを」

「生かし切れないと……」

なのはが抗議するように叫ぶ。

「やうだろ?これまでの戦闘映像を見たけどねえ……」

「どうやって映像を入手したか知らないがなのはは零にかみついた。

「ちょっと待つて!私だってちゃんと訓練メニューとか考えてやっているんだよ!?」

「訓練メニューねえ……意味あるのそれ」

椅子にもたれながらあぐいをかみ殺しながら言つ零。

「なつ……意味あるに決まつて!じゃ無ー!」

バン!と机を叩いて声を荒げて言つなのは。

「なのは落ち着いて……」

フェイトがなのはを落ち着かせようとすると、なのはは止まらなかつた。

「零君にティアナの戦闘方法がわかるとでも…? わからぬでしょ! 私はこれまで六課でのティアナをずっと見てきたのよ!」

ピクリと僅かに身じろぎするティアナ。それに気づかずなのははさらうにヒートアップする。

「大体! 零君はティアナの一部分しか見ていないのよ! そんなだからそんな事が」

なのはの言葉は途中でストップした。ティアナがバン! とテーブルを叩いて立ち上がったからだ。

「ティ……ティアナ?」

恐る恐るティアナに問いかけるなのは。その表情は前髪に隠れて見えない。

「……って」

「えつ?」

「黙つて聞いていればさつきから!」

ぱつと顔を上げるとティアナはビシ! つとなのはを指せし、ティアナは言い始めた。

「あなたが! 私の何がわかるって言つたですか! ? いつもこつも自

分の考えばかり押しつけて！」

「なつー！考え方を押ししつけるなんてそんな……私はティアナの事を思つて……！」

「何が思つているですかー。自分の満足出来る結果さえ出ればそれで良いんでしょうー？」

「ティアナ！それは聞き捨てられないわね！私はちゃんとみんなが六課が解散した後もちゃんと活躍出来るようにしてー。」

むーと睨み合つてこるなはとティアナ。やがて同時にフンと顔をそっぽに向ける。

そして今に戻る。

「さてと……二人とも本音をさらけ出したね？」

零がそつそつと畳が零に注目した。

「零君……？」

「実はティアナのRe-CODE参入には理由があつたんだ
「理由？」

零は椅子から立ち上がり、ゆっくりと会議室を歩き始めた。

「僕はヴェントやネバールから六課の戦闘や訓練について報告を受けていたんだ

皆驚きネバールの方を向く。ネバール本人は相変わらず無表情だつたが。

「その時、色々問題が浮かんだけど、その辺はこれから改善出来る問題だつた。しかし、」

零はなのはの後ろに立つとなのはの頭に腕を乗つけた。

「いや！？」

「ティアナの問題はビリしても片付けないといけなかつた。このままで下手したらとんでもないことになりかねないからね」

そこで口を開じ、少しづて零はため息をついた。

「もつとも……それらしい出来事は起きてしまつたけど」

零はおそらくティアナのドーパン化を言つてゐるんだろう。なのはは俯いてしまつた。

「そしてあの時の状況の事をヴュントに聞いたんだけど、あのままじゃなーちゃんが自分の考えをティアナに押しつけるんじゃ無いんじゃないかと思つてね」

なのはの頭から腕を引け、なのはを見下す零。

「……ねえなーちゃん。人はね言葉にしないとわからないことだつてあるんだよ？誰もが自分の考えを何も言わずに理解出来るなんてそう簡単にできるわけ無い。そんな事小学校高学年でもわかることだよ？」

「……っ」

何も言い返せず黙つているのは。

「だからじゃ、僕……いや僕とウントはこの計画を立てた」「計画?」

フェイトの言葉に頷く零。

「もしもなーちゃんが本当にティアナの事を思つているならティアナを六課に返そう。逆に六課に返すべきでは無いと判断したら、R e - C? D Eにそのまま入れる。もう六課メンバーとは関わらせないという事にしたんだ」

『.....』

事情を知らない者は一様に皆黙つてしまつた。

「ねえ、なーちゃん僕が言つたあの時の罪、わかった?」

フルフルと無言で首を振るのは。

「あの時僕が言つた罪は……自分の”決断”を他人に押しつけたこと」

「決断を押しつけたこと……」

「”決断”は自分でしないといけない事。それをなーちゃんはわかつてない。だからこそティアナの魂の叫びに気づけなかつた」

なのはティアナの方を向くと、ティアナは困つたような顔をしているが、どこか苦笑しているような複雑な表情をしていた。

EPISODE 1-9（後書き）

いかがでしょうか？感想とか待っています。
なのはは自分の考えをティアナに押しつけているような気がしたので
このような話を考えてみました。
今日のフォーゼはかつこよかつたなあ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6170t/>

永遠の悪魔と魔法少女達の物語

2011年10月10日03時09分発行